

『それぢやア君に見せやう、』とスコウオロードニコフは精しい書名から出版年月、出版書肆までを挙げた。

『時に其の色男に西伯利亞の或る縣知事に左遷されたさうだノ。』

『そいては宜からう。坊主が十字架を持つてお出迎に来るだらう。が、同じくは渠奴と意氣相投する同臭味の坊主を出したもんだが、我輩が一人世話をしてやらうかな、』とスコウオロードニコフは焰残りの紙笈を皿に投げ込んで復た髯を口に捻り込んで前歯で噛み始めた。

其時廷吏は會議室に来て、マースロワの控訴裁判にネフリユードフと辯護士とが出席したいと云ふ請求を通じた。

『此事件は實に小説的だ、』とウォルフはネフリユードフとマースロワとの關係に就て知つてるだけを一同に話した。で、各議官は此件に就て些とばかり談合してから茶と煙草をお終ひにして再び出廷し、先づ誹毀事件の判決を申渡してから後マースロワの事件に取掛つた。

ウォルフは甲走つた聲で詳しくマースロワの控訴理由を報告し、勿論多少の偏見が無いでは

ないが、原判決を破棄すべき明白な希望を十分に陳べ立てた。

『何か陳述する事がありますか、』と裁判長は辯護士に向つて云つた。

フアナーリンは突と起立し、幅の廣い胸を突出しつゝ、人の心に浸徹るやうな不思議に力のある辯舌で、刑事法廷が法の適用を誤まつた六ヶ條を一々精密に秩序を立て、證明し、且簡單ながら原裁判の效力から判決の不當極まつてる事に言及し、且又、職務上委託された義務を濟ますが爲めに己れよりは數倍勝れた明敏なる洞察力及び法律智識を有する各議官閣下に對して餘儀なく饒舌せねばならぬといふ謝辭を簡潔な力のある辯で陳謝して議論を結んだ。

フアナーリンの辯論を聞いた者は、誰しも元老院が前裁判を破棄するに就て何等の疑ひを留めないと思つたであらう。フアナーリンが辯論を終つて勝誇つた微笑を含みつゝ四邊を見廻した時はネフリユードフも確かに訴訟が勝つたものと安心するやうな氣がした。が、各議官や檢事は笑ひもせず得意にもならず、宛も飽き／＼したといふ體で、『そんな理窟は何度も聞飽きてゐる、無益だよ』と云はぬばかりに、辯護士が漸つと無駄口を叩くのを止めたのを満するや

うに一向無頓着に冷まし込んで来た。

辯護士の辯論が終るや否、裁判長は検事の方を見ると、セレーニンは控訴の理由は惣て薄弱なるが故に原裁判の判決を動かすを得ずと極簡単に明白に陳べた。

之が濟むと各議官は會議室に退席したが、其説は二派に別れて、ウォルフは再審に附する説を立て、ベイも亦事件の真相を洞見して、前裁判所の法廷の模様を目に見るやうに裁判長の疎忽や陪審員の失策を綿密に述べてウォルフの説に賛成した。裁判長のニキーチンは何時でも敵役で少しも假借しない方だから反對側に立つた。残る處はスコウオロドニコフの意見次第であるが、此男はネフリエードフが道徳上の理由から墮落女と婚禮しやうといふ決心が甚だ氣に喰はなかつた故に控訴を棄却する方に左擔した。

スコウオロドニコフはダーウキン主義の唯物論者で、總ての道徳の發現は魯か、甚しきは宗教までを頗る愚劣なものと賤しみ、這般な事に口出するは恥辱だと思つてゐた。夫故に堂々たる元老院に於て有名なる辯護士或はネフリエードフ公爵ともあらうものが一賣淫婦の身上

に就てワイ々騒ぎ立てるのを片腹痛く思ふ、髯の尖を前歯で噛みながら故意と何事も知らないやうな風して、唯控訴の理由が不十分であるから、原裁判の判決を動かす事は出来ぬとばかり主張して裁判長の意見に賛成した。

斯の如くにして控訴は不成立に終つた。

## 第二十二回

『恐るべき哉』とネフリエードフは書類夾の書類を整理しつゝある辯護士と共に待合室へ行かうとして、『このくらゐの明白な事件を杓子定規で棄却して了うてのは、實に恐るべしだ。』

『抑々、刑事裁判所からして瑕瑾をつけられたのだ、』と辯護士は云つた。

『セレーニンまでが矢張棄却説を執るつてのは、實に恐るべし、恐るべし、』とネフリエードフは燥返しつゝ、『さて如何したもんだらう？』

『皇帝陛下へ請願なさい。爰に在る間に貴下から直接に請願局へ出すのですナ。我輩が草案を

作りませう。』

此時、小作りのウォルフは星章を附けた制服で待合室へ来て、ツカ／＼とネフリユードフの傍へ進んで、『誠にお氣の毒でしたが、如何も致し方がムらぬ、控訴の理由が餘り薄弱だからノウ、』と云ひつゝ狭い肩を揺つて眼を閉ぢつ、聽て去つて了つた。

其踵からセレーニンが舊友のネフリユードフが來てゐると聞いて出て來て、

『爰で君に會はうとは思はなかつた。』と哀れッほい眼をして、唇邊にだけ微笑を含みつゝネフリユードフの傍へ來て、『君がベテルブルグに來てゐるとは知らなかつた。』

『僕も君が検事になつてるとは知らなかつた。』

『検事ぢやない、副検事だよ、』とセレーニンは友の言葉を直しつゝ、『だが、君が元老院に來るつてのは什麼いふわけで？ ベテルブルグに來てゐるつて噂は仄と聞いたが、何しに爰へ來たんだネ？』

『爰へかネ？ 罪がなくて不當な宣告を受けた女を助けてやりたくて、正當な裁判を受けに來

けに來たのだ。』

『何て云ふ女だ？』

『今、判決の定つた女さ。』

『あッ、あのマースロワの一件か、』とセレーニンは喫驚して、『だが君、あれなら控訴の理由はなげ。』

『控訴の理由も絲瓜も無い、左に右く何の罪も無くて刑を宣告されたのだ。』

セレーニンは嘆息しつゝ、『夫は爾うかも知れんが、併し——』

『爾うかも知れん事はない。爾うに違ひないのだ。』

『君は又奈何して巨細を知つてをる？』

『僕は陪審員だつたから、陪審員が手落をしたのを能く知つてをる。』

セレーニンは頻りに思案しつゝ、『其時、君は定めし抗告したらうナ？』

『抗告した。』

『そんなら公判録に載つてゐる筈だ。此事が控訴狀に書加へられてゐたなら——』

『爾うしたら宜かつたかも知れんが、決定書夫れ自身が既に愚を極めてゐる。』

『だけでも元老院は其様な事まで追究する権利を有つてゐない。若し元老院が陪審員の決定書夫れ自身までを審議して原裁判の判決を破毀したなら、陪審員の決定書は無意味になつて了つて、正義を維持するどころか却て蹂躪するやうになる。』

『其様な理窟は僕は知らんが、全く何にも罪を犯さない者が不當な宣告を受け、シカモ之を救ふ最後の綱が切れて了つたのだ。』

『尙だ必ず確定した譯でもなからう。元老院は總て前判決の基礎たる決定書の效力に追究しないし、又追究する事が出来ないのだ』とセレーニンは眼瞞きしながら云つた。

此男は常から職務が忙がしくて餘り世間に顔出しをしないから、ネフリユードフの小説咄を一向知らないらしいので、却て何にも咄さないのが上分別だと心中に思つた。

『時に君は多分叔母さんの處に在るんだらうネ?』とセレーニンは話頭を轉じやうとして、『昨

日君の叔母さんから君が來てゐると聞いて、昨夜は難有いお説教があるから旁々君に會ひに來いと案内を受けた。』と再び唇邊にだけ微笑を浮べた。

『僕もお説教を聞かされたが、イヤハヤ堪らなく嫌な心持がした。』

『奈何して嫌な心持がした? 凝り固まりのお宗旨かも知れんが、左に右く矢張宗教心の發現には違ひない。』

『宗教心か何か知らんが、實に愚極つたものだ。』

『爾うでないよ。我輩は却て此露國に生れながら我々正教會の教義に暗くて根本の信條をさへ何か新らしい天啓でも聞くやうな氣がしてゐる人達を奇怪千萬に思つてゐる。』とセレーニンは己れの宗教に對する見解を故友に知らせやうと早るが如くに云つた。

ネフリユードフは訝かしげに凝焉とセレーニンをみると、セレーニンは伏目になつてゐたが、其眼には嘗、悲しさうなばかりでなく、不快の色さへ見えてゐた。

『夫ぢやア君は正教會の信條を奉じてゐるのかネ、』とネフリユードフが尋ねると、

『無論、奉じてゐる、』とセレーニンは艶の抜けた眼で凝乎と見ながら答へた。

ネフリユードフは嘆息しつゝ、『夫は妙だ、』と云つたぎり口を緘んで了つた。

『だが、其内に煖乎と話しをしやう、』とセレーニンは云掛けた時、廷吏が恭やかに其傍へ來たので、

『今、行く、』と云ひつゝ、再びネフリユードフに向つて、『其内是非最上一遍會はう。だが、君は家に在るかネ。我輩は七時の飯時には必ず在る。處はナデーヅデインスカヤだ、』と番地を示しつゝ、『あれ以來種々な事があつたから、話したい事が山ほどある、』と復た唇邊に微笑を含みつゝ行かうした。

『行かれたら行かう、』とネフリユードフは氣の乗らぬ調子で云つた。が昔しは一番親昵の親友であつた男が、今では縱令敵でなくとも赤の他人の遠い遠い氣心の解らぬものとなつて了つたのが、此の短い立咄しで十分解つたやうな氣がした。

## 第二十三回

ネフリユードフが能く知つてる書生時代のセレーニンは溫和しい息子で、實意のある朋友で、  
 齡に較はしては學問のある世才に長けた風采の立派な正直な親切氣のある好人物であつた。餘  
 り勉強もしなかつたが物覚えが能くて、何度も論文で金牌を貰つたが、更に學問を鼻に掛ける  
 やうな事はなかつた。で、口頭ばかりでなく眞實人間の道を盡すのを若い時分からの目的とし、  
 此目的を果さうといふには官吏となるより他に道がないものと思ひ、學校を卒業するや否、各  
 方面の吏務に一通り服して、萬遍なく經驗してから後、己れの手腕を働かすには法律を制定  
 發布する高等法院の第二部に入るが一番だと思つて奉職した。が、就職して見ると、到つて細  
 かな面倒臭い手の込んだ仕事のごたくさ有るに係らず、技倆を見せやうといふには何だか物足  
 りないで、心から立派な仕事と思ふ氣になれなかつた。

で、下らぬ事にコセ／＼して空威張する上官と接する度毎に益々不平が募つて來たので、到

頭逃出して元老院に轉じた。然るに高等法院よりは少しは勝しだといふばかりで、同じ不平は矢張附いて廻つたから、世の中の事は豫て望んでゐたり又必ず慙うなければならぬと信じてゐたりしたとは全で見當が偉つたやうな氣がした。

元老院在職中、親戚の世話で侍從職の位置に有附き、金モールの大禮服で世話になつた人達の家を禮廻りに馬車で乗廻して頗る得意であつたが、扱て熟々と老へれば、慙ういふ官職が必要である所以が如何して解らず、元老院に勤めるよりは一層下らなく、到底立派な仕事とは思はれなくなつた。が、今更辭職も出来ぬといふは、折角自分を喜ばせやうと思つて世話して呉れた人達の好意に對して濟まぬ上に、一つは自分の劣等な根性から若干か満足し、鏡に對つて金モールの禮服姿を映して見たり、役向に對して人からチャホやお辭儀をされたりするのが何となく嬉しくて堪らなかつた。

婚禮した時にも矢張之と似たやうな事があつた。世間並の眼から見れば此上もない立派な縁組を申込まれたのであるが、直ぐ二ツ返事で承諾した重なる理由は、若し拒絶つたなら折角乗

氣になつてゐる當の本人を失望させ、且橋渡しをして呉れた人達の好意を無にして腹を立たせやしまいかといふ遠慮であつた。尤も夫ばかりでなく、氏も素性も正しい門閥の美しい娘と婚禮するのが自分の虚榮心に投じて好しかつたからでもあつた。が、婚禮して了うと間もなく、慙ういふ婚禮をしたのは元老院や宮内省の役人をしてゐるよりも愈々益々下らない餘り立派な咄でないと氣が附いた。

總領の子を設けてからは嫁御寮は最う子を産まないと決めて了つて、華美な當世向きの生活を仕始めたから、良人たる身は忌應なく此のお相伴をしなければならなかつた。

實の處、此細君は格別目に立つ美貌ではなかつたが、併し良人には貞實であつた。が、精一杯に當世風の生活をして、矢張面白くなつて唯クサ／＼するばかりだつたが、夫でも飽きずにな何がなして面白く止しく暮さうと骨を折り、慙ういふ生活方が良人の生命を縮める毒にならうとは一向知らなかつた。セレーニンはセレーニンで、時偶は細君好みの生活を變へやうとした事もあつたが、朋友親戚を後楯にする『世の中は慙うしたものだ、慙うあるべき筈だ』とい

ふ細君の生悟りに對しては玉子を石垣に打付けるやうにイッデモ微塵に粉碎されて了つた。二人の間に生れた小さな女の兒は可愛いゝ足をヌウツと出し、房々した黄金色の髪を長く垂れて縮らしてゐたが、セレーニンは這般な風に育てたくなかつたのだから、全で他人の子を見るやうな氣がした。恠ういふ鹽梅しきだから夫婦の間には何時となく垣を作つて世間に珍らしからぬ誤解を生じて、表面は奇麗に塗蔽してゐたが、他所目には解らぬ無言の喧嘩を徐々始めた。セレーニンの家庭生活は夫から以來お荷物になつて、餘り面白くも思はぬ勤め向きや身分よりも猶一層厄介な飛んでもないのになつて了つた。

が、何よりも一番怪しからぬはセレーニンの宗教に對する態度であつた。當時の青年は誰でも理窟が少し解つて來れば各自が育てられた宗教の迷信の枷を容易く破して了うが常で、セレーニンも矢張他の者と同様に何時とはなしに自由思想を抱くやうになり、ネフリユードフと交際した學生時代には人間が正直で眞直だつたから、國教廢止を欲する己れの希望を眞向に振擧して少しも秘さなかつた。が、年を経て役人となつてからは、若い時分の一本調子では通らず、

殊に保守的反動の盛んな社會では自由思想が出世の邪魔となつた。一家の中でも、例へば父が死んで法律を營むとか、母が世間を楯に精進を強に守らせるとか云ふ事がある。其様な私事は別としても、政府の役人となつてると、種種のお難有い儀式に参列しなければならぬ。恐らく唯の一日だつて全きし宗教儀式をしなくて済ます事は決して無いのだ。であるから此の間に處するには、信じないものを信じてゐると偽はる欺、でなければ信じないものは飽くまでも信じないで押通すかの二つの中の一つを取らなければならぬが、根が正直な彼には信じないものを信じてゐると偽はる事は到底出來ない。さればとて正直の必持を露出しにして押通さうてには、是等の妄誕極まつてる儀式に参列しないで済むやうに生活を變じなければならぬ。が、凡て何でもなく見える事でも、扱て實行するとなると中々容易ならぬもので、自分の所信を曲けまいとすれば勢ひ近親朋友と面白からぬ衝突を絶えず仕なければならず、第一には官を退いて、現在は素より今後とも益々官の爲めに勵精して以て人間の道を盡さうといふ初一念の抱負を盡く絶つて、公私共に全く境涯を一變しなければならぬ。勿論、之までに思切つて一切を懐

牲にするには自ら正義を任ずる餘程の確信がなくては出来ぬが、苟くも聊かだに歴史を辨へ宗教殊に正教會派基督教の起原及び發展を心得てゐる教育あるものなら此位の確信を堅く執つて動かないのが當然であるべき筈で、セレーニンも亦、正教會の教ふる信條を、認しないのが即ち正當であると思ふ外は無かつた。

が、日に／＼周囲の壓力に制へつけられては、セレーニンの如き小心翼翼たる正直者はツイ些とやそつとの虚偽を許するやうになるのは據る結果で、凡そ不道理なものに對して公平ならんとせば先づ此不道理夫れ自身を研究しなければならぬと云出すやうになつた。此の小さな虚偽を容れたのが抑もの間違で、到頭今日は大きな虚偽の中に陥り込んで了つた。

凡そ宗教を研究する順序を云つたなら、先づ己れが生きて以來育てられた正教會——即ち周圍の者が寄つて集つて奉じさせやうとし、奉じなければ世の中の人の爲めに盡さうといふ一切の働きを止めて了はねばならぬ——此教會の正教旨の中に真理がある乎否乎を先づ疑ふべきであるが、セレーニンは此質問を起す前に真理があるものと前提を獨斷して置いて、扱て腹の底

の底では確かに不道理と認めてゐながら強て論理を附會しやうとする。そしてヴォルテールとかシヨーベンハワーとかスペンサーとかコントとかは頭から顧盼いて見ないで、ヘーゲルの哲學書やヴネー又はホミヤーコフの宗教書を読み、兒供の時から教へられた正教會の信仰の證明及び安心といふやうな事は論理上では逆も承服出来兼ねるが、左ればとて信じなければ一日も安住してゐられないから、奈何がなして此斷見的信條に似寄つたものを得たいと憧憬を抜いた末が、漸とことごとくヴネーやホミヤーコフに類似の教理を發見する事が出来て安心した。

で、人間一個の智慧では到底眞理を知る事は出来ない、眞理は天啓に由てのみ有縁の信者に示され、此天啓は唯だ正教會にのみ示現されると云ふやうな種々のお難有い事を證明する版で擦したやうな牽強附會の説を奉ずるやうになつた。夫からと云ふものは自ら妄誕不稽であるのを忘れて、安心して祈禱會や死んだ者の法事に出でたり、懺悔したり、聖像の前で十字を切つたりして、何よりも大切に思ふ官途にも勤續して、一家の面白からぬ境涯からも免れる事が出来た。



だが、之ほどに信じてゐたなら十分安心してゐられさうなものだが、腹の底では矢張何となく不安な心で、自分の行つてゐる事一切を引括めて何よりも信仰が一番不立派であるやうな氣がしてゐた。夫故に心が晴れくしなしないで眼中常に憂を帯びてゐた。其中で——自ら欺いてゐる虚偽が尙だ十分根を張り切らない中に昔の親友のネフリユードフに會つたのだから、青年時代の自分の本領を忽ち憶し、加之も何と思つてか周章て、宗教に對する現時の自分の見解を臆はしたので、愈々益々自分の信仰の不立派極まつてゐるのを一層染々と感じて痛く弱り込んで萎れて了まつたのだ。ネフリユードフも久し振で舊友に再會した歡喜が過ぎて了うと忽ち夫と直ぐ氣が附いた。

夫だから二人は最う一度會つて話さうといふ約束をしたきりで、二人ながら互に訪ひも訪はれもしないで、ネフリユードフがベテルブルグ逗留中に頭會はずに了つた。

## 第二十四回

辯護士ファナーリンとネフリユードフとは元老院を出てから後ろに馬車を牽かせてボツ／＼と歩いた。道々、辯護士は議官連が頻りに噂さしてゐた或る局長の珍聞事件を話し初した。奈何して此事件が露顯に及んだか、奈何して又元來なら法律上鑛山に遣られて然るべき筈の男が西比利亞の或る縣知事に轉任したものだか、此の鼻持もならぬ醜聞の顛末を逐一話してから後今朝方通り過した建立中の紀念碑の贖金を知名の某々が費消した件やら、某の夫人が株式相場をして數百萬儲けた事やら、それがしとくれがしとが納得づくで金と女房とを交換した事やらを面白さうに饒舌り、續いて上流社會の人達の詐欺だの其他の犯罪だのを陳べ立て、慙ういふ連中はドンナ罪を犯しても監獄へは入れられないで却て局長とか部長とか種々の椅子に有り附けるのだと云つた。這般な醜聞は逆も話し切れない程ファナーリンは知つてゐて、之を饒舌り立てるのが如何にも愉快さうなは左も有るべき筈で、ベテルブルグの高等官吏輩の得意の醜聞と較べたなら辯護士が職業上金を儲けるのは遙かに正當で正直なのを明白に證するに足るからであるが、ネフリユードフには根ツから面白くなく、何時まで聞いてゐても果しが無いので、尙

だ話の切れない中に突然訣別をして辻馬車に乗つて了つた。辯護士先生は呆氣に取られた。

ネフリユードフは、情々情なくなつた。愈々控訴が棄却となれば、罪も無いマースロワが現に受けつゝある無意味の苦痛は確定し、勢ひ運命を共にする自分の苦痛も益々増して来たから心中快々として樂まなつた。搗てゝ加へて世には種々の言語道斷なる罪惡が白晝公然と上等社會に行はれて、シカモ是等の犯罪者が何の制裁をも受けないで意氣揚々としてをると聞いたり、且又昔しは無邪氣で磊落で淡田で高尚であつたセレーニンから冷淡極まつた不親切の待遇を受けたりしたので益々ムシヤクシヤして堪らなかつた。

家へ歸ると支關番が手紙を渡して、妙な女が支關まで来て此の置手紙を書いて行きましたと輕蔑するやうに云つた。見るとシユーストワの母の手紙で、娘のお禮に參上つたがお留守で残念だと呉々も恩を謝し、ゾーホーワに關する一條では是非お目に掛りたいか、ワシーリエフスキ一町五丁目何番地の家へ甚だ恐入るが訪ねて貰ひたいといふ文言である。ゾーホーワの事なら是非とも會ふ必要はあるので、チャホヤお禮を云はれるのはドツとしないが、开んな事に關つ

てゐられない。且手紙の文言から推しても、會ひたいのが希望で、喋々しくお禮を陳べ立てるやうな懸念もなさゝうだ。明日の朝は都合して尋ねやうか知らんとも思つた。

猶だ最う一本手紙が来てゐた。以前の同僚士官で、今は皇帝の侍從武官となつてゐるボガチレーフからの來狀である。豫て此男には宗門一件に關する請願書の執奏を頼んで置いたのだが、此手紙に由ると、勿論約束通りに陛下のお手元に請願書を出すのは承知したが、併し一應は先づ宗務を總括するトポロフに會つて話すのが順序で、且手続きを踏んで置く方が却て上策である云つて來た。

過ぐる數日間の失望で、ネフリユードフは此上何事をしても到底無益だと云ふ感情がした。モスコで考へて計畫の如きは、恰も世の中へ飛出したら直ぐ眼が覺めて了う少年時代の夢のやうな空想と同様だと思つた。が、現在ベテルブルグに來た以上は一旦計畫したものを一と通りは行るのが即ち己の義務だと信じて、明日はボガチレーフと相談してから、教務一切を掌る當局者とも面會しやうと決した。

で、書類夾みから宗門一件に關する請願書を出して更に讀返してゐる處へ、叔母なるエカチリーナ夫人から茶の案内の使方が來た。

ネフリユードフは今直ぐ行くと答へつゝ、書類を再び元へ收めてから叔母の部屋へ行かうとして、其途中で窓から戸外を覗くと、見覚えのあるマリエットの紅栗毛の二頭立の馬車が玄關前で待つてゐたので、忽ちボウツと面熱りがして思はず腹の底でニヤ／＼と仕掛けた。

マリエットは帽子の儘のケバ／＼しい華美な色けの交つた軽い衣服で、伯爵夫人エカチリーナの安樂椅子の傍に椅子を寄せ、コップを手にしつゝ美しく愛嬌のある眼に一杯の笑を漲らして頻にお饒舌りをしてゐた。丁度ネフリユードフが入室つて來た時、少と猥褻つた話をしてゐたのは其の突ひ方で直ぐ理解めた。

鼻の下に淡墨を抹つたやうに髯を生やしたお心善しの伯爵夫人は肥つた身體を揺ぶつて轉けるやうに笑つてゐた。マリエットは口を少し横へ曲け、首を傾けて、晴れ／＼した元氣な顔に氣の毒らしい面地を浮べつゝ、凝焉と無言でエカチリーナ夫人の顔を見てゐた。

ネフリユードフが小耳に挟んだ一言二言で直推察された二人の話はベテルブルグの新聞の第二面に出た西比利亞の新任某知事の醜聞一件で、二人は此話で腹を抱へて轉け返つてゐたのだ。「貴姐は痛いよ、這般に笑はせられると死んで了う。」とエカチリーナ夫人は咽返りながら云つた。

『御機嫌能う、』と云ひつゝネフリユードフは席に着き、腹の底ではマリエットの浮すつた蒸振を賤みつゝ眞面目に苦り切つてゐると、早くも其眼色を見て取つたマリエットは、ネフリユードフの機嫌を直したいが精一杯で、忽ち顔色ばかりか心持までも變へて了ひ、急に眞面目臭つて、自分の境涯が面白くなくて何だか物足りないやと云ひたけな容子をして見せた。尤も強ち全然心に無い事を顔に出した けでなく、眞實多少か物足りないやうな氣がして、何となくネフリユードフの現在の心持と似てゐるやうにも思つてゐた。と云つてネフリユードフの心持を慙うと口へ出して云ふ事は無論出来なかつたが。

マリエットは先づネフリユードフが關係してゐる種々雑多な事件の成行を訊いた。ネフリユ

ードフは元老院に於ける敗訴と舊友セレーニンに面會した顛末を話した。

「あつ、あのセレーニンさんですか。潔白な方ですネ。あの方なら一點の申分もない立派な紳士ですワと二人の婦人は申合はしたやうにセレーニンを褒めそやすベテルブルグの交際社會の通り言葉を異口同音に云つた。

「彼の男の妻は如何な人間です？」

「あの方の奥さんかエ？」とエカテリーナ夫人は、「他人の影口を利きたかアないが、あの奥さんには旦那さんの人物が解らないのサ。」

「ですけれども彼の方までが控訴を棄却する側に立つてのは餘程妙ですワネ、」とマリエットは全く心底からネフリユードフに同情つて、「まあ、何たら事つてせう。マースロワさんはお氣の毒ですワネ、」と吻と嘆息を吐いた。

ネフリユードフは澁面を作りつゝ話題を變へやうとして、マリエットが口を利いたお庇に放免されたシューストワの咄を初めた。先づマリエットの盡力の禮を云つてから、シューストワ

が這般な災難に會つても誰一人口を利いて其筋に運動して呉れるものが無いといふ苦情話をしやうとする途端、マリエットは話の腰を折つて自分の憤慨を饒舌り出した。

「最う何にも仰しやつて下さる勿。妾も良人が、夫なら放免してやると云つた時はグツと來ましたワ。妾が一と言頼めば直ぐ放免して宜いやうな罪のないものなら何故今まで監獄に入れて置いたんでせう？」と丁度ネフリユードフが云はうとした事を云つた。「實に言語道斷ですワ。」

エカテリーナ伯爵夫人はマリエットが自分の甥に戲謔つてゐるのを見て面白がつてゐた。で、二人が言葉の途切れたのを見て、「お前さん、明日の晩はアリーの許へ行かないかエ。キーゼウエツテル師が言える筈だ、」と、今度はマリエットに向つて、「貴姐もネエ。」

「彼の方はお前さんにお氣が附いたよ。」とエカテリーナ夫人は再び甥に向つて、「妾に種々お訊きになるからお前さんの奔走してゐる事件のお話しをした處が、夫は殊勝な事だ、必ず基督の御手に縋つて來る有縁の證據だと仰しやつたから、是非最う一遍聽問しなれりやネエ。マリエットさん、貴姐からも能く云つてやつて下さい。夫から貴姐もネ。」

『併し奥様、妾は何事にしろ公爵にお勧めするだけの権利はふいませんワ、』とマリエットは云ひつゝネフリユードフと目眊せした。此目眊は伯爵夫の言葉を初め一般宗教に對する二人の態度を以心傳心に決めて了つた。『夫から妾なら奥様も知つてらッしやる通り、お宗には餘り顧着しませんから。』

『貴姐の御信心なさらないのは知つてます。何時でも御自分のお考で勝手な横道へとばツカリ——』

『自分の考と仰しやいますが。妾だつて極平凡な百姓女と同様な信仰なら持つてますンですよ、』とマリエットは笑ひながら、『夫に又、明晩は佛蘭西芝居へ参る筈ですから。』

『爾うく、お前さんは其の佛蘭西芝居を既う御覽かエ——何とか云ふ俳優だッけノウ？』とエカテリーナ夫人は甥に訊くと、マリエットは傍から此の評判の女優の名を云つた。

『お前さん、尙だ見物しなければ、是非、之だけは見物しなければ。夫はく、巧いもんだよ。』芝居とお説教と何方を先にしたもんでせう』と、ネフリユードフは笑ひながら云つた。

『舉足を取るもんぢやアないよ。』

『私の考だと、お説教を先にして芝居を後廻しにないと、折角のお説教が面白くなくつて了うだらうと思ふ。』

『いゝエ、』とマリエットは、『お芝居を先に見物してから、後でお説教を聞いて悔悛めた方が宜うムいますワ。』

『マリエットさんまでが一緒になつて、其處々に茶かすもんぢやアない。お説教はお説教、芝居は芝居さ。何もお説教で救はれたいからツて芝居へ行つて泣いたり笑つたりする事があるもんですか。人は信心もしなければならぬし、楽しみもしなければなりません。』

『叔母さんの方がお説教が巧い。』とネフリユードフはマリエットと二人で聲を合はして哄と笑つた。エカテリーナ夫人も詮方なしの苦笑ひをした。

『左に右く、貴下、』とエリエットは暫らくしてから、『何しろ明晩は妾どもの棧敷へ入來ッしやいませナ。』

『さア、伺へさうもありませんがネー』  
と言掛けた時、家僕は客來を報じて話の腰を折つた。新來の客といふはエカテリーナ伯爵夫人を會頭に戴く或る慈善團體の書記である。

『大變なお客様だ。那麼な愚圖々々しい男ッたら無い。烏渡會つて直ぐ還して了ひますから、少との間待つて下さい。』と云ひつゝ、エカテリーナ夫人は例の小股の早足で行かうとして、『マリエツトさん、憚りですがドミートリにお茶を注いでやつて下さい。』

マリエツトは手袋を脱ると、奇麗な平たい手の無名指が若干個の指環で燦々と輝つてゐた。『最つと上げませうか。』と云ひつゝ、妙な手つきをして酒精燈に掛けた銀の急須の柄を持つた。

マリエツトの顔色は憂を帯びて眞面目であつた。

『妾は平生から尊敬してゐるお方のお話を伺うと、自分の境涯が妙に情なくなりませす。』

と云つた時は今にも聲を出して泣き出しさうに見えた。此言葉を解剖して見たなら全く無意味のもので、縦令意味があつたとしても取止めのないものであるのは解り切つてゐたが、花

かに靦裝した若い美人が涼しい眼眸に情を含んで這般な事を云ふと、何だか特別な深い立派な意味がありさうに思はれた。

ネフリユードフは暫らく凝乎とマリエツトの顔を凝視めて眼を放さなかつた。

『貴下は妾が何にも知らずにあるとお思召してらっしゃるでせう。ですけれども貴下が現に遊ばしてゐる事は公然の祕密ですから、誰だつて知らないものはありませんワ。失禮ですか、妾は實はお志に感服して貴下が種々御心配遊ばしてらっしゃる事を樂みにして、心底から感心してゐますワ。』

『何にも感心されるやうな事はありません。夫に猶だホンの仕掛けたばかりで……』

『そんな事を仰しやつても、能く存じてをりますワ。貴下のお心持も其の御婦人の事も能く存じてをりますワ。御道理で△いますとも、妾はお察し申してをりますから何にも申上げませんワ、』と云ひつゝネフリユードフの面に不快の色があるを見て、

『夫から監督で苦んでる人達もですネ、妾は實地を見て能く解かりましたワ、』と男の心を引

付けたいばかりの女心から、ネフリユードフの一番気に入らうな話を案じ付き、『貴下は監獄で難儀してゐるものをお助け遊ばさうって云ふお思召でせう。あの無慈悲な人非人の役人共に痛い目に合つてゐる人達を見ては誰だつて生命を捨てゝも助けてやりたい氣になりますワ。妾のやうなものでさへ怨ういふ事の爲めなら生命を捨てる氣になります、人には各々の約束するものがありますから』

『すると貴姐は御自分の境涯に満足してらっしゃるのですナ？』

『妾？』とマリエットは這般な事を訊かれやうとは思ひも寄らんから、喫驚したらしく周章氣味で、『約束事でも、誰だつて各自の境涯に満足なけりやなりませんワ。妾も満足してゐます。ですけれども約束事は約束事、其外に良心でものが時々頭を持ち上げますから。』

『其の良心が鈍らしちや不可せんナ。良心の聲には是非とも従はなければナア……』とネフリユードフは何時かマリエットの涼繩に落ちて了つた。

ネフリユードフは其後屢々マリエットと口を利いたのを心に耻ぢた。で、マリエットが巧い

調子に合槌打つ口吻や、ネフリユードフが語る獄内の惨憺極まつた咄を一心に感に堪へて睨と男の顔を凝視しながら聞いてゐる時のマリエットの顔を何時までも覚えてゐた。

エカテリーナ夫人が來客を返して戻つて來た時は、二人は古い友達同士といふだけの關係でなく、世の中に唯二人ざりが意氣相投じてゐる特別の交のやうに打解けてゐた。で、互に權勢者の不義不信や薄命人の不幸難艱や人民の貧困苦痛を話したり頷いたりしてゐたが、唯の口頭ばかりの浮の空で、聲の調子と眼つきでは、『戀して下さつて？』戀してゐます、』と問ひつ答へつして、ツイ今の今までは互に思ひも附かなかつた男女間の愛が頂巔まで登り詰めて、二人は何時の間にか知らず識らずピツタリと膝を密着き合はしてゐた。

愈々歸らうとする時、マリエットは何時でも御用の時は何なりと喜んで骨を折りませうと云ひ、且明晩は是非お話し仕たい大切な事があるから、鳥渡でも芝居へ來て戴きたいと呉々も繰返した。

『夫では復た、』とマリエットは指環で燦々する手に手袋を穿めながら、『之ざりお別れして復た

何時お目に掛れるやら……』と物と嘆息をしつゝ、眼に一杯の情を含んでネフリユードフを流し  
 盼に見つゝ、『ネエ貴郎 是非明晩は来て下さいましナ。』

ネフリユードフは左も右も芝居行きを約束した。

其晩、ネフリユードフは只一人で自分の室の床に倒れ、蠟燭をブツと吹消して眠やうと  
 したが、何時まで経つても怎うしても眠らなかつた。

で、マースロワから元老院の判決、マースロワの踵を何處までも追つて行かうと云ふ覺悟や、  
 土地所有權の放棄や、夫から夫と段々に考へてゐる中に、『何時復たお目に掛れるやら』と物と  
 溜息しつゝ、ジロリと流盼に見たマリエットの笑顔が不意に目前にマザノと現はれて、自分も  
 思はず莞爾としたほどに顯然と見えた。で、

『西比利亚へ行くのが果して正義に合つてゐるだらうか？ 自分の財産を放棄するのが果して正  
 義に合つてゐるだらうか？』と腹の中で自問自答を初めた。

が、此のベテルブルグの夜、東が白み掛つて雨戸が明るくなつた時分は心が擾亂れて、何も

彼もモシヤクシヤとして、ツイ今までの心持や考を掃出して見ても、今迄の意氣込や力瘤が全  
 で抜けて了つてゐた。

『が、若し爰で氣が變つて覺悟を翻へしたら——今まで行はうとしたのは悉皆空想で、所詮此  
 空想を押し通せるものでないと思案し直したら、或は假に空想でなくて正當な事として、其の正  
 當な事を仕たのを後悔したとしたら奈何だらう、』と愚にも附かぬ質問を起して見たりしたが、  
 答へるだけの氣力が無くなつて草臥きつて疲勞して了ひ、丁度骨牌に敗けた晩のやうに身體が  
 綿のやうになつて、グッスリと眠込んで了つた。

## 第二十五回

翌朝眼が覺めた時は、前日何か飛んでもない罪を作つたやうな感じかして、左さま右さま種  
 々と考へて見たが、微塵も悪い事をした覺えは少しも無かつた。が、悪い事をした覺えこそな  
 いが、悪い考は確かに起した。カチューシヤと婚禮し土地所有權を放棄して了はうといふ目下



の覺悟は皆出來ない相談の夢のやうな空想で、這船な自然に背いた小細工を強に行はうとして  
も迎も行へないから、矢張以前く通りの生活に戻つて了はうかとフラクと迷つた。之が抑  
も怪しからぬ考へだ。

悪事こそ仕なかつたが、悪事よりも猶ほ怪しからぬのは凡百の悪事の源たる悪い考を起した  
事だ。

悪事は繰返されるものでなくて屢々悔悛められる。が、悪い考は總ての悪事を生み出す。

且悪事は他の悪事の爲めの道を滑らかにするばかりだが、悪い考は忌應なしに悪事に人を引  
摺つて行く。

ネフリユードフは左や右うと前日の考を繰返して、縦令束の間にもせよ怎うして這般な飛ん  
でもない考を道理らしく思つたらうと呆れて了つた。自分が一端怎うと決心した覺悟は是迄に  
無い難かしい事にもせよ、今日の渠としては之より外に行くべき道が無いのは能く知つてゐた。  
又以前の生活に戻るのは何の苦も無い容易な事にしろ、夫では生き甲斐のないのは能く解つて

ゐた。全く昨日の迷は、熟睡から覺めて眼が冴えくしてゐても、床を離れる時刻が既來て  
ゐても、大切な愉快な仕事を控へてゐるのが解り切つてゐても、矢張床の中に氣持よくゴロく  
と轉がつてゐたいのと同じやうなものだ。

愈々ベテルブルグに逗留するも今日限りといふ此日の朝まやきに、ワシーリエフスキー島に  
シユーストワを尋ねやうと出掛けた。

シユーストワは二階住居をしてゐた。ネフリユードフは裏階子から案内されて、食の臭か  
ブンくするボカくした臺所へ通ると、眼鏡を掛けた前垂掛の年を老つた女が腕を捲し上げ  
て、蒸氣のボウトと立つ鍋の中を掻廻してゐた。

『誰方？』と女は眼鏡越しに見つゝ、眼屹と云つた。

ネフリユードフが其名を告げると、女は満面に喜色を浮べて周章たとして、

『呀、公爵で入らっしゃいますか、』と前垂で手を拭きくゝ、『如何して先ア裏階子なんぞから入  
來しやいました。』妾は彼女の母でゝいます。既んでの事娘一人を失くします處を貴下様のお

蔭で助かりました。」とネフリユードフの手を執りつゝ接吻しやうとした。

『妾は昨日お邸へ参上りました。妾の妹が是非と申しますんで。ハイ、妹も此處に居ります。さア、何卒、此方へ、此方へ、』とシユーストワの母は先へ立つて眞暗な廊下を案内しつゝ、端折つた裾を卸して、髪を撫でつけながら、『妹は\*コレはコルニーロワと申します。御存じで在らっしゃいませう、』と臆て戸の閉つた室の前に立ちつゝ低音になつて、『矢張政治運動を致してをります。自分の妹を褒めるのは笑止しうありますが、夫は／＼中々見上げた女でいます。』

シユーストワの母は扉を掛けて狭っこい部屋にネフリユードフを通した。一と目見て直ぐ母子と解る母親酷肖の髪の毛の房々した丸顔の娘は、縞の木綿の衣服で卓子と向ひ合せの長椅子に腰を掛けてゐた。

娘と相對ひになつてゐるは露西亞風の刺繍のある襦袢を着た青年で、「く」の字なりに前屈みになつて眞黒な髻の生へた顔を突出し、ネフリユードフが來たのを鳥渡顧盼いて見たぎり二人とも談話に夢中になつてゐた。

『リデイヤ、』と母視は娘を呼んで、『ネフリユードフ公爵が來つたよ。』

娘は喫驚したやうに房さりした髪を後ろへユラリと振りながら飛上つて、パツチリした淡鼠の眼を圓くしてシゲ／＼と見た。

『貴娘がヴェーラがお噂さした所謂危険な御婦人ですネ？』とネフリユードフは笑ひながら云つた。

『はア、妾よ、』と娘は眞白な齒を露はしつゝ柔しげに無邪氣く嬌然として、『妾がリデイヤでムいます。此度はお庇様で……』と軽く頭を下けつゝ、『叔母が是非お目に掛りたいと申してをります——叔母さん、叔母さん！』と戸越しに可愛らしい聲で呼んだ。

『貴娘が監獄へお入りになつたのをヴェーラが大變お氣の毒だと云つてました。』

『先ア、爾う——』とリデイヤはにツと笑ひつゝ、『さア、何卒是へ——』と云つた時、青年は氣を利かして座を起つたので、『此方の椅子へ——さア、何卒、』と青年が譲つた破し掛つた安樂椅子を指さしながら、ネフリユードフが頻りに青年を凝視めてゐるのに氣が付き、

『之は妾の従兄弟でザハローフと申します、』と直ぐ紹介した。

リディヤと同じやうに青年は柔しげに莞爾く笑ひながら挨拶しつゝ、別の椅子を引寄せてネフリユードフと並んで座に着いた。

十六か十七になる髪の毛の房々した學校の小兒が其時復た入室つて来て、何にも言はずに突と窓框へ行つて腰を掛けた。

『ヴェーラさんて方は、』とリディヤは聽て、『叔母の一番豪いお友達ですが、妾は實はマダお目に掛らないのでムいます。』

其時、眞白な衣服に帶革を締めた到つて快活な容貌の婦人が次の室から入つて来て、

『御機嫌宜う。能く入來しつて下さいました、』と云ひつゝ長椅子にリディヤと隣り合つて腰を掛けた。

『ヴェーラは怎んな容子でムいます？ お會ひになりましたでせうネ？ 怎んな容子でムいます？ 覺悟が出来てをりますか？』

『どうして、覺悟どころですか、大氣焔です。』

『彼の人なら必と爾うでムいませう。彼の人の氣象は、妾、能く存じてをります。』

と片頬に笑を含みつゝ頷いて、『那樣な立派な象の人はムいません。人の事は何呉れとなく心配しますが、自分の事となると一切頓着しません。』

『私が面會した時も自分一身に就ては一向何にひ云ひませんかつたが、貴婦の姪御さんの事を心配して、何にも知らないリディヤさんに監獄の苦勞をさせるのが何よりもお氣の毒だと、夫ばかりを頻りと心配してゐました。』

『左様でムいますか。全くネ、姪は飛んでもない災難で、何にも知りませんが、妾のお庇で痛い目に會ひました。』

『いゝエ、其様な事ア無いワ。叔母さんが書類を持って來なくなつて、妾の方から預かつたかも知れないワ。』

『否エ、お前さんは能く知らないのサ。怎ういふ譯でムいます。』とネフリユードフに向つて、

『或人から暫らく書類を預かつて呉れと妾が頼まれました。處が妾の家でものが有りませんので、姪の處へ持つて來ますと、其晩運悪く警察から手が入つて家宅搜索を受けました。すると其書類が出ましたんで、直ぐ姪が拘引され、元來誰から預かつたと姪の口から吐かせやうと思つて今まで拘留して置いたのでムいます。』

『ですけれども妾、云ひませんかつたワ、』とリディヤは前髪を引掴みながら口早に云つた。

『お前さんが話したと云やアしないよ、』と叔母は云つた。

『ミーチンが捕縛つたのは妾の知つた事ツちやアないワ、』とリディヤは顔を赤めながら心配さうに四邊を見廻した。

『其様は咄は最うおしでない、』と母は云つた。

『何故其咄をしちやア不可なくつて。妾、云ひますワ』とリディヤは眞面目に冷まして指の周圍に髪を巻付けつゝ愈々眞朱になつた。

『昨日もお前は其話をして逆上せて了つたぢやアないか。既う忘れてお了ひかエ。』

『いゝエ、宜くツてよ。お母さん、打捨つといて頂戴……妾はネ、何を訊かれても黙つて冷ましてましたワ。ミーチンや叔母さんの事を調べられた時も妾は知らないツて云つてやりましたワ。爾うすると彼のベトローフが——』

『ベトローフてのは探偵でムいます。憲兵で、煮ても焼いても喰はれない悪い奴でムいます、』と叔母はネフリユードフに説明して聞かした。

『爾うするとベトローフは、』とリディヤは段々と氣が浮すつてセカ／＼と、『何でも白狀しなさい、誰の迷惑にもなるぢやなし、随分話に由ては是迄無益に苦しめてゐた罪の無い者を放免するかも知れない、ツて云ふんです。ですけれども、イクラ訊かれても知らないものは知らないツて強情を張つたんです。すると、そんなら宜し、話さんでも宜しい、其代りに此方が預け人を指名しても取消してはならんぞと云つて、ミーチンの名を指名しました。』

『最うお止しよ、其話は、』と叔母は云つた。

『否エ、叔母さん、嘴を容して下さるな……』と、リディヤは、前髪を引張出しつゝ一座を見

廻して『夫から想像して下さい。其翌日です、隣房の人が壁を叩いてミーチンが捕つたッて知らせてら呉れました。妾は先ア飛んだ事をしてミーチンまで連累を喰はして済まない、夫ばかりが心配で、氣が違ひさうになりましたワ。』

『だが、ミーチンが捕まつたのはお前さんの爲ぢやアなかつたのサ。』

『ですけども妾は知らなかつたから、一圖にミーチンを罪に落したのは妾だと思詰めて、檻房の中を往つたり來たりして、考込んでばかりゐましたワ。』ミーチンを罪に陥した、飛んだ事をした、氣の毒な事をした、とばかり考へて、横になつて搔卷を被つても寝つかれない。耳の傍で、お前がミーチンを罪に陥した、罪に陥した、といふ聲がするんです。神經だナ、神經に違ひ無いと、イクラ爾う思つても聲が聞えるんですから仕様が無い。何卒して早く寝て了つたらと思つても寝られないし、寧ろ何にも考へまいとしても矢張考へずにはゐられないので、眞個に慄然ッとなりましたワ、とリディアは段々と氣が昂ぶつて、夢中になつて髪毛を指に捲付けたり解いたりしてゐた。

『リディア、お前、先ア、少つと氣をお静めなさい、』と母は娘の肩を徐と撫でた。が、リディアは自分で心を静める事が出来ないで、

『夫よりも最つと最つと恐ろしかつたのは……』と再び話し初めやうとしたが、尙だ何にも言

出さない中に、ワツと聲を立て、室から飛出さうとした。

母親は喫驚して追従つて強に引留めた。

『あん畜生めらの首をとッ絞めツちまへ。此ん盜賊！』と今迄素知らぬ顔してゐた少年は矢寔に嘴を容した。

『何だヨウ、お前。』

『何でもないやい。そんな事を云つて見たんだい、』と少年は答へつゝ卓子の上から紙袋を一本取つて燻かし初めた。

## 第二十六回

『密室監禁でもものは若いものには實に恐ろしいものでムいます。』とリディアの叔母は首を動かして、紙裏に火を點けた。

『若い者には限りません。誰にでもでせう。』とネフリエードフは云つた。

『い、エ、人に由ては畏くも恐ろしくも何ともありません。例へば眞正の革命黨などは監獄に入れられると却て 樂になつて安心が出来ます。何故と申しますと、警察の所謂注意人物と目されてゐるものは誰でも自分一身ばかりでなく他人の爲めや主義の爲め、黨略の爲めに始終中心配して貧乏ばかりしてゐます。が、拘引されて監獄に入れられて了ひますと、其様な苦勞は失くなつて責任の肩掛けが出来ますから安心して暮せます。誰でも捕縛されると吻と息を吐いて重荷を卸したやうに一と安心したもんでムいます。ですけども、若い者や罪の無いものは爾うは参りません。意地悪く又警察はリディアのやうな罪のないものから必ず手を着けるものでムいます。誰しも初めての時は必ず胸がドキ／＼致します。身體の自由を束縛されるとか、悪い食物や悪い空氣に辛抱する位なら何でもありませんが、監獄へ入れられるといふ事が如何

にも不名譽不面目なやうな氣が誰でも仕ますからネ。道徳上の苦痛さへ無ければ監獄内の不自由は三倍増したからツて容易く辛抱出来るもんです。』

『貴婦は御經驗なすつたかネ？』

『妾？ 妾は二度入獄しました。』とリディアの叔母は溫和かな凄しい微笑を含みつゝ『初めて捕まりました時は法律に觸れるやうな事は何にも仕なかつたのです。丁度二十二で、小兒もありましたし、加之に妊娠してゐました。一身の自由を奪はれたり、良人や小兒と別れたりしたのは、無論辛いには違ひありませんが、併し夫よりも今日限り人間でなくなつて之からは物品扱ひされるかと思ふと何よりも情なくなりしました。妾は小さい娘に一と目會ひたいと頼みますと、何でも早く辻馬車へ乗つて了へつて云ひますし、何處へ行くのですかと訊くと、行きさへすりやア解ると云ふ挨拶です。元來先あ何の罪があつて捕縛されるのですと訊いても一向返事をしで呉れませんで、白洲へ引張出されて一應調べが済むと直ぐ衣服を脱がされて番號附の獄衣と換へられて了ひ、夫から檻房へ伴れて行かれ、誰も不在の室へ誰ツた一人投り込まれて錠を卸

されて了りました。夫で檻房の外には番兵が裝弾した銃を持つて往つたり來たりして時々戸の隙から覗いて見るのでせう。何たる情ない事だらうと思ひました。夫から何よりも一番グツと胸に來ましたのは、妾を調べた憲兵士官が紙笈を呉れた時です。紙笈の嫌ひな人が無いのを知つて同情して呉れる位なら、人が自由を願ひ光明を喜び、母か子を愛し子が母を慕ふ事を知らぬわけは無いのに、能く先ア大切な自由を奪ひ、最愛の良人や子から引割いて、獄扱ひをして監獄に投り込む事が出来たもんだと思ひました。這般な残酷な目に會つては誰だつて悪い了簡を起さずにはゐられません。神や人の道を信じ、人は互に相愛するものと信じてゐた人でも、怎ういふ目に會へば信じるのを止めて了ります。現に妾も夫からつてもものは人道を信じるのを止めて段々人間が悪くなりました、と云ひつゝ微笑した。

其時娘の踵を追駈けて行つたりディヤの母は再び戻つて來て、リディヤは氣が顛倒して逆も最う此席へは出られませぬと云つた。

『アツタラ若いものを那樣な目に會はしたのは誰のお庇だ、』と叔母は愁然として、『ヒョンな事

から妾が原因になつてゐるかと思ふと一層不便でなりません。』

『田舎へ行つたら氣が沈着くかも知れないから、』と母親は、『阿父の許へ當分遣つて置ませう、』  
 『貴下に助けて戴かなかつたら、姪は死んで了つたかも知れません、』と叔母は云つた。『お庇様で誠に難有うムいます。夫で、——實はゾーホーワの許へ手紙を届けて戴き度いのでムいます、』と衣兜から手紙を出して、『之は封じて置きませんから、一應御覽になつて、若し届けても差問がないと思召したら願ひますし、左もなければ破つてお捨てになつても宜しうムいます。勿論何にも祕密事は書いてありません。』

ネフリユードフは手紙を受取つて、讀まずに眼の前で封をして、確かに届けると約束して暇乞をした。

## 第二十七回

ネフリユードフをベテルブルグに引留めた最終の用事は例の宗門一條である。昔しの同僚士

官である侍従武官のボガチレーフの手を経て嘆願書を皇帝に奉らうと云ふ心算で、此日の朝まだきにボガチレーフを訪問すると、尙だ朝飯中だつたが既う出勤の支度をしてゐた。

ボガチレーフは脊こそ高くないが、筋骨逞しくして蹄鐵をヒン曲ける力がある。が、心持は到つて柔和しい親切者で、曲つた事の大嫌ひな生一本の正直男で、其上に極寛大な自由思想を有つてゐた。で、恚ういふ氣質にも似氣なく宮中に仕官して、シカモ陛下及び皇室に忠勤を迪んで、不思議の事には此最高階級の美なる方面をのみ見て、汚ない腐敗した中には決して交らなかつた。元來何事に由らず人の噂をしない男で、常から寡言で、偶々口を利く時は極磊落な大聲な出し、傍若無人に叫つてカンラカラ〜と豪傑笑ひをする。勿論之は交際上手でするのでなくて、全く恚ういふ氣質なんだ。

『ヤツ、能く遣つて來た。怎うだい、朝飯は？』先ア、腰を掛け給へ、ピースステッキの素敵に美味いのがあるが、喰らんかい、怎うだい？ 我輩は何時でも正味の喰出のある奴を喰ひ初めの喰ひ終ひにするんだ。はッはッはッ、』と叫り散らしつ、葡萄酒の壺を指さして、『酒は怎う

だい、一杯飲らんか、怎うだい。』と勧めながら、聽て言葉を変ため、時に君の一件ナ、我輩本より快諾した。陛下のお手許に差出すのは容易な事だ。が、偶つと氣が附いたのだが、左に右く先づ第一にトボローフに面會して置くが君の爲めに上策だと思ふ。』

トボローフの名を聞くとネフリユードフは濼い顔をした。

『何せい、宗門上の事は悉くトボローフの職權に屬しをるから、陛下に直奏した處で陛下からトボローフに御諮詢になるのだ。夫だから、結局手續の如何を問はず、トボローフから直接君に交渉する事になるかも知れんのだ。』

『君が爾う云ふなら行つても宜い。』

『爾う仕給へ、其方が上策だ、』とボガチレーフは再び大聲で、『時にベテルブルグは怎だい？』

『全て煙に巻かれた鹽梅だ。』

『煙に巻かれた。はッ、はッ、はッ。』とボガチレーフは呵然と笑ひつゝナブキンで口髭を拭きながら、『夫ではトボローフの許へ行つて見るかな。トボローフが若し諾かなかつた場合は我輩



に嘆願書を届け給へ。其時我輩から陛下へ直きに執達しやう。」と大聲で云ふや否、座を離れて無意識に馴れッこの十字を切つて、佩劍をガチャ／＼鳴らして腰に佩けた。「夫では失敬する。之から出勤するから。」

「僕も一緒に出掛けやう」とネフリユードフは見るからに氣持の好いボガチレーフの逞しい幅廣の手を握つて、何となく心嬉しく玄關で別れた。

トボローフを訪問した處で何の香ばしい事の有らう筈が無いのは解り切つてゐるが、折角親切なボガチレーフの意見を無にせまいと思つて、有らゆる宗門の運命を掌中に握つてゐるトボローフへ會ひに行つた。

元來トボローフの任にある位置は頗る矛盾したもので、鈍根愚劣な人物でなければ決して勤まらぬのだ。トボローフは實に其通りの愚極まつた男だ。何故なら此職務は人間は本より如何なる神魔惡魔の力も動かし得ない神の稜威に作られたと自稱する正教會を維持し、且如何なる壓迫を人民に加へても正教會を保護する役目だと云ふが、まッこと正教會が人力の得て及ばざ

る神の掟で定められたものなら、何も人間が此上に七面倒臭い規則を作つて保護する必要も絲瓜も無いわけだ。然るに御苦勞様にも非力の人間が規則を設けて全能の神が作った正教會を保護しやうといふのが即ち教務院で、トボローフ以下の僧官が任ぜられてゐる。凡そ世の中に此のくらの矛盾した事はあるまいが、トボローフには之が解らないのだ。頭から考へやうともしないのだ。其くせ人間の力で決して犯す事が出来ないもの、如何なる鬼神惡魔の力も動かす事が出来ないものと定めて置きながら、若しかカトリックの坊主とか牧師とか或は他宗門の者が此正教會の神聖を破壊しやしまいかとビク／＼してゐる。且洎々たる賈々者流と等しく、本來人間の同等同胞であるを承認する宗教の根本思想が缺けてゐるトボローフは、奇怪千萬にも世間の人間を己れ等とは全で違つた別種の動物と見做し、己れらには無くても濟むものを世間の人間には必ず無ければならぬものと信じてゐた。實は己れ等の腹のドン底では何にも信じてゐないで、無信仰を極都合の好い便利なものと思つてゐながら、世間の人間が正教會の信仰を失くしては一大事と懸念して、彼等の口吻に従へば之を救ふのが即ち渠等の神聖な職務だと任じ

てをる。

或る料理書に蝦は生きながら料理されるのを好むと書いてあるが、トボローフも其通りに人間は迷信に陥つてゐるのを好むと信じ且口外してゐた。料理書のは形容して云つたのだが、トボローフのは眞面目に文字通りに云ふのだ。

トボローフが自ら任ずる宗教に對する態度は、腐つた肉で禽を飼つてゐる鳥屋と同様で、腐つた肉は頗る厭ふべきものだが、鳥は平氣で食ふから腐つた肉を喰はせる権利があると思つてゐた。

勿論イベリヤンやカザンやスモレンスクの靈驗顯灼れんかくな聖母の御影を拜むのは甚だ怪しからぬ偶像禮拜であるのを知らぬでは無いが、人民は好んで信心するから何處までも此迷信を維持しなければならぬとばかり思ひ、元來怎ういふ迷信の根本の原因たるや、トボローフのやうに人民の無知文盲を救出さうとはしないで却て益々暗黒の深みへ沈めて自分達の後光を輝かさうとする怪しからぬ男が昔から今に到るまで絶えないからだとは少しも考へてゐないのだ。

ネフリユードフが應接室に通された時はトボローフは自分の居室で頗る元氣な品格の好い尼さんと會見して頼りと話し込んでゐた。此尼さんは西露西亞で内實羅馬法王を尊奉するユニアト宗門派しちもんはに希臘正教會の信仰の強賣かぢりをしてゐたのだ。

應接室に控へた役人はネフリユードフの來意を尋ね、皇帝陛下に請願書を奉るべく執奏を頼みに來たと聞くと、先づ請願書を内見して差問ないかと訊いた。ネフリユードフは無言で首肯うなづきつゝ請願書を手渡しするのを役人は請取つて主人の居室へ持つて行つた。恰度其時尼さんは長い垂布たれつぎ附の聖帽を被つて裾長な法衣はふえを引摺りつゝ白い手に黃玉の珠數じゆずを掛けて出て去つた。が、トボローフは直ぐネフリユードフを引見しないで、先づ請願書を取つて首を掉りつゝ黙讀し、條理の井然としてシカモ極めて力ある文事に肝を潰しつゝ不快な顔をした。

『之が若し陛下のお手に入つたなら、飛んでもない事になつて面白くもない御下問を受けねばならんのだ、』と讀終ると共に沈吟しつゝ、請願書を徐と卓上に置き、鈴を鳴らしてネフリユードフを通すやうに命じた。

トボローフは此宗門事件を能く知つてゐた。餘程以前にも請願書を受取つた事がある。之は恚ういふ譯(わけ)で、是等の宗門徒は希臘正教會の信條に反いた異安心(いあんしん)を唱へ出したので、初めは説諭(せつご)され、其後一度は法律に問はれ、直ぐ又放免されたが、正教會の僧侶や州知事が正教會の儀式に由らない渠等(かみら)異宗門の婚禮は不法であるといふ理由の下に妻子眷族を分離して追放しやうとしたから、親や女房が騒出して引離(ひきはな)されないやうにと嘆願して來たのだ。今、憶出すと其時は處分停止を命ずるが上策(じやうさく)だと思ひながら躊躇(ちゆうちゆ)した。何故かと云ふと、是等の異宗門の妻子眷族を分離して追放した處で何の故障もなく、生中(なまなか)慈悲を示して却て土地の百姓原(ひやくしやうげん)に勝手(かた)な信仰を起さしめては大變であるし、且其時の正教會の監督連(じやくくつれん)の意氣(いき)込が非常であつたから、事件の成行(なやう)に任(まか)して少しも干渉しなかつた。

が、今は大に事情を異にしてをる。左も右もベテルブルグに多少の勢力あるネフリユードフのやうな後援者があつては、不法處分として直きく(ちか)に陛下に訴へる事も出来るし、外國新聞で論ずる事も出来るから、トボローフは忽ち意外な覺悟(かくご)を定めて、

『御機嫌能(ごきげん)う、と忙(いそ)がしさうに突立(つきた)つたまゝネフリユードフを迎へ、直ちに要件に入つて、此事件なら能う知つてます。請願人の連名を見ると直ぐ、あッ、あの氣の毒な事件だと憶出しました。』と請願書を取つてネフリユードフに請願人の名前を示しつゝ、『折角御注意下さつて誠に忝けなうゑる。全く地方の官吏や役僧共が熱心になり過ぎたからで、御心配なさるほどの事は無い。』

ネフリユードフは無言で突立つたまゝ、眼前に對合つたる槓杆(こうかん)でも動くまじき青白い顔(あたま)を冷かに凝視(みつ)めた。

『即刻處分停止を命じ、且農民を解放するやうに取計らひませう。』

『すると此請願書は不必要ですナ？』

『拙者が確かにお約束します。』とトボローフは拙者といふ言葉に力を入れて、己れの正直なる性質は何よりも確かで、一言金鐵(こんてつ)よりも堅いと請合ふやうに、『直ぐ命令書を書いたら宜しいでせう。暫らくお掛けなすつて……』

と云ひつゝ書卓へ行つて命令書を書出した。ネフリユードフは腰も掛けずにトボローフの狭ましい禿鬚や、スラ／＼筆を走らす青筋だらけの太い手を見つ、甚感して此の右から見ても左から見ても無感覺極まつた男が斯うも易々と此方の思ふ通りに、シカモ如此なに鄭重に都合好く計らつて呉れるかと不思議でならなかつた。

『さア、此通り書きました。』とトボローフは封筒に入れて封をしながら、『何卒貴下から請願人に能くお話しなすつて下さい。』と強て笑はうとするやうに唇を曲めた。

『元來怎ういふわけで人民が如此な難儀な目に會ふのでせう？』とネフリユードフは訊いた。

トボローフはやをら頭を擧げ、ネフリユードフの質問を笑止しがるやうに笑ひながら、『夫はお話し出来ない。お話し仕て差聞ないのは、我々に保護される人民の利益は中々に尋常で無い事でゐる。宗教に熱する方は少とぐらい過激に走つてもマダ安心でゐるが、此頃段々流行して來る宗教上の無關心、無信仰は實に危険でもあるし又有害でもある。』

『併し宗教の名に於て正義の第一要求が蹂躪されるツてのは怎うしてせう？一家を離散せし

めるといふやうな……』

トボローフは何を小癩なと云はぬばかりに鼻頭でせゝら笑つてゐた。ネフリユードフの云ふ事はトボローフが自ら任ずる遠大な政治上の立場から見ると一々小癩極まつた不當な言草に思はれた。

『個人の私見から見たら爾う思はれるかも知れませんが、』とトボローフは、『行政的見地から見ると其處に大きな徑庭がある。併し今日は之で失敬せにやならぬ、』と軽く頭を下けて手を出した。

ネフリユードフは無言で手を握つて急遽いで外へ出たが、這般な男と握手をするではなかつたと後悔した。

『人民の利益だと！人民の利益が采れる。汝達の利益を云ふんだらう、』とネフリユードフは歸らうとして不斗心中に思ふと同時に、正義を維持し宗教を擁護し人民を導く法律が強制されてゐる人達の身の上がムラ／＼と浮んで來た。酒の密賣をして罰せられた女や、竊盜罪に問はれ

た少年や、浮浪罪に問はれた無通行券者や、放火犯に擬せられた放火人や、詐欺取財に問はれた銀行頭取や、取別けて都合の好い材料を擧げたいばかりに拘留された可哀相なシユーストワを初めとし、正教會の信條を破つた爲めに罰せられた異宗門や、立憲政治を要求した爲めに捕縛されたグールケウキチまでが順々に浮んで来たが、怎う云ふ連中が捕縛され收檻され追放されるのは正義を蹂躪したからでも不法な行爲を犯したからでもなくて、畢竟官吏や富豪が人民から奪つた資財を自由にする邪魔になるからだ。成程政の許可を得ないで酒の密賣をする女や、市中を騒がす盗賊や、革命黨の書類を隠匿したシーストワや、迷信を破棄する異宗門や、憲法を要求するグールケウキチやは渠等の爲めには等しく皆邪魔物であつたらう。官吏といふ官吏は總て——上は叔母エカテリーナの良人や元老院の議官連や、トポロフを初めとして下は各省に詰める堂々たる紳士連までが自分達の利害ばかりを考へ、怎うしたら危険から免かれるだらうとばかり屈托して、怎う状態の下に苦む人民の難儀なんぞは一向お關ひなした。夫だから一人の罪なきものを罰するのを恐れて十人の罪あるものを不問に附する法の原則

を忘れるのみならず、眞實危険なる一人を除かんが爲めに十人の危険ならざる人民をまで併せて罰して了うのだ。云はゞ腐つた小部分を取棄てやう爲めに大部分の善い場所までを切捨て、了うやうなもんだ。

如斯説明して了へば頗る簡單明瞭で何の事は無いが、併し餘り簡單明瞭過ぎるので其儘斷んで了う事が躊躇された。是程に紛糾した現象が如此な簡單明瞭なる説明で足りるものだらうか。正義とか法律とか信仰とか神とかいふやうな問題に關する言葉が最も酷薄な我欲殘忍を蔽す假面の言葉と思へやうか知らん。

## 第二十八回

其晩ネフリユードフはベテルブルグを去る筈であつたが、マリエツトと芝居で落合ふ約束がしてあつた。勿論這般な約束は反古にしても差支ないと思つてゐるが、一端番へた言葉を破るは不善であるといふ平素の説を擔出して自ら欺きつゝ、『此位な誘惑に勝てない事は無からう、』

と少しは浮氣半分に『最後の思ひ出に一番試さうかな。』と思ひ込んで、燕尾服で芝居へ駆附けた。丁度『椿姫』の二た幕目で、外國人の女俳優が肺病女の臨終の間際を目新しい動作で見せる處だつた。

芝居は大入であつた。ネフリエードフは直ぐマリエットの棧敷へ鄭重に案内されたが、棧敷の外の廊下に立つてる禮服の家従はネフリエードフを見ると慇懃に會釋して直ぐ棧敷の戸を開けて呉れた。

向ふ側の棧敷に立つたり腰を掛けたりしてゐる人達や、平土間に聯んでゐる白髪頭や胡麻鹽頭や禿頭や縮れ毛頭の連中は何れも夢中になつて舞臺を見て、骨と皮ばかりの女優が絹レースの衣裳で病苦に悶えながら、苦しうな口跡で臺詞を陳べてゐるのを一心に聞惚れてゐた。

満場は水を打つたやうに寂としてゐた。其中で棧敷の扉の音が矢庭に寂寞を破つたので、同時に叱つと云ふ聲が掛つた。冷たい空氣と生温い空氣と二た流れの空氣がネフリエードフの面を撫でた。



棧敷にはマリエットの外にネフリユードフの知らない顔の、髪風の仰山な、赤い肩被を掛けた婦人と、二人の男が在た。一人はマリエットの良人の將軍で、脊の高い羅馬鼻の氣難かしさうな相貌の風采堂々として胸のフカ／＼した制服を着てゐた。最一人は見事な頬鬚を生やして顔だけ剃つたあとの青々とした美男である。

美しく繊細作りの仇ッほいマリエットは胸開きの廣い衣服を着てスッキリした形状の好い撫肩を露はし、頸筋の小さな黒子を見せて、ネフリユードフを顧盼きさまにニツと微笑し、扇でさし磨いて自分の後ろの椅子に着かした。マリエットの良人は沈黙拂つて軽く頭を下げ、俺は此美人の持主だぞと云はぬばかりに妻と眼を見交した。

幕が閉ると満場は拍手で壞れやうであつた。マリエットは椅子を離れてサヤ／＼と絹の音をさせながら棧敷の後ろへ行つてネフリユードフを良人に引合した。將軍は始終眼に微笑を含みつゝ、好い機にお目に掛つて喜ばしいと云つてから、無言で着席した。

『お約束しなかつたなら、』とネフリユードフはマリエットに向ひ、『今日は歸る筈でした。』

『妾なんぞはスツボカシに遊ばしても、』とマリエツトはネフリユードフの言葉の意味を想像しつ、『彼の名人だけは是非見て入らツしやらなければ。』と云ひつゝ、良人に向ひ、『眞個に今の幕は、ネエ貴郎、宜うムいましたワネ。』

良人の將軍は頷いた。

『那樣なものは私は何とも思はない。あれよりか眞物の最つと可哀相なものを澤山今日は見て來ました。』

『爾う。……先アお腰をお掛け遊ばしてからお話し遊ばせ。』

將軍は無言で聞いてゐたが、眼には段々と冷笑の色を増して來た。

『貴姐のお骨折で放免になつたアノ婦人ですナ。あれを尋ねました處が、長い間の檻禁で全て精神が沮喪して了ひました。』

『ホラ、貴郎にお願ひした婦人の事でムいますよ、』とマリエツトは良人に云つた。

『あア、左様か、無事に放免となつてお目出度かつた。』と將軍は悠然と頷きつゝ、口蓋の下に露

はな冷笑を含んで、『我輩は御免を蒙むつて喫煙して來る。』

と云ひつゝ去つて了つたから、ネフリユードフは之からマリエツトが何か特別な咄を持出すかと待構へてゐた。處が案外にも取留めた咄はなく、一向何にも云出しさうな素振もなく、芝居咄ばかりを饒舌り散らして、ネフリユードフが如斯な咄を面白がるとても思つてゐるらしいつた。

マリエツトが是非とも芝居に來て呉れと用ありけに云つたのは何も別段話たい事があるからでなくて、眞白な撫肩と可愛らしい小さな黒子を露したケバ／＼しい夕化粧の美しい處を見せたい爲めばかりだと解つた。之が萬更悪くもなかつたが、又何とも云へない嫌な氣持がした。

何も彼もを包み蔽した表面の美しくしさこそネフリユードフの目を牽きつけて容易に去らなかつたが、皮一重下に隠れたものが看透かされるやうな氣もした。恚うして見てゐると惚れ／＼とするが、何萬人の人民の涙と血を犠牲として榮達するやうな良人に連添つて耻ぢない云はう



やうなきお掃茶羅で、昨日話した事も唯の口頭の出放題で、眞實の腹は何が面白くてか知らぬが——恐らく當人にも解るまいが、斯くいふネフリユードフを蕩かさうといふより外ないのは良く讀めた。之が又憎くもあり捨て難くもあつて、何度も帽子を手に取つて歸掛けてはツイ思ひ切つて振切れずに躊躇した。

其内にマリエットの良人が濃い口髭に煙草の臭をブンノ、臭はしながら戻つて来て、ネフリユードフが在るか在不いか知らざる如くに傲然と輕蔑すこやうにネフリユードフを下目に見た時は、有繋に怏然として、突と席を離れて、尙だ戸を閉め切らない中に軽く會釋して外套を引抱へながら芝居を出て了つた。

ネヴスキイ通りを家へと歸る路すがら、道幅の廣いアスバルト道を行くと、一歩前をシヤナリシヤナリと行くスラリとした春恰好の仰山に粧し立つた女が我知らず目に留つた。顔と云ひ姿と云ひ淫らしさが漲つてるので通り縋りものは誰でも願盼つて見ないものはなかつた。ネフリユードフも足早に追越して振返つて其顔を見ると、美しく化粧した顔に媚を含んでネフリユードフを流盼に見つゝニツと微笑した。すると如何いふわけたか不思議に偶つとマリエットを憶出し、芝居の棧敷で同座した時と同様な憎いのと棄て難いのがチャンボンになつた變な氣持がしたので、足早にスタ〜と行過ぎて左つ右いつしながらモールスカヤの方角に折れ、堤通りをウロ〜と往つたり來たりしてゐたから、巡査が怪んで睨と見た。

マリエットも矢張あんな風に微笑して見せた。何方も同じ微笑だが、此女のは判然と公然に、「お氣に召したら買つて頂戴。御用がなければ勝手に行らッしやい」といふ顔つきをしてゐるが、マリエットは飽くまでも勿體振つて、「憚りながら妾は身分のあるもの、其様な卑しい根性は微塵も有りませぬ」と白ばくしてゐる。腹の底に入れば何方も同じだ。少なくとも此方は正直であるが、片方は偽つてゐる。且此方は據ろなく爲てゐるのだが、片方は好んで憎むべき恐るべき情を弄んで自ら楽しんでゐる。例へば辻に立つ女は渴して飲を擇ばざる人に薦める濁つた溜水のやうなもんだが、芝居の棧敷の彼の美人は不用意に近く何人をも殺す毒水と同様である。其時偶つとネフリユードフは貴族長の妻と以前の妙な恥づべき關係を憶出しつゝ、

『獸慾が人間に存在するは厭ふべきだが、獸慾が赤裸々な獸慾として存在する間は我々は高尚なる靈の生活から見て賤むが故に、墮落すると否とを問はず、人は依然として同じ人であるが、一と度詩的とが美的とかの皮を被つて我々の尊敬を要求する時は、終には其中に吞まれて獸慾を崇拜し、善惡の差別を忘れるやうになる。誠に恐るべき事だ！』

此理窟は初めて明白に解つて、丁度眼前に宮殿や番兵や要塞や河や船や株式取引所を歴然と見ると同様であつた。且此の北歐の夏の夜には生中に物の見えるよりは却て暢氣に安心出来る眞の暗黒が無くて、何處から來るとも解らぬ薄朦朧した光が常に在ると同様に、ネフリユードフの心の中も亦、全く安心出来る暗黒の無知でなかつた。

何も彼もが總て判然して來た。世人が重大と思ひ善事と信する事が總て無意義な厭ふべき事である事も、贅澤や驕奢の中には罪惡が潜んでゐる事が昔しから知れ切つてゐても、曾て少しも制裁を受けないで、却てさんざめかく言囃されてゐる事が、皆判然して來た。

ネフリユードフは一切之を忘れやうとし、見まいとしたが、最う見ないわけに行かなかつ

た。ペテルブルグの全市を蔽へる光の源が解らないと同様に、ネフリユードフの心には是等の聲が歴然と見えて來た光の源が亦解らないでも、又縱令薄朦朧した鈍い光にもせよ、見えて來たものを見ないわけには行かないで、嬉しいやうな情ないやうな氣がした。

## 第二十九回

モスコウへ歸ると直ぐネフリユードフは監獄病院にマースロワを訪ねて、元老院に前判決を確定したから愈々西比利亞へ行く用意に相らねばならぬといふ氣の毒な顛末を話さうと早速出掛けた。且自分では内心餘り望を置かぬが、辯護士が文按した陛下への請願書にマースロワの記名を求めやうと持參した。

不思議な事にはネフリユードフは今では強ち訴訟に勝たうといふ氣はなくて、西比利亞へ行つて流刑人や徒刑囚と一緒に生活する考ばかりに屈托し、若しマースロワが放免されたなら二人の生活の結着を甚感しやうなどといふ空想は苟めにも描いてゐなかつた。亞米利加の哲人

トローが奴隷制度の存在してゐる時分、罪なき者の束縛を認許する不義なる政府の下に義人の眞の住居とすべきは亦監獄であると云つたのを偶然憶出したが、ベテルブルグの社會を見てから後のネフリユードフは殊に此感が深かつた。

『其通りだ。今日の露西亞で正直な人間の住居に適する場所は唯だ監獄あるのみだ、』と腹の底に思ひつゝ、恰も馬車が監獄塀の中へと入つた時、此考が身にヒシ／＼と迫される氣がした。

病院の門番はネフリユードフを見ると直ぐ、マースロワは既う爰には在ませぬと云つた。

『何處に在る？』

『檻房に在ります。』

『甚變して復た檻房へ移られた？』

『それが貴下、那樣いふ人間てものは……』と門番も宛も輕蔑するやうに笑ひながら『助下の醫者と味をやりましたんでナ、醫員長から追返されましたんで。』

ネフリユードフは氣に取られて了つた。今日のマースロワが這般な事を仕出來さうとはッ

イ今の今までも想像しなかつたから、意外な大不幸に遭逢はした人と同様な心持がして、尋常でない心痛を覺えた。初めは顔に泥を塗られたやうな氣がして一時にカツとしたが、熱々考へればマースロワの心持が漸次に變つて來たと喜んでゐた自分の鈍さ加減が馬鹿々々しく、泣いたり罵つたりして此方の心中立を頭から拒絶したのは矢張自分を化かさうとする賣女の手練下管であつたかと思ふと、最後に會つた時、少と腑に落ちぬ事があつたのを憶出し、其様な此様な考へが一時にムラ／＼としたので、我知らず帽子を脱つて病院を出て了つた。

『さア、如何したもんだらう？』と自問自答した。『斯様な不都合を仕出來されても猶だマースロワに粘着いてなけりやならぬか？ 斯ういふ目に會つては既う自分の肩は抜けたものだらうか？』

と考へたが、同時に若しこれで關係を絶つてマースロワを捨て、了つたなら奈何だ。自分はマースロワを罰して貰ひたいのだが、神はマースロワよりは必ず自分を罰するだらうと氣が附いて惘然と恐れた。

『いや、甚だな事が有らうとも初一念を變へてはならぬ。却て愈々益々決心を固くしなけりやならぬ。マースロワはマースロワで好き勝手な所爲をさせろ。助手の醫員と通じたなら勝手に通じさして置く分の事だ。それはマースロワの知つた事で、此方は飽くまでも良心の命ずる事をしなけりやならぬ。自分の良心が命ずるからには自分の自由を犠牲としなけりやならぬ。形だけなりともマースロワと結婚して天津地角マースロワの行く處へ何處までも隨いて行く初一念を決して變へてはならぬ、』と些と自暴氣味で獨語ちつゝ病院を去つた直ぐ其足で、大跨に力足を踏んで監獄の宏大な入口へと行つた。

で、當番の受附に向つて、マースロワに面會したいから典獄に通じて呉れと取次を頼むと、此押丁はネフリユードフを知つてゐたので、監獄内の重大な異動、即ち舊典獄が罷免されて新たに嚴格な典獄が任せられたと話しつ、

『唯今は非常に嚴重になりました。彼處に新典獄が在ますから直接お訊き下さい。』

新典獄は忽ちツカ／＼とネフリユードフの傍へ來た。脊の高いコッ／＼した、頬骨の高い陰

氣臭い、何處となく間の抜けた男であつた。

『面會なら定日以外、面會室以外では許可なりませんぞ。』

『イヤ、私は陛下に上訴する請願書の記名を求めに参つたんです。』

『そんなら請願書をお渡し下さい。』

『貴官にお渡しする事は出来ない。本人に直接面會して記名を要めたい。私は前から何時でも面會出来る許可を得てをります。』

『前には許されてつても……』と典猶はネフリユードフを横目にジロリと見た。

『私は知事から特典を得てをります、』とネフリユードフは懐中から免許狀を出して見せた。

『失禮、』と典獄は尙だ正面にネフリユードフを見ないで、金指環を穿めた長い膩氣のない白い指で免許狀を受取りつゝ、靜かに讀終つて、

『夫では事務室へお來で下さい。』

事務室には誰も不在かつた。典獄は廳で卓子に取散らした書類を玩り始めたが、夫となく面

會に立會はうといふ心持が見え透いてゐた。

其序にネフリユードフが國事犯のゾーホーワに面會出來まいかと訊くと、

『國事犯には面會を許しませぬ、』と言下に斷乎と拒絶して見向もせず、書類を調べてゐた。

リディアの叔母から頼まれた手紙を懐中するネフリユードフは傷持つ足のヒヤ／＼して、何か罪を犯さうとして露顯したやうな氣持がした。

其内マースロワが事務室に入つて來ると、典獄は頭を上げたが、二人の何方にも眼も呉れず、に、『さア、話をおしなさい、』と言つたまゝ書類を捻くつてゐた。

マースロワは頭髮を包む手巾からジャケットからベチコテまでが白いづくめでネフリユードフの傍へ來て、ネフリユードフの冷かな澁面作つた顔を見ると、ボウツと顔を赤くしてジャケットの縁を玩りながら伏目になつた。

其ドギマギした容子を見て取つたネフリユードフは、扱てこそ病院の門番が噂に違はぬと早合點みして了つた。

であるが、以前と少しも變らない心持で隨意なく待遇はうと思つても、何だか堪らなく不快な氣持がして、奈何しても握手する氣になれなかつた。

『今日は不快な話を仕に來た、』とネフリユードフは氣の乗らぬ聲でマースロワを見もしなければ手を取りもしないで、『元老院は控訴を棄却した。』

『妾、爾う思つてました、』とマースロワは息の塞つたやうな妙な聲で答へた。

以前ならネフリユードフは何故爾う思つてゐたと訊く處だが、今では唯マースロワを冷やかに見たきりで、マースロワが眼に一杯の涙を含んでゐるのを見ても、其様な事では中々和がな

いで、却て益々焦々して來た。

典獄は座を離れて室の中を往つたり來たり歩き始めた。

ネフリユードフは堪らなくマースロワが可厭で可厭でムカ／＼して來たが左に右に右に元老院の決定の不首尾を感めるのが當然だと信じて、

『だが落膽する事は無い。陛下へ請願すればどうにかなる。だから——』

『妾、其様な事は何とも思ッちやるませんワ、』と云つた時のマースロワの斜視の眼は濕んで哀れッほかつた。

『其様なら奈何する？』

『貴下は病院へ入來しッて？ 多分妾の話をお聞きになつたでせうネ——』

『聞けば奈何するんだい。そりやアお前の事で私の知つた事ッちやない。』とネフリユードフは冷淡に云退けて苦い顔をした。今まで制へてゐた——顔に泥を塗られたといふ心中の憤怒は一言病院と聞くと忽ちムラ／＼と頭を押し上げた。

自分は堂々たる貴族の家柄で、如何なる家の娘でも自分の妻たるを榮としてをる。其身體を擲つて此女に與へやうと云ふのだ。夫だのに時節の來るのを待たないで、人も有らうに病院の代脈つれと乳線合ふとは言語道斷の沙汰と、眞實、腹を立てずにはゐられなかつた。が、漸くに胸を撫つて、

『さッ、此請願書に記名しなさい、』と大きな状袋から書面を出して卓子に廣げた。

マースロワは手巾の端で涕を拭きつゝ、何處へ何と書いたら可いかと訊いてから、卓上に向つて右の袖のカフを手繰り上げつゝネフリユードフの指示通りに記名しやうとした。其背後に無言で立つネフリユードフは、胸に迫り來る悲しさにワナ／＼と肩を慄はすマースロワの後姿を見つゝ、自分の面目を蹂躪けられた忿恨と其の淺ましい心根を情なく思ふ不便の情とが混淆になつて、散三胸中で揉合つた末、到頭不便に思ふ情が勝つて了つた。

之と前後して、何方が先へ浮んだか解らぬが、マースロワを憫れむ念と、同じ不埒をした何年前の自分の過去の憶出とが一緒になつて、マースロワを憫みもし、自分も過去に顧みて深く耻入つた。

記名を済ましてから、マースロワはインキに汚れた指を下衣で拭きつゝ、靜かに起つてネフリユードフを昵と見た。

『怎んな事が起らうと、怎んな事が來やうと、私の決心は少しも變らんだ、』とネフリユードフは云つた。で、マースロワの不埒を寛大に見て了はうと決心が着くと共に益々不便の念が増

して来たので、俄に言葉を柔けて、『私は一端番へた言葉を決して變へない。お前が何處へ伴れられて行かうと必ず一緒に行く。』

『飛んでも無い、』とマースロワは周章して、ネフリユードフの言葉を遮つた。が、其面は漸く時々して来た。

『そんな事よりか道中筋に入用なものでも考へた方が好い。』

『雜有うムいます。何にも別段要るものはムいせんワ。』

其時典獄が来たので、注意を受けない中にと、ネフリユードフは暇乞をして、今迄に覺えない平和と喜悅と有らゆる物に對する愛とを抱いて歸路に沈いた。マースロワの品行が甚麼あらうとも此方の情愛は決して變へまいといふ不動心が定ると、滿心喜悅の情が充満して、從來得られなかつた精神の高調に達した。マースロワが病院の助手と慫慂にならうと甚麼しやうと、夫はマースロワの勝手で此方の事無。自分がマースロワを愛するは自分の爲めでなくてマースロワの爲め、神の爲めである。

處でマースロワが病院を迫出され、ネフリユードフがマースロワを罪あるものと早合點した實際の顛末は次のやうな次第で。

或時マースロワが婦長の命令で廊下の端の薬局へ或る薬を取りに行くと、例の面飽だらけの脊高の助手が單獨で孑然としてゐた處で、長い間マースロワを附け覗つてゐたから、矢度マースロワを取つて押へて捻伏せやうとした。マースロワは喫驚して強に振腕らうとして突倒すと、其機みに助手は頭を藥品棚に打つて薬罐が二本輪がり落ちてガタンピシンといふ騒ぎだ。

爰へ折悪しく醫員長が見廻りに来て、蟻のガラ／＼破れる音が耳に入ると同時にマースロワが眞赤になつて飛出して来たのを見て大喝して呼止め、

『こらッ、怪しい所爲をしたら赦さんぞ……此態は何だ？』と云ひつゝ續いて追駈けやうと飛出した助手を眼鏡越に屹と睨め付けた。

助手は莞爾々々しながら陳謝しやうとした。が、醫員長は耳にも入れずに靜かに頭を擡けて

眼鏡の中から睨つと見た。で、直ぐ其足で典獄の處へ行つて品行方正な女とマースロワを更仕したいと申出て、事は何なく落着した。

之がマースロワの艶聞だが、恚ういふ情話の原因で病院を追出されるのはマースロワの身に取つては残念で堪らなかつた。といふのは、長の年月の稼業でフツ／＼嫌になつた男の關係がネフリユードフに邂逅つてから後愈々嫌で堪らなかつたに拘らず、男といふ男が従來の生活や現在の身の上から推してマースロワを輕蔑つて、あの面炮面の書生ツほまでがマースロワを好き自由に玩弄にする権利があるやうに思ひ、拒絶せられると却て不思議がるのが如何にも心外で、自分ながら情なくて涙が眼に一杯になつた。であるから、ネフリユードフが今日見えた時、必ず病院で聞いて來たに違ひない此の悪い評判の證明を立てたくて、一言云ひ出して見たが、逆も信用して呉れさうもないので、生中に辯解だてするは却つて疑ひを増すやうなものだと、辛抱して口を緘むと共に涙が胸一杯に迫上げて來た。

マースロワは今だにネフリユードフの罪を赦さないで、二度目の會見の時立派に明言した通

り、何時までも憎み通してゐたかつたものだが、其實ネフリユードフに復た惚れて了ひ、何の氣なしにネフリユードフの云ふなり次第となつて、酒も止めれば煙草も止め、お洒落までも止めて了つて、望のまゝに病院の看護婦の下働きまでした。ネフリユードフが結婚を申込む度に必ず斷乎と謝絶したは、一度口外した意地を通さうとするばかりでなく、自分と結婚するはネフリユードフに取つて不利益なのを知つてゐたからで、親切は身に染みて忝けないが、身を捨鉢の志は飽くまでも受けまいと固く決心してゐた。が、ネフリユードフが今でも矢張自分を輕蔑して、以前の通りの賣女根性と信じて、生れ變つた自分の心持に氣が附いて呉れないかと思ふと口惜しくて堪らないで、復たしても病院で淫奔をして來たかとネフリユードフに思はれるのが元老院で宣告の確定された話を聞くよりも最つと最つと情なかつた。

### 第三十回

マースロワは第一回の護送の班中に加へらるゝ筈になつたから、ネフリユードフも、一緒に



出立する支度をした。出立前に落着けて置くべき用事は、イクラ時間が十分あつても逆も盡く落着け切れないやうな氣がするほど澤山あつた。且其用事たるや以前とは全で變つて、以前はネフリユードフなる一個人を中心とする利益を旨として強に作り出した用事だけで、シカモ事々物々が自分の利益を中心としながら矢張面倒で堪らなかつた。處が、今では全く利己を離れて他人の爲め働くのが何よりも愉快で面白くて際限なく引受けた。以前はネフリユードフ自分一個の仕事でさへが厄介で迷惑極まつたのが、今では他人の爲めの仕事を喜んで面白く引受ける事が出来た。

ネフリユードフが現在脊負つてゐる仕事は三種類に分ける事が出来る。例の研究辯から三分した各緊要書類を三つの書類夾みに分けて入れて置いた。

第一はマースロワに關する件で、皇帝陛下への上訴と、西比利亞へ出立する準備と、此二件を處理するのが重なる用事であつた。

第二は所有地の處分であつた。パノーフ村では地代を村の共同用途に充てる條件で農夫に

盡く土地を與つて了つたが、更に此約束を公正證書に作つて確定し、且夫に準ずる遺書を作つて置きたいのだ。クスミンスキー村では初め處分した通りのまゝで、矢張自分が地代を取る筈になつてゐるが、其中の幾何を自分の生活費とし、幾何を農民の爲めの使途に充てるかを確定して置きたいのだ。實は西比利亞へ行く費用が如何程要るか解らんので、半分までは収入を減じたが、尙だ全部を棄てる決心が仕兼ねるのだ。

第三は一日増しに縦つて來る囚人を助ける件であつた。

ネフリユードフが初めて囚人に接して救助を求められた時は渠等の運命を軽くしてやりたさに直ちに渠等の爲めに盡してやつたが、忽ち多勢の囚徒が絃々縦り付いて來て、逆も獨力では渠等の全體を助けてやりたくも出来ないやうな氣がしたので、自然他の仕事に手を出すやうになつて、之が初めの三件よりも一番面白くなつて來た。

此の新らしい仕事といふは即ち次の問題の解決である。元來刑法と名くる此の奇怪な制度は何である乎。之あるが爲めに、或る範圍まではネフリユードフ自身親しく被收容者を視察した

監獄其他の收檻處を到る處に設け、ペテルブルグのペトロバウロウスキイから薩哈噠島に至るまで數百ヶ處に數萬の犠牲を收容して苦めてをる。如何して如此な奇怪な制度が成立つてゐるのか？ 何處から如何なものが來たのであらう？

自分が親しく罪人に接した経験や、入獄中の罪人が書いたものや、或は辯護士や監獄教誨師や押丁達に訊て得たる知識から結論すると、囚人即ち所謂犯罪者は五級に分つ事が出来る。

第一は裁判上の錯誤で罰せられた眞實の無辜の民即ち放火犯のメンシヨフやマースロワの輩で、其數は甚だ少く、教誨師の計算では百分の七ぐらゐるださうだが、渠等の事情は殊に興味深きものである。

第二は嫉妬とか酒の上とか乃至一時の感情とかいふ或る特別の事情が作つた犯罪——恐らく其境涯に臨めば彼等を裁判した當該者でも随分行り兼ねまじき犯罪で、ネフリユードフの觀察では罪人の過半は此階級に屬してゐる。

第三は犯罪者自身では當然な行爲とし随分善事とさへ思つてゐるものを立法者側から見て犯罪

と見做すのである。例へば政府の免許を得ないで酒を賣るとか、進税をやるとか、地主の所有地又は御料林の下草や小枝を取るとか、或は高加索の山賊（高加索の山間の民を云ふ。渠等は久自らは露國の順民と思はないで露國）とか、或は教會のものを持つて行く未信者とかの類である。

第四は普通社會の平均思想よりは道德上進歩したる概念を持つ爲めに禍ひを買ふもの、即ち異安心を唱へる宗教家、獨立を欲する爲めに反旗を擧げる波蘭人又はサーカシヤ人、及び國事犯、社會黨、同盟罷工の類で、ネフリユードフの觀察によれば此階級に屬するものは頗る多く、中には權勢に抵抗した爲めに處分された立派な人物があつた。

第五は社會に害を及ぼしたよりは寧ろ社會の爲めに迫害された徒輩、即ち社會の絶間なき壓制或は誘惑に由つて麻酔された浮浪人、例へば席を盜取つた少年を初め其他數百人、ネフリユードフが監獄の内外で目睹したものは多くは此類である。彼等の境涯は秩序を追うて所謂犯罪の行爲に導くやうに出來てゐるので、ネフリユードフが近頃目前に見た澤山の盜賊や人殺しは大抵此階級に屬するものだ。刑事人類學の新學派が罪人の典型と稱する類廢墮落した低能の

動物は矢張此中に屬し、其存在を以て刑法及び刑罰の必要なる所以の重大なる理由とするが、ネフリユードフの考だと、恚ういふ種廢墮落した不健全なる典型は畢竟社會が罪を作つたので、當に當人を直接迫害したばかりでなく、其兩親や祖先に對しても亦迫害を加へてゐた結果なのだ。

此の最後の階級に屬する犯罪者の中でネフリユードフが取別け驚いたのはオホーティンと云ふ根強い盜賊である。素性は娼妓の私生兒で、木賃宿に育ち、極若い時から盜賊仲間に入つたが、三十になるまでは巡查以上の道德ある者に一人も出會つた事がないのだ。天性頗る頓才があつて、誰にも氣に入る男だつた。ネフリユードフに救けて呉れと頼んだ時も當人自身を初め裁判官や監獄や刑法や神の扱までをも茶かし切つてゐた。

第一人はフキヨードロフと云ふ美男の盜賊で、一隊の盜賊團の頭領となつて或る老官吏を殺して金を奪つた。此男は不法な處分に會つて家も田地も沒收されて了つた農夫の小倅で、ツイ近頃まで兵役に服してゐた時も或る士官の情婦に惚れた爲め痛い目に會つた。極面白い熱し易

い男で、怎んな思ひをしても遊びに耽りたがつてゐるが、ついぞ一度、其の原因は何にてもあれ、自分から發心して道樂を罷めたといふ男に會つた事もなければ道樂を外にして人の一生の目的があるといふ話を一と言も聞いた事が無い。情々此兩人を見るに、二人とも本來は美性を持つて生れて來たのだが、畢竟野育ちの木やうに放擲らかしにされて不具にされて了つたのが歴然と解る。尙だ此外に一見厭ふべき懶惰漢や人非人の浮浪人や女が有るには有つたが、恚ういふ人間にさへ伊太利學派の刑事人類學者の所謂罪人的典型は些かの痕跡だに見られなかつた。勿論、中には鼻持もならぬ可厭な奴もあつたが、此の可厭さ加減は燕尾服を着たりエボレットやレースの飾を附けたりして意氣揚々たる監獄外の所謂貴顯紳士を見て嘔吐を催すと同じであつた。

然るに同じ種類の人間でありながら、一は監獄に投ぜられ、一は自由に羽根を延ばして剩さへ道德上には何等の識見も無いにせよ、唯だ境涯或は廻り合せが悪いばかりに人間の作つた法律に觸れた薄命者を裁判するといふは抑も何故であらう？

此解答を得たいばかりにネフリユードフは此問題に論及した種々の書籍を涉獵した。ロンゾとかガロファローとかフェリーとかリストとかモーズレーとかタードとかは悉く集めて一心に精讀した。

が、讀めば讀む程益々解らなくなつて失望した。尤もネフリユードフばかりでなく、世の中の學者になる爲めでも著述する爲めでも議論する爲めでも教授する爲めでもなくて、唯だ日に生ずる人生の活問題を解決しやう爲めばかりで科學に望む人達には度々ある例で、科學は種々の精密繁瑣なる千百の問題に答へても自分が解決しやうとする根本の疑問には少しも觸れてをらんのだ。

そこで極簡單なる疑問が生じた。如何なる理由、如何なる權利があつて殆んど位置を換のれば同一なる或る人間が他の人間を縛つたり押込めたり撲つたり叩いたり追放したり殺したりする事が出来る？

此疑問の解答として次の議論が生じて來た。元來人間が自由意志を有つてゐるだらうか。罪人

の證候が腦蓋を検査して解るものだらうか。遺傳が犯罪の如何なる部分に現はれてゐるだらうか。背徳は果して遺傳するものだらうか。發狂とは何である乎、墮落とは何である乎。氣質とは何である乎、氣候や食物や無知や摸倣や催眠作用や感情やが如何に犯罪に影響する乎、社會とは何乎、義務とは何乎、——曰く、何、何、何。

と、後から後からと疑問が續出して來たが、其途端偶つと、何時ぞや學校から歸りがけの小兒に向つて問答したことがあつたのを憶出した。ネフリユードフがお前は字を習つたかと訊くと、

『あア、書けるよ、』と小兒は答へた。

『そんなら足といふ字は怎う書くエ？』

『犬の足かエ、何の足かエ？』と小兒は狡猾い眼をして見た。

ネフリユードフの根本問題に對して學術書類の答ふるものは恰も此問答に能く似てをる。種々の有益な面白い智識が山程書いてあるが、如何なる權利があつて或る人が他の人を罰するか

と云ふ根本問題に對しては何とも答へてをらんのだ。加之ならず、總ての説は刑罰の必要を原則と定めて置いて、然る後に刑罰を説明し且主張してをる。

ネフリユードフは益々讀んだ。が、飛びくの走り讀だから、這般な淺薄な讀み方で解決を得やうとするが無益であるのが頭から解つてるので、解決らしき答が度々生じて來ても其答が眞理だとは決して信じられなかつた。

### 第三十一回

マースロワが加はつてる罪人の一隊は七月五日に護送される筈で、ネフリユードフも同日一緒に出立する準備をした。

其前日ネフリユードフの姉夫婦は態々田舎から弟に會ひに上京した。

ネフリユードフの姉のナターリヤ・ロゴヂンスカヤは弟よりは十歳年長であつた。ネフリユードフは半ばは此の姉のお庇で生長くなつたので、小兒の時分から可愛がられ、姉が嫁に行く

前、二十五と十五の齡違ひであつたが、同じ年輩のやうに仲善くしてゐた。其時分、姉は今では死んで了つたイルテーニエフといふ弟の朋友を愛してゐた。姉弟共に此のイルテーニエフが好きで、互に頼もしい處を見付け合つては、人間が互に睦まじくし合ふ楔の清淨潔白な愛情で仲善くしてゐた。

然るに其後、ネフリユードフ姉弟は二人ながら墮落して、弟が軍隊に入つて放蕩生活を送れば、姉は性慾的の戀に驅られて下司な卑しい男に嫁入して了つた。此男は其頃ネフリユードフ姉弟が一番大切に一番神聖に思つてゐる事などは一向頓着しないで、ナターリヤが生命と頼む完全な道德や人間の義務に對する心持が解らないで、唯だ世間に銜ふ野心や虚榮とばかり思つてゐた。之が其男相當の解釋なんだ。

其上に、名もなければ金もなく、唯だ自分の職掌に勉強するを長所とするばかりの男であつたが、保守主義とも自由主義とも何方附かずの中ぶらりんで、時と場合の都合次第で何方にでもなる世渡り上手で、殊に婦人達の氣に入る一種の伎倆で權門のお臺處の御機嫌を取つて、割

合に目覺しい官海の出いをした。ネフリユードフと親昵になつたのは外國漫遊中で、其頃は最  
う青年ではなかつたが、矢張り加減に餘を食つてゐたナターリヤを騙し込んで了つた。ナタ  
ーリヤの母親は勿論此縁組を不釣合だと云つて喜ばなかつたが、併し出来たものは據るなくて  
二人は結婚して了つた。

ネフリユードフも表面は喰はぬ顔して内心の不平を包み蔽せやうと煩悶してゐたが、實は  
此姉婚が頗る氣に入らなかつた。

最も氣に喰はなかつたは此姉婚の下卑た根性と狹隘ましい己惚れ了簡であつたが、夫よりも  
尙だ腹の立つのは這般な卑劣な下司男に自分の姉が生命を打込んで夢中になつて、男の爲めの  
心中立に己れの美質をすら捨てゝ了つた事だ。

何時でもネフリユードフは自分の姉が這般な鬚ムシヤの頭の頂邊が禿けてチカ／＼光つてゐ  
己惚れ男の妻に爲つてゐるかと思ふ度毎に腹が立つて、二人の間の罪も無い小兒までが憎くてな  
らぬ、憐れしたと聞く度毎に、赤の他人と思つてゐる此下司男に復た姉が怪しからぬ事をされた



かと、情なくて堪らなかつた。

男一人女一人の二人の小兒を家へ残して置いて、姉夫婦はモスコへ上つて一等旅館の一等室に宿を取つた。ナターリヤは直ぐ亡母の昔の屋敷へ行き、留守居のアグラフキヨーナから弟は今では屋敷に在ないと聞いて直ぐ下宿へ尋ね、案内も乞はずに晝間から一日洋燈の點いてる暗黒な廊下まで來ると、汚臭い男が出て來て、ネフリユードフは不在だと云つた。

が、手紙を書残して置くからと云つて弟の小さな部屋に案内して貰ひ、二日間續きの狭い部屋を左見右う見て、綺麗好きで井然とした秩序の能い弟の氣風が現はれてるのは昔からの通りだが、周圍の餘り質素を極めてるには呆れて了つた。卓子の上には見覚えのあるブロンズの犬の首の附いた文鎖があつた。加之ならず、書類爽みや書物を丁寧に重ねた鹽梅や、ヘンリー・ゼオルジや其他の刑事學に關する英佛の書籍を堆く積んだ中に、讀半しと覺しきタードの著書の間に大きな弓形の象牙の紙刀を夾んだ具合は昔から看馴れた通りだ。

ナターリヤは机に向つて、是非今日中に尋ねて來てくれと手紙を書残し、目前の部屋の容子

が餘り質素なのを呆れて首を傾けつゝ旅館に歸つた。

ネフリユードフの一身に就てナターリヤが現在氣が揉める二大事件がある。一つはカチューシャと弟の婚禮沙汰で、今ではモスコウに誰知らぬものはないほどの評判である。一つは一切の所有地を悉く農夫に與つて了つた事で、之も中々の評判で、危険な政治的性質を帯びるものとして多勢を愕かした。カチューシャとの結婚一條は兒供の時からネフリユードフの氣象、嫁に行く前まではナターリヤにも矢張り共通してゐた氣象では左もあるべき事と、内心實は潔よい決心を感服してゐたが、併し對手にも由りけりで、這般な人殺しの嫌疑を受けるやうな恐ろしい女と婚禮すると聞いては矢張氣が揉めて堪らず、所詮一徹な弟が一端思立つた事を留めたからつて留らないのは知れてゐるが、左に右に力限り骨を折つて思留らせやうと決心して來た。

最う一件の農夫に土地を與つて了つた事は實はナターリヤは格別何とも思はなかつたが、ナターリヤの良人は非常に憤慨して、姉の力で強に弟を制へ付けさせやうと妻を説得した。ロゴ

ヂンスキイが曰く、斯の如き行爲は矛盾、輕卒、及び高慢の最高頂で、若し強て説明するならば高慢が増長した餘りに新奇を街つて人に傲り人に評判されやうといふより外ないのだト。

「農夫が各自の町村費に充てる爲め地代を拂ふと云ふ條件で地面を呉れて了うといふは何の意味だ。若し地面が不用なら農業銀行の手を経て賣つて了つたら善ささうなもんだ。元來了簡力が解らない。實に狂人の沙汰だ。」

這般な理窟を吐き散らしてブン／＼怒つて、ネフリユードフを法律上後見を要する人間と眞劍に思込んで、先づ左も右も此の奇怪な計畫を思止まらせるやうに弟に勸告しろと妻に吹込んだ。

### 第三十二回

ネフリユードフは其晩歸つて姉の置手紙を見ると直ぐ會ひに行つた。丁度、ナターリヤは一人、良人は次の室に休んでゐた。緊密と適つた黒い絹の衣服の胸に赤いリボンの飾を付け、



當世風に眞黒な髪を縮らして結んでゐた。

ナターリヤは良人と同齡だから、少とでも若く見せて良人の氣に入るやうにといふ苦辛がお化粧に歴々としてゐた。

弟の顔を見ると飛立つやうに席を離れ、サヤ／＼と絹の音をさせながら飛付いて接吻し、二人は嫣然と顔を見合はした。で、何にも云はずに眼と眼と看交し、微妙な眼の色に口では逆も云はれない眞正の情愛を十分に含ました。が、聽て口に出したものは最う眞實ではなかつた。

二人は母親が、んだ以來會はなかつたのだ。

『姉さまは大層肥つて若くなつた。』

とネフリユードフが云ふと姉は嬉しさうに唇を動かさしつ、

『貴弟は瘦せたワネ。』

『ロゴチンスキイさんは相變らず御機嫌ですかネ？』

『はア、有難う。今、隣りの部屋で休息してゐます。昨夜は徹宵眠なかつたもんだから。』

二人ながら云ひたい事は山ほど有つたが、口には容易に出て來ないので、二人共に云残した分を顔の色に見せた。

『貴弟の下宿へ行つたワ。』

『爾うでしたッてネ。實は僕一人の住居には家が餘り廣過ぎて、淋しくて仕様が無いから下宿へ引移りましたが、あの家ですナ、那樣な家は僕は要らぬから姉さんにお譲りませう。造作一式から家財諸式悉く貴姉にお譲りませう。』

『其様な咄をアグラフキヨーナから聞きましたが、妾が頂戴するのは結構だが、併し――』

恰度旅館の給仕人が銀の茶道具を持って來たので、二人は口を噤んで了つた。ナターリヤは直ぐ支度に掛つて茶を煎れたが、其間二人とも無言でゐた。

ナターリヤは聽てキツとなつて、

『妾は悉皆聞きましたよ。』と云ひつゝ昵とネフリユードフを見た。

『僕の事をですか。夫りや先ア何よりです。』

『ですけれども那樣いふ職業をしてゐる女が巧く矯正する希望がありますかエ？』  
 ネフリユードフは小さな椅子に行儀よく腰を掛け、姉の言葉を能く理解んで眞直ぐな答をしやうと一心に聞いてゐた。唯つた今がたマースロワと會つて勘忍ならぬ勘忍をした時の寛裕した心持が今でも伸んびりとして、誰に向つても奥底なく快よく話す事が出来た。

『女は如何でも、先づ僕を矯正したいと思つてます。』  
 ナターリヤは嘆息しつゝ、

『結婚しなくても何か他に方法が有りさうなもんですワネ』

『有るかも知れませんが、結婚するのが一番上策だと思ひます。夫にマースロワと結婚すると僕のやうなものでも役に立つ方面に出られます。』

『ですけれども那樣なものと結婚して貴弟が幸福だとは思はれませんワネ。』

『僕一個の幸福なんかは問題になりませぬ。』

『無論爾うでせうがネ、併しマースロワだつて心あるものなら矢張幸福な事はありませんワ。』

元來なら辭退する筈ですワ。』

『仰しやる通り、マースロワは辭退します。』

『夫れ其通り、妾には善く解つてますワ。人の一生でもものは——』

『成程——人の一生でもものは？』

『其様な事よりか最つと外に大切なものがありません。』

『外にと云つた處で、結局吾々は正しい事をするといふ外は有りませんまい、』とネフリユードフは云ひつゝ、眼の縁や唇邊にいくらか小皺が寄つても尙だ美しい姉の顔を見た。

『貴弟のいふ事は少しも解らないワ、』と姉は吻と嘆息を吐いた。

『大分姉も變つて了つたナ、』とネフリユードフは心中に思ひつゝ、婚禮前のナターリヤから二人が小兒の時分の數へ盡せない種々雑多の咄を憶出して眷かしく思つた。

其時ロゴヂンスキイは次の室から入つて來た。例の通りに昂然と身を反らして胸を突出しつゝ、シトシトと氣輕に靜かに例の眼鏡、例のツル／＼とした禿顛、例のチカ／＼とした眞黒な鬚

で、  
『御機嫌能う』と故意と言葉に力を入れて會釋し、慇懃に手を握り合つてからフウワリと安樂椅子に腰を落して、

『お話のお邪魔ですか。』

『イヤ何、僕は自分の話を人に祕すやうな事は嫌ひです。』

と云つたが、ロゴヂンスキイの毛むくぢやらかな手を見、尊大振つた己惚れ聲を聞くと今までの温かな心持が忽ち失くなつて了つた。

『なアに貴郎、ドミートリの一身上の相談をしてゐる處です、』とチターリヤは云ひつゝ、急須を取つて、『お茶を上げませうか。』

『一つ注いでお呉れ。一體如何いふ御相談かネ？』

『何アに、何でもない事。僕が昔し過つて墮落させた女が多勢の罪人と一緒に西比利亞に護送されますから僕も同行しやうといふ件です。』

『其事なら唯だ同行するばかりでなく、夫以上の計畫があるやうに聞いてますが。』

『爾うです。女さへ得心すれば結婚するツモリです。』

『眞實ですか。お差間がなければ腹藏ない處を伺ひたいものだ。何分我輩には君の眞意が理解めない。』

『僕の心持と云ふのは此女が——イヤ、此奴の墮落した第一歩がですナ——』とネフリユードフは適當な言葉が思出せないのでセカ／＼して、『僕の心持といふは、此女を墮落させた帳本人は僕であるのに、其の元兇の僕が罪せられないで、女の方が處刑されるといふは間違つてゐる。夫だから……』

『だが、其女だつて處刑されるのは矢張罪があるンでせう。』

『イヤ、全く罪が無いのです。』とネフリユードフは何も夫ほど一生懸命にならずとも可いのにヤツキとなつて詳しく話して聞かせた。

『夫は怪しからぬ。陪審員に爾ういふ無茶な決定をさせるといふのは裁判長の不注意極まつて

をる。併しさういふ場合には元老院といふものがある。』

『處か元老院は控訴を棄却しました。』

『元老院で棄却されたのを見ると矢張控訴する理由がなかつたのですナ、』とロゴヂンスキーは眞理は司法上の決定以外に無いといふ今の俗論を明かに承認するらしく、『だが、若し實際錯誤があるなら、皇帝陛下に請願する事が出来る筈です。』

『陛下へは請願書を出しました。併し成功する見込みはありません。何故なら先づ司法省へ照會するでせう、司法省は元老院へ交渉しませう。すると元老院は判決を繰返して答へるから結局同じ事です。』

『いや、司法省は決して元老院に交渉しません、』とロゴヂンスキーは高慢臭い微笑を浮べつゝ、『さう云ふ場合には直ちに前の刑事裁判所に命じて一件書類を悉く取寄せて調べ、若し裁判上の錯誤があれば直ぐ解る。であるから全く罪の無いものなら決して處刑される事はありません。勿論、偶には罪が無くて處刑される異例がないではないが、先づ處刑されるものは大

抵罪があるものと見て差支ない、』とロゴヂンスキーは傲慢に言放つて得意然と微笑した。

『僕の考は全て反対だ、』とネフリユードフは姉婚の態度が癪に觸つて堪らず、『恐らく法律に由て罰せられたる罪人は大抵悉く無辜の良民だと固く信じます。』

『無辜といふのは如何いふ意味で？』

『文字の示す通り何等の罪が無いと云ふ意味で。例へばマースロワは誰も毒殺した事はないのに殺人犯に照されてをる。此頃會つた或る男なども矢張夢にも覺えない殺人犯を擬せられてをる。又或る正直な母子の者が放火犯——實際は焼けた家の主人が自ら火を放けて置いて何にも罪の無い母子に塗付けた放火犯に問はれやうとしてゐるといふに到つては奇怪千萬ぢやアムらぬか。』

『夫はナ、裁判上の錯誤と云ふものは始終有りもしやうサ。所詮人間の作つた制度なら完全無缺といふ譯には行きません哩。』

『夫のみでなく、自分が育てられた此社會が悪事と認めてゐる事を平氣で犯して、自分では罪

だと思はないものがいくらもあります。』

『鳥渡お待ちなさい。君のお言葉だが、怎んな盗賊だつて人の物を盗むは善くない、盗んではならぬ、盗むのは不正だからは能く知つてますよ。』とロゴヂンスキーは沈着拂つて高慢臭い輕蔑するやうな微笑を洩らしたので、ネフリユードフは怫然として、

『處が知つてをりませんワ。といふのは、渠等は世間からは盗賊してはならぬと云はれてをりますが、併し工場の主人が賃銀を値切つて勞働を盗み、政府が租税の名目で官吏の手を経て人民の金を盗んでるのを渠等も亦能く知つてゐます。』

『全で無政府黨の云々だ。』

『無政府黨か何か知らんが、爾ういふ事實があるといふのです。貴下方が目する罪人ですナ、渠等は政府が人民から金を奪ふ事を知つてゐます。吾々貴族が萬人の共有たるべき土地を長い間渠等から奪つてゐた事を知つてゐます。然るに元來自分達も共有すべき權利ある土地から煮炊をする爲め小さな枝一本でも取つたら直ぐ捕まつて牢へ打ち込まれて盗賊呼ばりされる。』

けれども渠等は土地を奪つた地主の方が自分達よりも餘程盜賊なのを知つてゐるから元とく奪られたものゝ幾分を回復するのが當然の道で、盜賊とは決して思つてをらんのだ。』

『我輩には到底解らない。縱令多少解つたにしても同意は出来ない。土地といふものは誰かの所有でなければならぬ。若し君が所有地を分配する氣なら——』とロゴヂンスキーは悠々と沈着拂つて、ネフリユードフを社會黨であると飽くまでも信じ、社會黨は總ての土地を平等に分配すべきものと主張するが、斯の如き土地分配は甚だ愚を極めてゐる事は容易に説明出来る。と云つた。『今日君か平等に分配しても明日は又勤勉で智恵のある者の手に入つて了う。』

『誰も土地を平分しやうなぞと思つてゐるものはない。土地といふものは誰の所有としてもならぬものだ。買つたり賣つたり貸したり借りたりすべき性質のもんぢやアない。』

『所有權といふものは生れながらに人に在る。所有權が無ければ土地を開拓する目的が失くなつて了う。であるから所有權の破却は乃ち人間を野蠻の状態に驅つて了う。』とロゴヂンスキーは斷乎と言切つて、土地私有は争ふべからざる眞理で、人に土地を所有せんとする希望あるは

即ち土地所有の権利ある證據だといふ定り切つた俗論を繰返した。

「夫は反對な話で、何人も土地私有が出来なくなると今日の地主のやうに犬や豚同様ゴロ／＼寝てばかりゐられなくなります。土地は眞に勞働するものに使用せしめて愈々益々開拓出来るので、今日のやうに怠惰者の地主を廢して了つて初めて土地の利用が盛んになるわけです。」

「君の云ふ事は餘程氣が觸れてるとしか思はれない。土地所有權の廢止なんて事が今日の時代に出来て堪るもんか。失敬だが君、我輩直言する、君の云ふ事は矢張君が例の癖の變人論サ、とロゴヂンスキイは顔色を變へて聲を慄はした。餘程此問題が癢に觸つたものと見えた。「我輩切に君に忠告する。愈々實際に解決する意なら、其前に猶ほ十分此問題を熟考して貰ひたいもんだ。」

「君は何かエ、僕一個の身上に就て云ふのかネ？」

「爾うとも、吾々の如き特別な位置にあるものは此の特別な位置に伴ふ責任を盡さなければならぬ。我々が祖先から相續した現状を維持して之を子孫に傳へなければならぬのだ。」

「僕は却て——」

「先ア待ち賜へ、」とロゴヂンスキイは一言も云はせないやうに疊掛けて、「我輩は自分や自分の子孫の爲めばかりに云ふのでは無い。我輩は幸ひに一家を安樂に過すだけの資産を作つたから子孫の事は最う安心してをる。我輩は我輩の資産を子孫に傳へれば済むので、君が如何なる事をして什麼ならうとも我輩自身には更に痛痒を感じない。夫だから決して我輩一身の利害の上から云ふのではない。主義の上から君の説に同意出来ないのだから尙ほ十分に熟考し且最う少し公平な健全な書物を讀むやうに忠告するのだ。」

「御親切は難有う、だが僕一身の事は僕の自由にお置きなさい。ドンナ書物を讀まうと僕の勝手で君の知つた事ではない。」とネフリユードも顔色を變へて云つた。で、手が冷え切つて龜手んで了つたので、何にも云はずに茶を一口喫んだ。

「小兒達は如何してゐます」とネフリユードフは聽て沈着いて來てから姉に訊いた。  
 ナターリヤは、小兒達は祖母さんと一緒に溫和なく留守居をしてゐると答へつ、良人と弟の議論がお終ひになつたのを喜んで、昔しネフリユードフが小兒の時に黒奴だの佛蘭西女だのと名を付けた三ツの人形を相手に遊んだやうに自分の小兒達も矢張人形を翫弄に旅ごっこをしてゐると話した。

「姉さんは能く昔しの事を覚えてますナ？」とネフリユードフは笑ひながら云つた。

「覚えてなくてサ。家の小兒も矢張同じ様に遊んでるんだもの。」

二人の面白く無い議論が漸とこさとお終ひになつたのでナターリヤも安心したが、弟にばかり解る話を良人の前でするのを遠慮して、三人が三人に解る世間話を初めやうとして、カメンスキーの母が唯つた一人の子を決闘で失くした氣の毒な噂をした。ベテルブルグで大評判な此事件はモスコイまでも噂が擴がつたのだ。ロゴヂンスキーは法律一點張だから現行刑法が決闘で人を殺したのを普通の殺人犯から除外してゐるのが大不服でブツクサ小言を云つた。

何も彼も法律づくめで、法律にさへ觸れなければ能事畢れる如く思つてゐるロゴヂンスキーの言葉が片腹痛くて、ネフリユードフは復た議論をオツ初めやうとした。が、二人ながら思ふまゝを口に出さないで、腹の中でばかり持説に嚙り付いて、無言で鎗を削り合つてゐた。ロゴヂンスキーはネフリユードフが心中自分を擯斥し自分の職業までを輕蔑してゐるのを知つてゐるから、奈何がなしてネフリユードフの間違つた議論を説伏せてやりたかつた。

ネフリユードフは又、自分の所有地の處分にロゴヂンスキーが要らざる餘計な干渉するのが氣に喰はなかつた。(尤も内心の内心ではロゴヂンスキー夫婦初め兒供までがネフリユードフ家の財産相續者として容喙する理由があるを認めてゐないではないが)加之ならずネフリユードフが愚劣であり罪惡であると信じて少しも疑はないものを宛も正當な理があるやうに沈着き冷ましてゐるのが癢に觸つて、

「法律で怎うしやうといふんです？」

「決闘で人を殺したのも矢張普通の殺人犯同様に鑛山へ徒刑に宣告するが宜いのサ。」

ネフリユードフの手は復た冷えて来た。

『何故爾うしたら宜いのです？』

『夫が即ち正義ぢやないか。』

『すると正義は法律の目的なんですナ？』

『正義を目的としなくて、何を目的とする？』

『正義よりか寧ろ或る階級の利益の維持を目的としてゐるやうですナ。僕の考だと、今の法律は吾々の階級の利益の爲めに現在の秩序を維持する機械に過ぎないと思ふ。』

『夫は頗る新説だ。』とロゴヂンスキーは沈着拂つて莞爾々々しつゝ、『普通の解釋だと法律の目的は君の説とは全く違つてをる。』

『學理では爾うかも知れんが、實際は大に學理と違つてゐる事を僕は發見した。事實に於て今の法律は唯だ現状維持をのみ目的としてをるからこそ、普通の平準以上の思想を抱いて社會の組織を高めやうとする所謂國事犯や又は平準以下の人、即ち所謂罪人の典型なるものを檢舉し

刑に處するんぢやアないですか。』

『全然承服出来ない。第一、國事犯て奴は平準以上の思想を持つてゐるから罪せられるんぢやない。大抵は君が平準以下と目する罪人の典型と同様に、其の行き方こそ異なつてゐるが矢張社會から擯斥されてゐる無頼の破落戸に過ぎないのサ。』

『だが、僕は現に精神的に遙に裁判官より勝つてゐる國事犯をイクラも知つてをる。又異安心を稱へる宗教家も矢張道徳上——』

と云掛けたが、ロゴヂンスキーは常から餘り人に反對された事がないから、ネフリユードフの云ふ事を頭で耳にも入れずに益々憤激して、自分の思ふ事を飽くまで通さうとして、

『我輩は絶對に主張する、法律の目的は現状維持ぢやない、却て現状を改良する——』

『改良？ 成程監獄などは立派な改良法ですナ！』とネフリユードフは横槍を突込んだ。

『監獄は即ち、』とロゴヂンスキーは益々剛情に、『社會を紊亂する無頼の人間を社會から隔離する爲めだ。』



『夫が出来ない相談です。今の社会は罪人を恠うも恠うも出来んのです。』

『えッ、何だッて。君の云ふ事は何が何だか我輩には全然解らん、』とロゴチンスキーは強に推出したやうに笑つた。

『解らなければ説明しませうが、僕の考だと、昔の刑罰は尻ツベたを叩くとか黥をするとか、でなければ直ぐ首を刎ねて了うのですが、猶だしも此刑罰の方が合理だと思ふ。今の刑罰では人間の心が段々と生鈍になつて了う。』とネフリユードフは云つた。

『之は又、君の口から意外な珍らしい説を聞くもんだ。』

『體刑と云ふ奴は人の身體に傷を付けるから何時までも忘れない。二度と再び傷をつけられた罪を犯すまいと身に染みて思ふ。若し又全く社会に害が有り危険が有るものなら寧ろ直ぐと首を切つて了つた方が遙に理窟に適つてゐる。けれども單に無職業であるとか或は境遇の爲めに一時墮落したとかいふ人間を監獄に入れ、何にもさせずに懐手して飯を喰はせ、懶惰な悪い習慣を養ひ、其上に甲羅を経た無頼の惡漢と同居させて益々墮落せしむるとは何事ツた。其の上には、』

又、官費で遠方遙々と護送し、少なくとも一人五百圓以上を費やしてツラからイルクティックまでとか、クルスクから——』

『だが、此の官費旅行を人民は恐がつてをる。若し監獄や官費旅行が無かつたならお互が恠うして安心して座敷の中で沈着いてゐる事は逆も出来まい。』

『僕の考は大に違つてをる。監獄が社会の安全を保證出来るもんか。永久囚人を監獄へ入れて置くなら知らず、其様な事は出来んから何時かは放免してやる。處が今日の組織ですと、一度監獄へ入つたものが出て来る時は必ず前よりは一層墮落して悪くなつてゐるから、社会の危険は随つて益々増して来る譯です。』

『そんなら君は監獄制度を改良しろと云ふのかネ。』

『いや、爾うぢやない。改良なんぞして堪るもんですか。改良すれば改良するほど益々金が要つて、今日でさへが教育費以上を費してゐる監獄費を愈々増加して人民の負擔を重からしめる。』

『だが、假に一步を譲つて、君の云ふ通り監獄制度が不完全としても、直ちに法律其物を無効

だといふ事は出来ん。」とロゴヂンスキーは一向耳にも入れずに云つた。

『と云つた處で、監獄の不完全を補ふ途は着いてをらぬ、』とネフリユードフは聲を高くした。

『夫ちやア如何しやうツてのだ。罪人を殺して了うかナ。夫とも或る政治家が云つたやうに罪人の眼の玉を抉り出して了うかナ、』とロゴヂンスキーは云つた。

『爾うですナ。其方が残酷かも知れんが、併し効力は有りませう。今日行はれてるやうな制度は残酷である上に無効力で愚極まつてる。能くも如斯な馬鹿々々しいシカモ残酷極まつた法律商賣に關係してゐる人間があるもんだと思ふ。』

『我輩は現に關係してをる、』とロゴヂンスキーは顔色を變へた。

『君は其商賣をやつてるが、實は僕には其了簡が解らんのだ。』

『君には解らないだらうが、君に解らない立派な仕事は世の中には澤山有るよ、』とロゴヂンスキーは慄聲で云つた。

『現に僕は、』とネフリユードフは云つた。『公平無私の心で見たならば必ず同情すべき筈の不幸な

青年を無理遣に刑に處さうと全力を盡した検事のあるのを目撃した。又或る検事は異安心の宗教家を厳しく糺弾して聖書を読んだ事をさへ罪に落さうとした。裁判所てものは這般な没義道な事ばかりして、裁判官なんて奴は罪人を作るのを功名にしてをる。』

『さう思つたなら我輩だつて辭職して了う筈だ。』と云ひつゝロゴヂンスキーは席を離れた。

只見ると、ロゴヂンスキーの眼鏡の下が異様にギラ／＼してゐたので、『涙だナ、』とネフリユードフは心中に思つた。果して其の通りにロゴヂンスキーは言籠められた口惜し涙が洩れて來たので、突と席を離れて窓の側へ行き、手巾を出して咳拂ひをしながら眼鏡を脱つて眼を拭いた。

で、再び長椅子へ戻つて葉莖を燻かし始めたが、最う二度と物を云はなかつた。

是程までに姉夫婦を怒らせやうとはネフリユードフは思はなかつたので、有繋に氣の毒でもあり又大人氣ないのを心中に耻ぢた。殊に其翌日は出立して二度と言はれ無いのだと思ふと愈々氣の毒になつた。

で、心中ムシクシヤしながらソコ／＼に暇乞して家に歸つた。  
『自分の云つた事は眞理に近い。左に右く渠奴には返答が出来んのだ。が、言ひ方が穩當か  
なかつた。ツイ肝癢に觸つたので、怒らせる氣もなく渠奴を怒らしたり、人の好い氣の小さい  
ナターリヤまで氣を採ましたのは俺も些と溫和しくなかつた哩、』と心中に思つた。

### 第三十四回

マースロワの加はつてる囚徒の一隊は愈々午後三時の汽車で莫斯科を出立する筈だから、其  
首途を見送つて停車場まで一緒に行くには、（を）十二時前に監獄へ行かねばならぬ。

其前夜、荷物を梱け書類の整理をした時、日記が偶つと眼に留つたので、其處此處を拾讀み  
すると、ベテルブルグへ出立する前に書いた前後の記事には怒う有つた。

『カチューシヤは余の犠牲を受くるを欲しないで、却て自ら犠牲とならうとしてをる。彼女は  
勝つた、余も亦勝つた。容易には信じ難いが彼女の心に變化が起りつゝある如く見ゆるは何よ

りの幸ひである。滅多に信ずる事は出来ないが、再び眞正の生活に歸らうとしてゐるらしく見  
える。』

夫から猶ほ進んで讀むと、『余は極めて辛い且極めて喜ばしい或る事件を経験した。彼女が病  
院で不品行をしたと聞いた時は云はうやうなき大苦痛を感じた。其辯夫程に悲むべき事だとも  
考へなかつたのだ。彼女に會つて言葉を交へた時は不快と憎惡に堪へられなかつたが、不圖自  
ら顧みると、今まで、否、今でも、縱令心に思ふだけにもせよ、カチューシヤを責めるやうな  
罪を何遍犯したであらう。爾う思ふと自分自身が厭はしくなつてカチューシヤが不便になり、  
再び幸福を感じるやうになつた。若し我々が自分の眼の中の棟梁を屢々見るやうにしたなら、  
我々はどれほど親切になるだらう、』と書いてあつた。

夫から其次へ書續けた。『今日ナターリヤに會ひに行つた。余の増長慢は復たしても姉に對し  
て不親切無作法に振舞つて重苦しい感じが残つてをる。が、今更怎うする事も出来ない。明日  
からは新らしい生活が始まるのだ。古い生活には最早最後のお別れだ。さらば、さらば！ 萬

感交々臻るが、今は之を統一する事が出来ない。」

翌朝、眼が覺めた時、先づ第一に後悔したは姉婿と飛んでもない口論をした事で、

『此儘で行く事は出来ぬ、』と心中に、『何とか仲直りして行かすばなるまい。』と思つたが、時計を出して見ると、最う時間がない。急がなければ出立する時刻に間に合はんから、急いで支度をして、下宿の下男と、矢張一緒に出立するフキヨードーシャの良人のタラスに頼んで荷物を停車場に届け、直ぐ家を飛出して一番先きに目附けた辻馬車へ飛乗つて監獄へ行つた。

罪人列車はネフリユードフの乗る普通車よりは二時間前に出るから、ネフリユードフは下宿の勘定を綺麗に済まして最う戻らぬ意で家を出掛けた。

七月の堪へられない暑さだ。前夜盛んに蒸したお庇に晝間の熱が少しも冷めないで、往來の敷石や人家の壁や白葉鐵屋根から發散する熱が木の葉も動かない空氣に流れ込んで、時偶は風が些とばかり吹いても埃塵やペンキの臭氣の交つてるムウツとした温かい空氣を持つて來た。

少しは人通りもあつたが、何れも日蔭を擇つて歩いてゐた。ブロンズ色の日に焼けた道普請の土工ばかりが木靴を穿いてカン／＼した日向に座り込んで焼けほてつた砂の中に圓石を叩き込んでゐた。其間を元氣のない巡查が和蘭木綿の制服を着て、黄色の紐の附いたピストルを下けて、物臭さうに往來の眞中をノソリ／＼してゐた。鐵道馬車の馬は和蘭木綿の耳附き頭巾を頭からスツボリと被つて、喧たましい鉦の音と共にカン／＼と照つた中を往つたり來つたりしてゐた。

ネフリユードフが監獄へ行つた時は囚徒の一隊は尙だ廣庭から出て來なかつた。罪人受渡しの七面倒臭い仕事は朝の四時から初まつてゐるが、尙だ中々濟まなかつた。護送される罪人は男囚六百二十三人、女囚六十四人、一々帳簿に照して病人と纖弱な者だけを分離して精しく人數を調べてから引渡すのだ。新任の典獄と、二人の助役と醫者と、醫者の助手と、護送の士官と、書記とは壁寄りの日蔭に居列んで、筆墨紙を準備した高卓を共に、一人々々に罪人を呼出しては訊問して書留めてゐた。

日は段々と卓子に射して来た。ソヨとの風も吹かぬ上に、多勢の罪人の呼吸がして、むんむんとした暑さが頭を壓へて来た。

『こりや堪らんワ。何時になつたらお終ひになる？』と肩の怒つた手の短かい脊高の赤ら顔の護送士官は煙草の烟をコックリした口鬚へ掛けてブツツと吐出しつ、『此奴は壽命が續かん哩。何處から如此なに脊負ひ込んで来た。尙だ多勢在るンかネ？』

『女囚の外に二十四人あります。』と書記は帳簿を繰広げながら云つた。

『こら、何を然立つてる。さッさと此方へ來んか、ヤイ、』と護送士官は尙だ點檢が濟まないうで隅っこに凝集つてる罪人共を叱りつけた。此連中は三時間の餘もカン／＼した日に曝されて順番の來るのを突立つて待つてゐたのだ。

此點檢中、監獄門外、例に由て衛兵が銃を肩に警戒してゐる門外には罪人の荷物と足弱の半病人を載せて行く二十輛の荷馬車が列んでゐた。少し離れた町の角には護送される罪人の親類や友人が見送りの暇をひきあつて、成るなら二タ言なり三言なりの話しもし、餞別の品物も贈らうと

大勢待構へてゐた。

ネフリユードも此大勢の中に交つて一時間ばかり立つてる中に、聽て鎖の音や足音や役人の叱る聲や咳拂や囚徒のブツクサ吐く聲が聞えて来た。

其間が五分ばかり、獄吏が出たり入つたりしてゐるが、聽て號令が掛ると雷の鳴るやうな音がして開門した。忽ち鐵鎖のガラ／＼する音が高く響き、白服の護送兵が銃を肩に眞先きに繰出して門前に一列の環を作つた。常から十分に訓練されてゐる演習と些とも違はなかつた。更に復た號令が掛ると、剃四つた頭に麵麴形の味噌澆し帽を被つた罪人が二人づゝ組んで、袋を肩に片手を振りつゝ、鎖の付いた足を引摺つて出て来た。

先頭は徒刑囚の重罪人で、脊中に記號の付いてゐる鼠の服のお揃ひであつた。若いのが、若いのや、齡を老つたのや、瘦せたのや、肥つたのや、青さめたのや、赤いのや、黒いのや、髭の生えたのや、髭の無いのや、露西亞人や、鞆鞆人や、猶太人や、種々雑多の人間が鎖をガチャ／＼鳴らしながら、之から長い道中をすといふ覺悟で、勢ひ能く大手を振つて来た。が、十間ばかり

來ると、ハタと佇立つて、溫和しく四人宛に列を作つた。續いて頭を剃四つた連中が同じおひの服でゾロ／＼と復た繰出して來たが、今度の組は流刑囚で、足に鎖を付けない代りに手錠で繋がれてゐた。前の徒刑囚と同様に勇んでやつて來たが、不意に佇立つて四人づゝの列を作つた。其踵に續くのは町村組合の追放人だ。

同じ順序で女囚も續いて繰出して來た。眞先きは頭を包む手巾までが揃ひの色の鼠服を着た徒刑囚で、其次が流刑囚である。最後は自分の自由意思で良人に隨いて行く囚徒の女房達で、各自の村風や町風をしてゐたが、或る女は鼠の上衣の上前に赤子を抱んで抱いてゐた。夫から男の兒や女の兒が恰で牧場の馬の踵から馬の子がビョン／＼飛んで來るやうな鹽梅にゾロ／＼と隨いて來た。

男囚は無言で、折々咳拂ひをしたり一と言ふ二と言ふ口を利くだけだが、女の方は限界無しに喋舌つてゐた。ネフリユードフは女囚がゾロ／＼出て來た時に仄りとマースロワを見掛けたやうだが、忽ち多勢の中に紛れて見失つて了つた。唯見る、一團の鼠色の動物が脊中に袋を背

負つて兒供を件れてワヤ／＼ガン／＼してゐるだけで何處に一つ女らしい處も人間らしい處もなかつた。

門内で一巡人數の點檢を済ましたが、門外で復た最う一度點檢を仕直した。此時間が中々長くかゝつて、偶々其中の一人が動いて位置を換へると直ぐ點檢が間違ふので、其度毎に士官は怒つて罪人を飛ばしては、ブリ／＼しなからも溫和しく以前の位置に復るを待つて、復た新規に點檢を仕始めるのだ。漸く點檢が済んでから、護送士官が再び號令を掛けると、囚徒は俄かにドヤ／＼し初めた。弱蟲の男や女や小供は先を争つて荷馬車の方へ驅出し、各自に袋を投込んでから飛乗つた。ワア／＼啼いてる赤子を抱いてゐる女、キャツ／＼と居場所の喧嘩をする元氣な兒供、悄然と潮垂れてゐる半病人は思ひ／＼に馬車に乗つた。

中には脱帽して護送士官の許へ行つては何か訊いてゐるものも幾人があつた。車に乗つても宜いかと訊きに行くのだと後で解つたが、士官は見向きもしないで煙草をスバ／＼と燻かしてゐるかと思ふと、矢庭に囚徒の鼻頭で短かい手を振擧げたので、喫驚して撲たれまいと肩をすぼ

めて別章で、飛退つた。

『何だ貴様、贅澤を言ふ勿。歩いて行きなさい。』と士官は怒鳴り付けた。唯つた一人足に鎖を付けられてる老人が車に乗るのを許されたので、麴麴形の帽子を脱りつゝ十字を切つてイソイソと荷馬車の方へ馳けて行つた。で、車へ馳付けて乗らうとしたが、足の鎖が重くて中々乗れなかつたのを、車の上から女が手を持つて強に引摺上げた。

囚徒の手荷物袋が悉く積込まれ、車に乗るのを許されたものが悉く乗込んで了ふと、士官は帽子を脱つて、前額から禿けた頭、赤味のある肥つた頸筋の汗を拭きつゝ十字を切つて、

『進め、オイ！』と號令を掛けた。兵士の銃はカチ合つて鳴り、囚徒は帽子を取つて十字を切り、見送人が聲を掛けると囚徒も顧盼つて聲を掛け、女の中には胸が一杯になつて泣くものもあつた。で、渠等は白服の兵士に前後左右を警戒されて、鎖の付いた足で砂塵を揚げつゝ肅々と練出した。一番先きは兵士で、其次が足の鎖をガチャ／＼鳴らす徒刑囚、其次が二人づゝ手銃で繋がれてる流刑囚と町村の追放人、其次が女囚であつた。此の後に續いて袋を積んだ荷馬

車、夫から足弱を乗せた馬車が殿りをした。此の荷馬車の上で衣服を堅く纏付けた一人の或る女がオイ／＼聲を出して泣いてゐた。

### 第三十五回

囚徒の行列は長々と續いて、前列が見えなくなつて了つた頃、荷物馬車や足弱馬車が漸くに動き出した。で、最後の馬車が愈々動き出した時、ネフリユードフは待たして置いた辻馬車に飛乗つて、徐々と餘り急がずに行列の眞先きに追着くやうに、馭者に命じた。自分が知つてる囚徒が此行列に加つてゐるか否かを確かめたいのと、第一には女囚の中からマースロワを発見出して送り届けた品物を請取つたかと訊きたかつたので。

此日はジリ／＼と頗る暑かつた。微との風もなく、一千人の一隊が蹴揚げる砂塵は町の中央を行く行列の頭上を蔽ふた。一行は疾足でスタ／＼行くから、お練りの馬車で追着くには中々時間が要つた。何の列も何の列も皆奇怪極まつた猥悪な面をした男ばかりで、ネフリユード

フの知つてゐる顔は一人もなかつた。

同じお揃ひの服装で、同じ靴で歩調を揃へて渠等は元氣を附ける爲めに大手を振りつゝ進行した。何れを見ても同じやうで、何れも恠いふ奇怪な目に會つてゐるのだから、ドウモ人間らしくなくて一種の奇妙な恐ろしい動物の類としか思はれなかつた。其内に徒刑囚の中から人殺しのフキヨードロフ、流刑囚の中から道化者のオホーチンと、何時ぞや自分に縋つて來た浮浪人の一人を見付け出すと、此感情は忽ち失くなつて、矢張我々と同じ人間だといふ氣がした。何の囚徒も何の囚徒も一行の傍を過るネフリユードフの馬車に眼を付けて車中の紳士の顔を覗かないものはなかつた。フキヨードロフは氣が付いたといふ合圖に首を振り、オホーチンは眼をバチ／＼さしたが、叱られるとでも思つたか、二人共に會釋を仕なかつた。

女囚の列に追付くと直ぐマースロワを見付け出した。第二列の二番目であつた。一番目は足の短かい眼の黒い恐なさうな女で、上衣を帯に端折つてゐた。此女は異名で通つた『お洒落さん』だ。二番目は姪娘女で、意義さうに足を引摺つてゐた。三番目のマースロワは袋を肩に擦

いで正面ばかり見てゐるが、沈着いた覺悟の色が顔に現はれてゐた。四番目は若い美しいフキヨードロフで、短かい上衣に頭髮を手巾で包んだ百姓風をして、矢張沈着き濟まして元氣よく歩いてゐた。

ネフリユードフは馬車から下りて女囚の傍へ行き、マースロワの容子を訊き旁々品物が届いたかと尋ねやうとすると、護送の下士は直ぐ飛んで來て、

『話をしちや不可。傍へ寄ツちや不可。嚴禁ぢぞ』と叫りつけた。が、見ると獄内で誰知らぬものはないネフリユードフなので、帽子に手を舉げて鄭寧に會釋しつゝ、

『今は不可ません。停車場まで何卒お待ちなすつて。途中の談話は禁じてますから、』と慇懃に云ひつゝ更に囚徒に向ひ、『佇立ツちや不可——歩け、』と叫りつけ、急いで復た駈戻つて、此の暑さにも怯けずに新らしいテカ／＼した靴で大跨に威張つて歩いてゐた。

ネフリユードフは石疊の歩道をコツコツと行つた。其踵から辻馬車駈者は靜かに馬車を軋らせつゝ隨いて行つた。



通り縫りのものは誰も此行列を見て恐ろしいのと可哀相なのがチャンボンになつた妙な心持がした。馬車で追越す者は車から首を伸ばして罪人を睨と見送り、歩いてゐる者は佇立つて此の無氣味な行列を恐かな慄くに見てゐた。中には囚徒に施與をしやうと駈けて来て護送の兵士に金を渡す者もあつた。中には又茫然と我を忘れて踵に隨いて来ては、聽て氣が付くと首を掉つて佇立りつゝ睨と見送るものもあつた。兩側の家からはバラ／＼と馳出し、互ひに呼出したり、或は窓から顔を出したりして物をも言はずに身動きもしないで、此の恐ろしい行列を見物してゐた。

只有る四辻へ來ると、立派な馬車が此行列に喰止められてゐた。テカ／＼した顔の肥胖した馭者はコートの背後に二行鈕を附けた馭者服で馭者臺に乗つてゐた。馬車の中は夫婦仲れで、青白い顔の瘦削の夫人は薄色の女帽子を被つて華美な日傘を手に持つてゐた。主人は高い禮帽を戴いて上等仕立の薄色の塵除外套を着てゐた。夫婦と相對つて男の子と女の子とが腰を掛けてゐた。女の子は房々したブロンド色の髪をお下げにした花のやうな可愛らしい子で、立





派な装をして矢張華美な日傘を手に持つてゐた。男の子は八歳ばかりで、首筋の細い頬骨の高い神經質らしい子で、長いリボンの付いた水兵帽を被つてゐた。

主人は何故氣を利かして素早く行列の前を切抜けなかつたかと馭者を叱り付けてゐた。夫人は半分眼を塞いで顔を擧めつ、塵埃と日とを避けるため絹の日傘を翳してゐた。デブ／＼した馭者は主人が此町を通れと命じて置いたくせに今更無理な叱言をいふのをブリ／＼して苦蟲を潰しながら、十分に張り切つてゐる逞しい二頭の黒い馬の手綱を一生懸命に引締めてゐた。

警戒巡査は忠義立てに如何がなして行列を留めて、此の立派な馬車を通り抜けさせたいのが山々であつたが、此の嚴めかしい行列は如何なる立派な大紳士のためでも理由なく留める事が出来ないのを知つて、誰だ帽子に手を擧げて敬意を表し、且囚徒を睨め付けつゝ、此の馬車の主人公を保護してゐるぞと云はぬばかりのま振りをして見せた。仕方がなしに行列が通過するまで待つて、愈々最終の荷物や足弱や病人を積んだ馬車が通つて了つてから徐々と動き出した。例のオイ／＼泣いてゐたヒステリーの女は段々沈着いて來たが、此立派な馬車を見ると忽

ち復たシク／＼と泣き出した。

此時馭者は軽く手綱を弛めると、駒は蹄を憂々と小石に蹴付けて踏鳴らしつゝ靜かに護謨輪を牽出して、一家四人を田舎の別荘へと遊山に乗せて行つた。

父も母も目前に見る此の奇怪な行列の意味を小兒に話して聞かせぬから、兒供達は各自思ひ通りに判断した。

娘は両親の顔色から想像して、恚ういふ人間は自分の両親や親戚知己とは全で違つてゐる根からの悪者だから那樣云ふ目に會ふのだと一圖に思込み、唯だ恐ろしいとばかり思つてゐるから影の見えなくなつた時漸つと安心した。

が、男の子の方は初めから目も放さずに囚徒をいてゐるが、殆んど神から告げられたやうに少しも疑はずに、是等の囚徒達も矢張自分達と同じ人間である事を固く信じてゐた。で、恚ういふ無残な目に會ふのは畢竟何者かに陥められたからであると思底から氣の毒に思つて、此通りに頭髪を剃られたり鎖で繋がれたりしてゐるものも渠等の頭髪を剃つたり渠等を鎖で繋いだ

りしたのも双方共に淺ましくて、段々胸に迫つて泣出したくなつたが、此場合泣くのは耻だと思つて強に齒を切ばつて唇を震はしてゐた。

### 第三十六回

ネフリユードフは囚徒の早足と同じ速度で歩いた。薄着をしてゐても矢張非常な暑熱で塵埃交りのムンムとしたジリ／＼燻付くやうな空氣に息もつけず、漸と三四町ばかりしか歩かない中に、既う辛抱が仕切れないで復た馬車に乗つた。が、カン／＼した街巷の中央では矢張暑くて堪らず、ロゴジンスキーとの前夜の論判を憶出さうとしても今朝程には激してゐなかつた。現在眼の前に慘憺たる囚徒の行列を見たり、此の堪へ難、暑さにジリ／＼と責めつけられては中々夫どころでなかつた。

只見ると、石疊の歩道の垣根越しに枝を伸した木蔭に氷菓子屋が蹲んでゐた。學校の小兒が二人、帽子も冠らずに上から押被さるやうに立つて、一人は角のスプーンで拗つて甘味さ

に舌打ちし、一人は氷菓子屋が黄色に盛上げてゐるコップを舌なめすりして待つてゐた。

『何處かで何か飲む處はなからうか、』とネフリュードフは堪らなく咽喉が渴りついて來たので馭者に訊くと、

『直ぐ其處に上等お茶屋があります、』と云ひつゝ、馭者は町角を曲つて大きな看板の出でゐる家の前に馬車を止めた。

帳場の後ろには露西亞ジャツを着た肥つた番頭が控へ、昔しは白かつたジャケットを着た給仕人が退屈さうにお客の在りない卓子に凭れてゐたが、不時なお客の舞込んだのを奇訝な顔してジロ／＼見ながら御用を聞いた。

ネフリュードフはセルツエル水を一本命じつゝ、窓から少し離れて、小汚ない布を掛けた小さな卓子に向つた。彼方の卓子には急須茶碗と白い壺を共に二人の男が相對つて、前額の汗を拭きながら親善さうに何だか相談してゐた。其中の一人は色が黒く前額が禿けて、丁度ロゴジンスキーのやうに後頭にチヨボ／＼と毛が生えてゐたので、此の風采振を見ると忽ち昨日の

論判を憶出した。

『出立前に最う一度姉夫婦に會つて置きたかつた——と云つて最う會ひに行く時間がない、』と考へて、『手紙を書いた方が可い』と思ひつゝ、半切と状袋と郵便切手を取寄せて、冷たいセルツエル水を飲みながら、扱て何と書いたもんだらうかと考へた。が、心はワク／＼と落付かないので、イクラ考へても手紙の案文が纏まらなかつた。

『親愛なる姉上へ參らせ候、昨夜はロゴジンスキー兄に對して意外なる失言仕候段何分此儘出立仕候ては心に相濟ませ候まゝ一と筆申上候……』

『此次は何と書く？』と筆を休めて復た考へ初めた。昨日言つた事を勘辨して呉れども書くか。だが、心に思ふ儘を忌憚なく云つたので、詫まる筋は少しも無い。勘辨して呉れども云つたなら、渠奴めは俺が持説を撤回したとでも思ふだらう。加之ならず、増長つて俺の私事にまで無用の干渉をする……コリヤ迂闊な事は書けんワイ。』

と思ふと、此方の心持も解らないで要らざる餘計な容喙をする路人同様な自惚れ男の鼻持も

ならないのが復たムラ／＼と憶出されて、折角書掛けた手紙を疊んでポケットに入れた。直ぐ勘定を済ましてから馬車に飛乗つて行列の踵を追つた。

益々熱くなつて来た。石や壁から熱した空気を吐出すかと怪まれ、往來の敷石は足を焦かさうだ。ツイ迂濶りと辻馬車のニス塗の泥除に手を掛けた時は火傷をしたかと思つた。

馬は意義さうにタク／＼として凸凹した砂塵の道を蹄で蹴附けてゐた。馭者は絶間なくウト／＼と座睡してゐた。ネフリユードフは突然として前の方ばかり見てゐた。

只有る町端れの大きな家の門前まで来ると、道路が下水へ傾斜に溝鉾形になつてゐる處へ多勢の人が集つて、其傍に護送兵士が銃を肩に立つてゐた。

ネフリユードフは馭者を呼留めつ、

『如何したんだ？』と丁度來合した立ちん坊に訊くと、

『懲役人が如何かしたんでサア、』と立ちん坊は答へた。

ネフリユードフは馬車から下りて人立ちを分けて行くと、下水の粗質石の傍に鼠のお仕着せ

の囚徒が倒れてゐた。肩幅の廣い、鼻の扁平、赤鬚赤ツ面の中年者で、足よりは頭を下けて仰向けに、汚點だらけの手をだりとして血走つた眼を空に向け、幅の廣い鳩胸を大浪のやうに煽つてウンウン叫いてゐた。其傍には佛頂面の巡查と、行商人と、郵便脚夫と、商家の手代と、日傘を手に持つ年寄の女と、空籠を携へてゐる糞栗の小僧とが立つてゐた。

『懲役人は悉皆弱つてゐまさア、』と商家の手代は今來たばかりのネフリユードフに向つて、『散三監獄で身體を臺なしにした擧句にカン／＼した日盛りになり摺出されちやア誰だつて絶命いちまひまさア。』

『最う助かりますまいネ、』と日傘を手に持つ老婦人はオロ／＼聲で云つた。

『襯衣の前を開けてやらなければ、』と郵便脚夫は云つた。

巡查は強硬な指を慄はしながら、覺束ない手付で病人の太い筋だらけの赤い頸に結び付けたシャツの紐を解かうとして、周章た夢中になつてゐるが、其の最中、偶つと人立ちを制さねばならぬのに氣が付いて、

『こら／＼、何故立つちよる。此の暑いのに多勢立つちよつては風が通らんワイ。』

『一體なら健康診断をして、身體の衰弱してゐるものは後廻しにするのが當然だ。之ちやア生きてゐるよりは死んでゐるものを護送するやうなものだ。』と商家の手代は法律を心得顔に辯じた。

巡査は漸との事で襦衣の紐を解いてから、突と起つて周圍を睨め廻し、

『こら／＼、何故立つちよる。退きやんかい。お前等が知つちよる事ツちよごは／＼ん。何が面白いんぢや、』と叱りつけつゝ、世話が焼けて困ると云はぬばかりにネフリユードフを見て察して貰はうとしたが、一向其様な氣色が見えないので、今度は護送兵の顔に視線を轉じた。

が、兵士は自分の靴の踵が摺り減つたのを驗めてゐて、巡査が途方に暮れてゐるのを一向取合はなかつた。

『肝腎の役自の奴らが放ときやアがる。恚うして人間を殺して濟むと思つてゐるか。罪人だつて矢張人間だぜ。』と人集りの中から種々な聲が聞えた。

『頭を高くして水をお與んなさい。』とネフリユードフは云つた。

『水は取りに遣りやんした。』と云ひつゝ巡査は險呑さうに病人の小脇へ手を入れて抱起した。

『こらッ、何故立つちよる？』と忽ち嚴かしい聲がすると共に、ピカ／＼した制服にテカ／＼した靴を穿いて警部が人立ちを分けて來て、『退け、退けッ！ 立つちやア不可ん、』と尙だ何事があつたか解らない内に多勢を叱り飛ばした。

で、傍へ行つて中年者の囚徒が急病で死にかゝつてゐるのを見ると、宛も待つてゐたと云はぬばかりに首肯きつゝ巡査に向つて、『如何したんだ？』

巡査は、護送囚徒の一人が途中で突然斃れて去りにされたのだと答へた。

『宜し／＼、署へ伴れて行かう。辻馬車呼びなさい。』

『今、呼びにやりやんした。』と巡査は云つた。

商家の手代は復た何か言初めた。

『お前の關係した事ぢやない。退きなさい。』と警部は叱りつけつゝ、恐い顔をして睨みつけたので、黙つて了つた。

『水を與らなければ……』とネフリユードフは云つた。

警部は復たもやネフリユードフを睨み附けたので、ネフリユードフも黙つて了つた。

處へ水を一杯汲んだ茶碗を持つて來たので、警部は水を吞ませろと命じた。巡查は病人のグタリとした首を仰向かして水を飲ませやうとしたが、最う飲むだけの力がなくて、水は髭に傳はつてジャケットから汚い木線の襦袢までを濡らした。

『頭から打掛けなさい、』と警部は命じた。巡查は病人の被つてる麵麩形の帽子を脱つて、赤い縮れ毛から腦天の禿けた處へ水を打掛けると、病人は喫驚して眼をバッチリ開いたが、姿勢を壊すだけの力も無く、汚ない水が垢だらけの顔へ幾筋となく流れても、矢張前と同じく息はしく喘々して全身を慄はしてゐた。

『馬車が來てをるワ。』と警部はネフリユードフの辻馬車を指して、『之へ乗せて行きなさい。』

『お客がありますよ、』と辻馬車馱者は見向きもしないで氣の無さうに云つた。

『之は私が備つたのですが、シカシお使ひなすつても可い、』と云ひつゝネフリユードフは馱者

に向つて、『代は私が拂つてやる。』

『では爾うするか、』と警部は聲を厲らけ、『ヤイ、何を茫然してる。さッ、病人を乗せなさい。』

巡查や人足や護送兵士が一緒になつて垂死つてる病人を馬車に擔込んで腰を掛けさせやうとした。が、最う腰を掛けるどころでなくガツクリ首を垂らして較やとすると身體を滑らした。

『臥かしなさい、』と警部は命じた。

『何、大丈夫。恙うして行きやんせう、』と巡查は合乗りして滑落らさうになる病人を横抱きにした。護送兵は素足に踵なしの牢屋靴を穿いてる病人の脚を揃へて馱者臺に乗せた。

警部は周圍を見廻しつゝ、病人の麵麩形の帽子が落ちてゐるのを見附けて、水だらけの病人の頭に載せた。

『行けッ！』と警部は命じた。

辻馬車馱者はブリ／＼しながら馬車をクルリと廻して護送兵に送られつゝ警察署へと後戻りした。巡查はシツカリと病人の身體を引抱へて滑落らないやうに一生懸命になつてゐた。病人

の首は前後左右にガク／＼してゐた。  
馬車脇に添つてゐる護送兵は始終氣を付けて病人の足を直してゐた。ネフリユードフも其踵から一緒に隨いて行つた。

### 第三十七回

病囚を載せた辻馬車は消防夫が立番してゐる警察署(モスコイでは警察署と消防署とは一つ處である)の門を入つて空地に對つた只右の入口の前で駐つた。

此處には五六人の消防夫が袖を手繰り上げつゝ車の掃除をしながら、大聲で下らぬ話をしてゐた。馬車が駐ると共に五六人の巡査が寄つて来て、囚徒の息の絶えた身體を重量で軋む馬車から抱き下した。

病囚と同乗して來た巡査は馬車から下りて、痲痺れた腕を振りつゝ、帽子を脱つて十字を切つた。聽て病人は入口から二階へと擔ぎ上げられた。其踵からネフリユードフも一緒に隨いて







行つた。

二階の狭苦しい小汚ない室に四個の寢臺が据ゑてあつた。頸に縋帶した口の曲んだ男と肺病患者の男とが、何方も病院服で二箇の寢臺を占領し、残り二箇だけが空いてゐた。病人は其中の一つに臥かされた。

すると眼付のキョト／＼した小作りの男が、眉毛をビク／＼と間斷無しに動かして、下衣と靴足袋ばかりの装で何處からかチヨ／＼と驅けて来て、病人とネフリユードフとを交代りに見てゐるが、忽ちゲラ／＼と笑ひ出した。此の奇妙な男は近頃警察病院へ收容された狂人で、

『嚇かさうと思つたツて、爾う巧く行くもんか、』と云つた。

巡查が病人を擔込んだ踵から警部と醫者の助手が隨いて來た。

醫者は直ぐ其傍へ行つて汚點だらけの手を軽く握つた。尙だ柔らか／＼つたが、全て死人色になつて既う冷たかつた。暫らく握つてから離すとダラリと力なく腹の上に落ちた。

「駄目だ、」と醫者は云つた。が、一ト通りの診察をしやうとして、シヨボ濡れの風色の襦衣の釦鈕を外し、黄色の幅廣の胸を露して耳を押當てた。一同は片唾を呑んで寂としてゐた。聽て醫者は起つて首を傾けつゝ、病人のバツチリ開いた青い腫の座つた兩眼の眼蓋を一つ／＼に撫で、見た。

「恐かアないぞ、恐かアないぞ、」と狂人は繰返しつゝ、醫者を目掛けて唾を吹掛けた。

「如何です？」と警部は訊くと、

「さア、」と醫者は答へた。「死亡室へ持つて行くんだネ。」

「最う駄目カナ？」と警部は云つた。

「爾う恙うする中に駄目だらう、」と醫者は病人の廣げた胸を搔寄せながら、「だが、念の爲めマトウエー君を呼んで診せるカナ。ペトロローフ、」と使丁を呼んで、「マトウエー君を呼んで來なさい、」と云ひつゝ、死骸から遠く離れた。

「左に右く、オイ君、死亡室へ持つてくんだ、」と警部は護送兵に向つて、「夫から死亡室へ持つ

てつてから、復た爰へ戻つて始末書に記名するのだ。」

「はア、」と護送兵は云つた。

巡查は死骸を擔いて階下へ下りた。ネフリユードフも直ぐ踵から隨いて行かうとすると、瘋癲先生は無圖と衣服を掴んで一寸も動かさないうで、

「君だけは彼の悪黨の連中ではなからう。仲間でないなら紙賃を一本呉れ、」と云つた。ネフリユードフは直ぐ紙賃入から一本出して與つた。

瘋癲先生は眉毛をビク／＼と動かしながら、所謂悪黨共が何だの彼だのと七面倒臭い尋問をして困らせる苦情を早口で喋り出した。「何故だか知らんが、みんな僕に反對して、種々な工風をしては辛めますよ。」

「失敬する、」とネフリユードフは捨言葉を残しつゝ、半分聞かずに飛出して、何處へ死骸を持つて行つたかを見定めやうとした。

其時、巡查は既に廣場を横切つて物置へ死骸を擔き込まうとする處であつた。ネフリユード

フは其處まで行つて實施を見届けやうとすると、警部は忽ち呼止めて、

『何か用が有りますか？』

『何にも。』

『何にもなければお歸りなさい。』

と云はれたので、仕方がなしに後戻りして辻馬車の待つてゐる處へ來ると、馭者めはコク／＼と座睡してゐたので、直ぐ呼覺して馬車へ飛乗りさまに停車場へと急がした。

凡そ一町ほど行くと護送兵が銃を肩に附添つてゐる荷車に出會つた。車の上には最う既に死んで了つたらしい又一人の囚徒が仰向けに臥そべつて、眞黒な鬚ムシヤの顔を麵麩形の帽子で鼻まで蔽して、車ガタクリする度に剃凹つた頭をガク／＼動かしてゐた。手綱を手に持つ馬方は重い靴を引摺つて車の側に付き、其の又後から巡査が踵いて行つた。

ネフリユードフは馭者の肩を軽く叩くと、

『如何です旦那、御覽なせエ、復た殺られてますぜ、』と云ひつゝ、馭者は馬を留めた。

ネフリユードフは馬車から下りて荷車の踵に付き、再び消防夫の立番してゐる警察署の門を入つた。今方、車の掃除をしてゐた消防夫は仕事を済まして引込んで了つた後で、脊の高いコツ／＼した消防隊長が青筋入りの帽子で衣兜に兩手を突込んだまゝ突立ち、恰も消防夫が牽出して來た逞ましい首太の紅栗毛の馬を見てゐた。此馬は前脚を一本折つて跛を引いてゐた。消防隊長はブリ／＼怒りながら傍に立つてゐる獸醫と何か話してゐた。

其傍には警部が立つてゐた。復た死骸を持込んで來たのを見ると、直ぐ束々と進んで、

『何處で拾つて來た？』と苦々しげに首を掉りたてた。

『ゴルバートウスカヤで、』と巡査は答へた。

『囚人か、』と消防隊長は訊いた。

『爾うだ。加之に今日は二人目だ。』

『厄介な、世話を焼かせやがる。尤も煮えくり返るやうに暑いけれどナア、』と消防隊長は云ひつゝ、願附いて、跛の馬を牽いて來た消防夫に向ひ、

『隅ッこの厩に投り込んで置け。夫からナ、ヤイ、能ツク聞け。大切の馬を傷物にしやがつて、飛んでもねエ事をしやがつた。コン畜生め、馬でもものはナ、汝のやうな無能者よか餘程高エンんだぞ。』

死骸は車から抱下されて、前と同様に二階の病室へ擔込まれた。ネフリユードフは化かされたやうにウカ／＼と其踵に隨いて行つた。

『何か用ですか？』と一人の巡查は訊いた。

が、ネフリユードフは何とも答へないで、死骸が擔込まれた室まで行つた。例の瘋癲先生は寢臺に腰を掛けてネフリユードフに貰つた紙苜を樂しさうに燻かしてゐた。

『ヤツ、歸つて来たナ、』と云ひつゝ狂人はニヤリと笑つた。死骸を見ると妙な顔をして、『復た持つて来やがつた。煩セエなア。此方は最う孩兒ぢや無エヤイ。』

死骸の顔を蔽した帽子は取れて了つたので、ネフリユードフは初めて情々と其顔を見ると、前の小汚ない醜男とは打つて變つた中々の好男子であつた。目鼻立から體格までが揃つて、而

も男盛りの年配で、惜しい事には、頭の半分剃つてゐるのが瑕瑾であるが、前額つきの形狀好く、鼻筋通りて、其下には黒い髯が薄く生え、紫色の薄い唇には尙だ微笑を泛べ、形狀の好い耳の下から頤へ掛けて薄い髯が縁取つてゐた。總じて落着いた眞面目な溫和かな相であつた。

尤も此男には高潔な精神生活の出来る性格が最早破壊されて了つたのは誰にも直ぐ看破されるが、械を箝められた手や足の骨組の岩疊な事や、釣合の能く取れた手足の筋肉の逞ましい事や、實に申分なく十二分に發達した立派な身體で、單に一個の動物として見たなら、消防隊長が足の折れたのを怒つてガリ／＼叫りちらした紅栗毛よりも遙かに完全したものであつた。

が、死んで了つた曉には、誰一人、人間として弔はないばかりか、一個の立派に發育した動物としてさへも悲んで呉れる者はなく、唯だ死骸を片付ける迷惑を掛ける厄介者としか思はなかつた。

警察醫は助手を伴つて署長代理と共に病室へ入つて来た。警察醫はデク／＼した骨組の岩疊な男で、印度絹のコートに肥つた股一杯の同じ地質の洋袴を穿いてゐた。署長代理はズングリ

むつくりした男で、毬のやうに膨れた赤い頬べたの破れるほど空気を吸つては悠々と吐出しつゝ、眞赤な顔を愈々眞赤にする妙な癖があつた。警察醫は死骸と竝んで臺に腰を掛け、ツイ今がた助手の醫者がした通りに、胸に耳を當て、心臓の鼓動を聞き濟ましてから、突と起つて洋袴を撫下しつゝ、

『最う駄目だ。』

署長代理は口一杯に空気を吸つて悠々と吐出してゐた。

『何處の監獄のもんだネ?』

護送兵は其間に答へてから、死骸の足に繋いだ鎖を注意した。

『鎖を外して了ひたいが、鍛冶屋を呼んで來やうかナ、』と署長代理は云ひつゝ、復た空気を口一杯に吸込んでから悠々吐出しながら室の外へ行つた。

『怎うして這般な事になりました?』とネフリユードフは聽て警察醫に訊いた。

醫師は眼鏡の中から睨つと見つゝ、『怎うしてとは怎ういふ仔細? 怎うして日射病に罹つた

と云ふんですかエ? そりや又何故? 長い間を日の目を見ないものを今日のやうな熱い日に、シカモ全で風がなくて多勢の喘れでムンムとする日盛りの中を引摺つて行けば忌でも日射病になりますワ。』

『そんなら、何故又這般な日に引摺出したもんでせう?』

『夫りや何故だか我輩は知らん。引摺出した當局者にお訊きなさい。一體貴下は誰方です?』

『私は何——無關係の者です。』

『ア、左様か。夫では失禮する。我輩には時間がムらぬ。』と云捨てつゝ、醫師は洋袴を下の方へ撫下ろしながら第一人の病人の寢床の傍へ行き、

『怎うだネ、容體は?』と頸に縋帶した口の曲んだ男に訊いた。

其、瘋癲先生は床の上に坐つてゐたが、紙苘を喫切つて了つたので醫者の方を向いては速りに唾を吐いてゐた。

ネフリユードフは屋外へ出て、消防夫の馬や、鶏や、眞鍮のヘルメット型の制帽を被つた門

衛の前を通り過ぎつゝ門を出て馬車へ飛乗つた。駭者は復たグツスリと熟睡んでゐた。

### 第三十八回

ネフリユードフが停車場に着いた時は、囚徒は既に盡く鐵格子の窓の附いた列車に乗込んでゐた。見送りの人達はプラットフォームに立つてゐたが、車室に近づくのを許されなかつた。

此日は護送の役人が中々骨が折れた。停車場へ来るまでにネフリユードフが目撃した二人の外に猶ほ三人、都合五人の囚徒が日射病で斃れて死んだ。(之はモスコに於ける事實で、千八百九十二年頃アテールスキイ集治樞からニュージニー停車場へ行く途中一時に五人) 其中の一人は初手の二人と同様に近所の警察署へ收容されたが、残る二人は停車場で斃れたのだ。元來なら大切に介抱つてやるべき筈のものを預かりながら、五人までも病氣で殺したと云つては甚だ相濟まんわけだが、實は這般な事はお茶の子で一向痛くも痒くもない。唯、法律で定められてゐる一と通りの手続き、即ち死者に關係した

書類や所有品を死骸と一緒に其筋に引渡したり、ニュージニーに送る罪人引續ぎ名簿の中から死んだ者の名を削つたりする、這般な餘計な手数が此の暑い最中に殖えるのが面倒臭いだけである。

で、護送士官が此手続きを運んで了うまでは、囚徒に面會を請願したネフリユードフ初め見送人一同が車室の傍へ行くのを許さなかつた。尤もネフリユードフは祕密で護送の軍曹に心附けをしたお蔭に、誰よりも一番先に許されて、寛大の警戒線を通るのを見免して貰つたが、成るべく早く切上げて上官の目に留まらないやうにと念を推された。

列車の数は十八である。其中の一車を護送士官が占領した外は囚徒で盡くギシギシと詰つてゐた。ネフリユードフが車室外を通ると、鎖の音や聲高に罵り叫くタワイもない話がガヤ／＼と聞えたが、ツイぞ一と言、死んだ仲間の噂をするものはなかつた。

或る車室を覗いて見ると、護送兵士が二人掛りで囚徒の手錠を外してゐた。囚徒が手を延ばしてゐると、一人の兵士は鍵で手錠を外し、一人は外した手錠を集めてゐた。

男囚の車室を通り過ぎて了うと女囚の車室で、二番目の車室の中で、「南無、南無／＼／＼南無／＼」と叫つてゐる者があつた。

此車室を通り過ぎて兵士が教へて呉れた三番目の車室へ行き、窓の近くへ顔を出すと、呼吸臭い生温い空気がベタリと頬を撫でた中からキイ／＼した女の聲が聞えた。

車内はお仕着せの獄衣と白いジャケットの女囚で一杯である、何れも赤く汗ばんだ顔をして大きな聲でガヤ／＼と叫びてゐた。ネフリユードフの顔が窓に見えると一同は忽ち目を付けて、端近のものは話を止めて窓へ寄つて来た。

マースロワはジャケットぎりで、頭に手巾も被らずに向ひ側の窓に腰を掛けてゐた。其の手前隣席に腰を掛けてゐる美しい愛嬌のあるフキヨードーシャは逸早く気が付いて、マースロワの腕を突いて知らせると、マースロワはイソ／＼座を離れて、急いで手巾を緑の黒髪に投掛けつゝ、眞赤に熱つた顔に微笑を含みながら窓へ来て格子に掴まつた。

「殿しい、暑さでムいます、と嬉しさうに莞爾々々しながら云つた。

「品物は届いたかネ？」

「はア、難有うムいます。」

「尙だ欲しい物があるなら、」とネフリユードフは訊いた。其途端、籠の中から吹いて来たやうなポカ／＼した暖かい空気が車室の中から襲つて来た。

「何にも欲しい物はムいません。難有うムいます。」

「飲む物が戴けるとネエ、」とフキヨードーシャは聲を掛けた。

「爾うネ、飲む物が戴けるとネエ、」とマースロワも繰返した。

「飲むものとは？ 全て飲料を買はんのかネ？」

「少とは貰ひましたが、既う呑盡して了ひました。」

「夫ンなら護送の役人に直ぐ頼んで置かう。それで、ニージニーに着くまでは最う會ふ事は出来なないテ。」

「呀、」とマースロワは少しも知らなかつたやうに、「矢張入来つしやるのでムいますか、と云ひ

つゝネフリユードフを嬉しげに見た。

『次の汽車で行く意だ。』

マースロワは何にも云はずに、聽て深い溜息を吐いた。

『一寸いと、旦那』と佛頂面の婆さんが唐突に男のやうな太い聲で、『十二人死んだつてますが、眞實でせうか？』

此婆さんはコラブリヨールである。

『二人とは聞かなかつたが、二人だけは見て来た。』とネフリユードフは云つた。

『何でも十二人殺したつてますが、其様なに殺してもお處刑にならないでせうか。畜生、罰中りだよ。』

『女の中には病人は無かつたかネ？』

『女は悉皆壯健です』と脊の低い第一人の女は嫣然と笑ひながら、『唯つた一人臨月の女があります。ホラ、隣室で叫つてる聲がしませう』と二番目の車室の泣聲を指さした。

『ねエ貴郎、妾、お願いがムいます』とマースロワは心底からの嬉しさを強に包まうとするやうな氣色で、『那の臨月の方をですネ、あの方を後廻しにして上げる事は出来ませうまいか。貴郎からでも咄して戴いたら——』

『宜しい、咄して見やう。』

『最う一つお願いがムいますワ。フキヨードーシャさんを御亭主のタラスさんに會はして上げたいのですがネ』と莞爾々々してゐるフキヨードーシャを指さしつ、『タラスさんも矢張貴郎と一緒に行くンぢやなくツて？』

『貴下、談話をしてはなりませんぞ』と通掛りの軍曹は唐突に聲を掛けた。

此軍曹はネフリユードフが心附けをして寛大に見貰つた男とは違つてゐたので、直ぐ車室を離れて懷妊女とタラスの一條を頼まうとして士官を捜しに行つた。が、怎うしても士官が見付からないので、護送兵に訊いて見ても誰一人對手になつて呉れなかつた。何れも忙かしさうにマゴクして、其處ら此處らへ囚徒を引張り廻したり、食物を買ひに出掛けたり、手荷物を



車室に持込んだり、士官の件れて行く婦人の世話をしたりして、誰一人、碌な返事をするものも無かつた。

二番目のベルが鳴つた時、漸とこさと或る士官が見付け出した。

士官は短かい手で口の上に蔽ひ被さる髯を撫で上げながら肩を揺つて、何かの件で下士官を叱り付けてゐた。が、ネフリユードフを見ると、

『何か御用ですか？』と訊いた。

『彼處に臨月の女がをりますがナ、彼は怎うでせう、後廻しにしたら——』

『先アあの儘にして。何とか後で處分しませうから、』と士官は云捨てつゝ、短かい腕を振りながら自分の車室へと駆けて行つた。

此時、口笛を手に持つ車掌が通つて行つた。其中に最終のベルが鳴つた。聽て發車の口笛が耳を劈くとブラットフォームの見送人や女囚の車室の中から、オイオイ聲を上げて泣いたり、忍び音にシク／＼泣いたり、神に祈禱を上げたりする聲が其處ら中に聞えた。

ネフリユードフはタラスと並んでブラットフォームに立ち、列車の徐々と進行するのを見てゐた。男囚の坊主頭が鐵格子の窓から見える車が一つ宛段々行き過ぎて了うと女囚の車で、手巾を被つたり被らなかつたりする女囚の頭が窓から見えた。妊娠女の叫き聲が洩れる二番目が通過すると、マースロワの乗つてゐる三番目で、マースロワは他の女と一緒に窓から首を出して、淋しい微笑を含みつゝネフリユードフを見てゐた。

### 第三十九回

普通の旅客車が出るまで尙だ二時間あるので、其の間に最う一度姉を訪ねやうかと思つた。が、今朝から奔走したり心配したり肝癢を起したり腸を沸えくり返したりしたので、一度に氣勞れが出て、一等待合室の長椅子に腰を掛けたかと思ふと忽ちウツトリとして、ツイ横に倒れて眩暈をするや否、直ぐグッスリと熟眠んで了つた。

するとフロックコートの給仕人がナプキンを手に持つたまゝネフリユードフを腰しに來た。

『モシ、モシ、ネフリユードフ公爵ちやア在らつしやいませんか。御婦人の方が尋ねてゐらしやいます。』

ネフリユードフは喫驚して跳起きさまに眼を摩りつ、元來今まで何處に如何してゐたかと、今朝からのさまぐを現に考へてゐた。

で、囚徒の行列や、警察に擔込まれた死骸や、鐵格子の汽車や、ギシ／＼と車に積込まれた女囚の、一人が臨月でウン／＼叫つてゐると一人は格子に擱まつて悲しげにニヤリとした事やら、何や彼やを現に考へてゐたが、偶つと眼を開くと眼前の景色が全で變つてゐた。

只見ると花瓶やら燭臺やらを陳べ立てた卓子の間を、給仕人が忙がしさうに目眩るしく驅けて歩いてゐた。突當りは果物入りの硝子鉢と共に酒の壺を何本となく列べた大戸棚を背後に背負つた賣子が賣臺の中にお客と相對つてゐた。多勢の旅客は此方へ脊を向けて立つてゐた。

ネフリユードフは漸と現から覺めて、思ひ亂れた心持を徐ろに纏めながら坐り直した時、待合室に居合はす誰も彼もが申合したやうに怪訝な顔をして入口の方を見てゐるのに偶つと氣が

付いた。何事が初まつたかと顧盼いて見ると、仰山に頭髮を飾り立つた老婦人を乗せた椅子を擔ぎ上げたのを眞先きに多勢ゾロゾロ踵いて來る一行があつた。誰有らう、此老婦人はコルチャーギナ公爵夫人で、前を擔ぐ美男の家従も後ろを擔ぐ金筋入り帽子の支關番もネフリユードフが知つてる顔であつた。其踵から前髪を縮らした白いエプロンの美しい侍婢が小さな包やら日傘やら圓い革函に入れたものやらを抱へて隨いて來た。續いて唇の厚い頸の太いコルチャーギン公爵が手輕な旅行帽でやつて來た。ミツシー嬢は従妹のミーシャと列んで、頸の長い咽喉佛の高い交際家のオーステンを伴つて其の踵に隨いて來た。オーステンは相變らずの元氣で、調戲け半分だが面白さうに身を入れてミツシー嬢と話してゐた。一番後は苦蟲を嚙潰したやうな面の醫者が紙苘を燻かしながら殿りした。コルチャーギン一家が都近の別莊からニージニー停車場附近なる公爵夫人の妹の邸へ引越しに出立する處なのだ。

一行の中の夫人の椅子を擔ぐ家來と侍婢と醫者とは婦人待合室へと消えて了つた。見物人は業々しいのに魂消るのもあれば御大層な御威光に恐れ入るのもあつた。聽て老公爵は卓子に就

き、給仕人を呼んで酒と肴とを命じた。ミツシー嬢とオーステンとは何處かの席に就かうとして四圍を見廻してゐる處へ、二人の知つてゐる顔が入口に見えたので周章た挨拶に行つた。其人は即ちネフリユードフの姉のナターリヤであつた。

ナターリヤはアグラフキヨーナを伴れてキヨロくしながら待合室に來ると直ぐ、弟とミツシー嬢とを同時に發見したので、弟には顎で一寸と會釋して置いて、先づミツシー嬢へ挨拶に行き、馴れくしげに接吻してから弟の傍へツカくと來て、

『到底捜し當てたよ、』と云つた。

ネフリユードフも亦ミツシーやミーシャやオーステンに會釋して二タ言三言口を交いた。ミツシー嬢は別荘が焼けたので據ろなく叔母の家に引越す處だと話すと、傍からオーステンが此火事に就て笑止しい話があると話し初したが、ネフリユードフはオーステンの咄などは耳にも入れずに姉に向つて、

『能く來て下すつた。』

『随分早くから來て待つてたワ。アグラフキヨーナと一緒にネ、』と云ひつゝアグラフキヨーナを指さした。アグラフキヨーナは防水服にボンネットを冠り、故と遠慮して少し離れたまゝ、雅かに沈着いてネフリユードフに會釋した。

『方々探したワ。』

『ツイ爰でトロくとやつてました。併し能く來て下すつた。實は手紙を差上げやうかと思つて書掛けました。』

『眞實に、』と姉は聊か氣が揉める氣味合で、『何か復た御用があつて？』

ミツシー嬢初め他の紳士達は二人の間に内輪話がありさうなのを氣取つて遠慮して席を外した。

二人は窓の傍の膝掛や帽子函が置いてある天鵞絨張の長椅子に腰を掛けた。

『實は昨日お別れしてから後で、直ぐお詫びしに引還さうかと思つたんですが、ロゴジンスキ君が再た怎んな穿違ひをされるか解らんの、』とネフリユードフは云つた。『全く僕はムシ

ヤクシヤしてツイ言ひ過ぎたと、自分でも後悔しました。』

『妾はネ、貴弟の心持は決して口で云ふやうな事は無いと知つてますワ、』とナターリヤは一杯溜めた涙を手で拭きつゝ、『貴弟も解つてるワネ。』

姉の言葉は能く解らなかつたが、併しネフリユードフには十分其意味が理解めて染み／＼と動かされた。姉の云ふのは、手頼つてる良人に縋る愛は大切だが、眞身の弟を懐ふ愛も亦大切であるから、二人の間の紛紜はドレ程辛く苦ないであらうといふのである。

『難有う、難有う、』とネフリユードフは云つた。其時二番目の死囚の姿が不圖歴然と心に浮んで来たので、『今日何を見て来たと思ひます？ 囚徒が二人殺されましたぜ。』

『えッ、殺されたツて？ ——如何して？』

『殺されました。此の暑い最中に引摺出されたので、日射病に罹つて二人死にました。』

『まア、まア、飛んでもない。今日——今ですかエ？』

『今です。二人の死骸を見て来ました。』

『だが、殺されたツて貴弟は云ふが、誰に殺されたンです？』

『誰に殺されたツて、此の坎／＼した日中に引摺出したものが殺したんで、自ら手を下さんでも殺したと同様です、』とネフリユードフは姉の云草が良人のロゴジンスキーの口調をつくりなので、矢張ロゴジンスキーと同じ眼で世の中を見るのだと面白からず思つた。

『先ア、どうも、』とアグラフキヨーナは其時二人の傍へやつて来た。

『元來吾々は渠等不便な囚徒達が平生怎んな取扱を受けてゐるかを一向知らんでをるが、併し之は一應心得て置くべき事だ、』とネフリユードフは更に言初した時、彼方の卓子で一杯飲つてゐるコルチャーギン老公爵が頭から胸へナブキンを掛けたまゝ丁度此方を顧睨いたのと眼と眼とを衝突はした。

『ネフリユードフ君、』とコルチャーギン老公爵は聲を掛けた。『如何ぢやネ。暑氣拂ひに一杯飲らんかい。長い道中をする前には一杯飲つた方が宜エぞ。』

ネフリユードフは慇懃に挨拶してから、復た姉の方を向いた。

『だが貴弟、之から何をやる意なの？』とナターリヤは云つた。

『僕の力で出来る事なら何でも仕舞ます。といふが實は猶だ何をして宜いか自分にも見當が付きませんが、何しろ何かしら仕なけりやならぬから、自分の力相應な事をする筈です。』

『あア爾う、解つたワ。だが、あの衆との關係は怎うする意なの？』と片頬に笑を含みながらミツシー嬢の方を一すつと見た。『最う悉皆落着が附いたとは云へますまい？』

『僕は最う雙方共に少しも未練は無いと思ひます。』

『爾う。妾は又何だかお氣の毒なやうな惜しいやうな氣がするワ。妾はミツシーさんが大好きだワ。だけでも爾うだとしても、开んなにまで貴弟の身を縛り付けないでも……彼の……縛り付けないでも……』と有繋に言淀みながら『貴弟は如何しても西比利亞へ行くの？』

『行くのが當然だから行きます、』とネフリユードフは此話を止めにしたさに故と生眞面目にツキラ棒に答へた。が、餘り冷た過ぎると自分でも耻ぢて『何故腹藏なく姉やアグラフキヨナに委しく打明けて聞かせない？』と窺に腹の底で思つたが、何の氣なしに年老つたアグラフ

キヨナの顔を見ると、意氣張上、此女の面前では益々強い事を云つて見たかつたので、

『カチユーシヤと結婚する一條を仰しやるんですか。そんなら御承知の通り僕だけは其決心でありますが、カチユーシヤが斷乎として諾入れませんので、』とネフリユードフは何時でも此話になると聲を慄はした。『カチユーシヤは僕の犠牲を受けるのを欲しないで、却つて彼の境遇に在るものとしては過當なものを犠牲にしやうとしてゐます。けれども唯の一次的の意地であるものを怎うして僕が受けられます。ですから何處までも一緒に、カチユーシヤの行く處まで行つて、僕の力の能ふ限りはカチユーシヤの運命を軽くしてやりたいと思つてゐます。』

ナターリヤは何にも云はなかつた。アグラフキヨナは怪訝な顔をしてナターリヤを見つゝ首を掉つた。

其時コルチャーギナ公爵夫人の行列は再び婦人室から現はれた。前後を美男の家従と玄關番とに擔がしたる椅子の上の公爵夫人は偶つとネフリユードフに目を附け、合圖をして行列を留めさせてネフリユードフを招いた。で、術なささうな遺漸ない顔をして指環を嵌めた白い手を

出して恐く握手を求めた。

『厳しいお暑さでムるノウ。之では身體が續きませんワ。生命が縮んで了ひますワ。』と露西亞の氣候の悪い話を二タ言三言云つてから、是非、顔を見せに來て呉れと誘ひつゝ、『さッ行け、』といふ合圖をした。

『必と訪ねて下され、待つてますぞ。』と云ひつゝ公爵夫人は願盼りさま長い顔を見せた。

一行は再び椅子を擔いで一等室の方へと右に折れた。

ネフリユードフは手荷物を持たした運搬夫と袋を肩に擔ぐタラスとを伴れて左の方へと足を向けながら、『之は同伴の者です。』とタラスを指さして姉に云つた。タラスの物語は既に姉に話してあつた。

二人は斯くて三等室の前に止つて、タラスと運搬夫とは逸早く客車に乗込んだ時、

『三等ぢやアあるまいネ?』とナターリヤは云つた。

『いや、三等にしました。タラスと一緒にです。』ネフリユードフは云つた。『最う一つお咄して置

く事がある。クスマンスキー村の地所ですナ、之は尙だ百姓に與らずに置きましたから、僕が死ねば貴姉の小兒が相續出來ます。』

『お止しよ、其様な事を云ふのは。』とナターリヤは云つた。

『夫から地所の方は百姓に呉れて了つたにしても、其他に猶だ財産があります。僕が死ねば悉く貴姉の小兒のものになります。僕は恐らく結婚すまいと思ひます。——縦令んば結婚したにしろ、小供は必らず出來まいから……』

『其様な事を仰しやるもんぢやアない。』とナターリヤは云つた。が、想うと聞いたナターリヤの包み切れぬ嬉しさは歴然と顔に見えた。

一等室の前には尙だ人立ちがして、コルチャーギナ公爵夫人の容子を覗いてゐた。

旅客は大抵乗込んで了つた。遅れた者は周章てムブラットフォームの板張をカタ〜響かして駈けて來た。驛夫は今や戸を閉めやうとして頻りに旅客を促がしてゐた。

ネフリユードフはムンムとする喘れ臭い車室に入つたが、逆も居堪まれんので車室の背ろの

小さな車掌臺に出て来た。

ナターリヤは流行の帽子にケープを肩に掛け、アグラフキヨーナと並んで車室の側に立ち、何か云ふ事は無いかと憶出さうとしてゐたらしかつた。

が、別れ際の常文句の『消息をして』といふ言葉をすらすら、児供の時から二人して遊びごっこに言古るしてゐたが、此場合ツイ言ひそゞくれて了つた。

尤も財産問題の鳥渡した話をしたのが姉弟間の柔しい人情を打破して了つて、妙に更まつた他人行儀となつて、二人ながら互に頸を絞められるやうな變な氣持がした。漸く汽車が進行し出した時ナターリヤは初めて吻と息を吐き、名残惜しさうに首を掉りつゝ、『さよなら、さよなら』とばかり云つた。

が、汽車が過ぎ去つて了つた時は、弟と會見した顔末を何と良人に話したものと途方に暮れた氣色が顔に現はれた。

ネフリユードフも其通りで、元來は姉に對して極柔しく、之まで何に由らず隔意なく打明け

て相談したのが、今では姉に對うと何となく氣無精で面白くなかつたから、却て別れて了ふ方が快かつた。昔の極親睦しの姉は最う既に亡くなつて了つて、奇怪極まる卑劣な毛むくじやらな高慢ちきの男の奴隷が姉の身體を借りてゐるのだ。現に耻知らずのロゴジンスキーめを利益する財産相續の一條を語つた時の姉の顔が俄かに生き／＼と元氣附いて來たのも今の姉の心持が歴然と解る。と、慙う思ふと如何にも情なくなつた。

#### 第四十回

ネフリユードフの乗込んだ三等の大容量車は一日、日向に晒されてゐたから、車内は蒸れて非常な暑さであつた。迎も沈としてゐられぬから車室の背ろの車掌臺に出てゐるだが、其處だつても根ツから涼しくなく、漸く車動き出して停車場を外れてから、僅かばかりの風がそよ／＼と吹いて來た。

『囚徒が二人殺されましたぜ、』と姉に答へた言葉を偶つと憶出すと共に、萬感交々湧出づる中

に、今朝眼前に見た悲惨な死骸——殊に二番目に目撃した美男の紫色になつた唇に泛べた微笑やキリッとした男振や青々と刺つた頭の下したの小さな形状の好い耳が驚くべきほど歴然と心に泛んで来た。

『殊に奇怪な』とネフリユードフは腹の中で考へた。『見す／＼殺されてゐながら、誰に殺されたのか、責任者が解らんのだ。實に奇怪極まる。だが、殺されたには違ひない。本はといふと、あのマースレニコフの命令で、此の炎天に監獄から引出された爲めだが、當のマースレニコフは頭書を印刷した用紙に拙い字で記名をしたばかりだから、自分に罪があるとは決して思つてゐないだらう。況して囚徒の健康診断をした監獄醫は、職務を鄭重に盡して健康不健康を區別したに違ひないから、神ならぬ身の如何して今日の嚴しい暑さや、カン／＼した日盛りを大勢の喘れに蒸されて行く危険を知るわけがあらうや。然らば典獄はといふと、典獄は唯だ男女の囚徒若干を何時何日に送らせといふ命令を奉じて行つたばかりである。護送の士官とても亦其通り、或る場所から囚徒を請取つて他の場所へ引渡す役目を行つ爲めに例の通りに引率

たので、現に目撃したやうな如此な強壯な人間が途中で堪へられなくなつて斃れ死にしようとは夢にも思はなかつたらう。すれば誰にも罪はないのだが、併し渠等は矢張殺されたのだ。自ら罪ありと認めて責を引く事の出来ない人達に殺されたのだ——

『と云ふは畢竟——』とネフリユードフは考へた。『知事と云ひ監獄吏と云ひ警察官と云ひ、渠等は人間當然の人情が全く必要でない境涯が有ると思つてゐるからで、マースレニコフにしる典獄にしる護送役人にしる同じく人間であるからには全然人情を知らぬわけは無い。若し渠等が知事や監獄吏や警察官でなかつたら、如此なカン／＼した炎天に長らく日の目を見ない多勢の人間を引出さうてには二十遍も首を捻つて躊躇したに違ひない。愈々引出した處で必ず途中で二十遍も休息したに違ひない。若し又弱つて呼吸の喘むやうな病人が出来たなら必ず日蔭に入れて水や藥を呉れて十分手当をしたに違ひない。夫でも不慮な變事が起つたら必ず悲んで止まなかつたに違ひない——』

『處が渠等は一尙平氣で、自分達が人間當然の道を盡さないばかりか、他のものがヤレコレと



不便がつて世話をするをさへ嚴ましく叱り付ける。渠等は囚徒を人間と思はないから人間に對する義務を盡さないで、唯だ自分達の役目だけを重視し、官吏の職務を以て人間の道德關係以上だと思つてをる。之だ、之だ、之で萬事が解釋される。吾々は、縦令片時にせよ、縦令或る例外的場合にせよ、吾々同胞に對する愛以上に大切なものがあるとも思はなければ、怨ういふ非人道を無責任に行つて退けて、シカモ罪惡だとも思はずに平氣の平で冷ましてゐられるわけが無い。』

と左さま右うさま考込んで前後を忘れてゐると、天氣が何時の間にか變つて來た。斷れ／＼の雲が低く走つて度々日を蔽したが、其中に薄墨色の雲が西の空から起つて見る／＼中に廣がつて來たかと思ふと、既／＼遙か彼方では夕立が畑や森に落ちてゐるらしく、空氣は段々濕ッほくなり、折々電がビカ／＼して、汽車の響と共に雷がゴロ／＼破めき出した。其中に雲は次第に近くなつて、風のまに／＼ボタツボタツと雨が落ちて來た。ネフリユードフは車掌臺の片端へ行つて、冷たい新しい空氣を呼吸し、暫らく雨に渴えてゐた穀類や乾き切つた地面の臭ひが

する中に立つて、畑や、森や、黄色の裸麥の畑や、青々した燕麥の畑や、青味掛つた黒い蔓に花の咲く馬鈴薯の彼地此地に見えるを餘念なく眺めた。萬物皆雨に濡つて、緑は愈々緑に、黄色は愈々黄色に、黒は愈々眞黒に色を増して來た。

『最／＼と降だ。』とネフリユードフは此の夕立の恵に濡ふ畑や田を眺めて嬉しさうに云つた。が、夕立は唯つた一としきりで、雲の一部分は雨となつて落ち一部分は散じて了ひ、日は再び雲間から現はれて葉末に宿る露や水溜にキラ／＼と反射し、東の空には美しい虹が低く現はれて、殊に堇色が一と際鮮かに見えた。

『さア、何を考へてゐたのだ。』とネフリユードフは自ら質問した。丁度天氣の急變が一段落附いた頃、汽車は今、兩側の切立つたやうな開鑿路の間を進行してゐた。

『オ、爾うだ。知事とか典獄とか警察官とかいふ官吏の事を考へてゐたのだ。個人としては渠等も亦大抵は善人だが、役人となると直ぐ殘酷になる。』

と考へつゝ偶つと憶出したは、獄内の容子を話した時、平氣で聞流しにしたマースレニコフ

の冷淡さ加減、停車場へ行く途上に或る囚徒が馬車に乗りたいたと云つたのを權もホロ、に叱り飛ばしたり、現在臨月の女が車内で咩々唸つてゐるのを耳にしながら人が忠告したのも受付けなないで平氣な顔をしてゐた護送士官の無情殘酷。渠等とても人間であるからには萬更人情を知らない事ではあるまいが、畢竟役人をしてゐるばツかりに極解り切つた普通の人情さへも全で臍に入らんのだ。

『渠等は役人であるお底に普通の人情さへ解らぬ。丁度石を敷いた道は雨が降つても水が浸込まないのと同様である。』とネフリユードフは恰も左右の斷開いた壁に種々な色の石を奇麗に積み重ねた上を水がドツドと流れても一向浸込まないのを見て、腹の中に考へた。『斯ういふ切落しには石を疊んで水を流すのが土工上必要かも知れんが、併し此上に生えてる團物や果樹や草や木は其のお蔭に濕りを得ないのを悲しんでゐるかも知れない。人間とても矢張此通り、知事とか典獄とか警察官とかは政治上必要かも知れんが、人間の一番大切な人情即ち人に對する愛憐の心を職務の爲めに缺いで了うといふは實に情ない事だ。ツマリ斯ういふ連中は本來法律で

無いもの(即ち人間が治者の)を法律として認めて、神が人間の心に刻み付けた永劫不磨の眞正の法律を却て全で認めてをらんのだ。之だから渠等と一緒にゐると妙に壓へつけられるやうな氣がするので、渠等は實に恐るべしだ。盜賊よりも更に一層恐るべしだ。左に右に盜賊は若干かの哀れといふ事を知つてゐるが、渠等は全で知らんのだ。石が水を流して了つて水を草木の養ひとするのを知らんのと同様だ。アガチエーフやラージン(日本なら石川五右衛門とか)を大悪黨だと云つて恐れるが、官吏の恐るべきは寧ろ渠等に千倍過ぎてをる——』

『假に心理學上の問題として、怎うしたら篤信の善良な親切な善人を最も恐ろしい罪惡を犯しても罪惡と思はないで平氣でゐられるやうな人間とする事が出来るだらうかといふと、何でも無い。現在行はれてゐる事をすれば可也ので、即ち渠等は知事となり典獄となり警察官となりさへすれば罪惡を罪惡と思はずに犯す事が出来る。渠等は官吏を以て吾々の同胞たる人間を同胞と見ないで物品として取扱う事が出来る一種の職業であると思ひ、此職務の爲めにした行爲の結果に對しては個人の責任は全く無いものと信じてをる。斯ういふ條件が無ければ現在目前

に見たやうな残酷無慈悲が決して行はれる筈がないので、ツマリ渠等は世の中に人間同士が愛なしに交渉し得る境涯があると思つてゐるから斯うした了簡になるのだが、這般な境涯が決して有るわけが無い。若し物品に對してなら、例へば木を伐るとか煉瓦を焼くとか鐵を鍛へるとかなら愛がなくても交渉が出来やうが、人間同士の間では愛がなくては一日たりともをられるものでない。丁度蜂に對しては始終用心しなければならぬと同様で、若し迂濶り油斷して蜂に近づいたなら、蜂を殺して了うか、でなければ此方が蜂に螫されて了う。人と人との間も其通りで、人類相互の愛が人生の基礎である以上は愛がなくては何事も出来ない。勿論、働かせざる事なら少と強でも出来やうが、愛の無いものに強に愛を持たせやうとしても迎も駄目だが、左ればと云つて、愛が無くても人間同士は交渉が出来るといふ理窟は決して立たぬ。殊に人から何物か求めやうとした場合は猶更である。であるから萬が一にも愛を知らないといふ人があつたなら、願くは品物なり或は自分自身なり或は何なりと自分の好きなものだけと勝手に暮して貰ひたい。斷じて人間交際を止めて貰ひたい。腹が減つた時物を食ふのは害がないのと同様

に愛を以て人に交はる時は何等の害がないばかりか十分な利益がある。但し愛なしに人に交はる、例へば昨日自分が姉婿に對する態度のやうであつたなら、汝の受くる苦痛の限りないのは自分の之までの生活が良く證明してをる。其通り、其通り、眞實だ、眞實だ！」

とネフリユードフは腹の中で反覆繰返した。

夕立の一とききりで燗くやうな苦熱を洗ひ去つた涼しさと、長らく鬱結した疑問を一時に解釋する事が出来た自覺とで、俄に蒼々しい快い心持になつた。

#### 第四十一回

ネフリユードフが乗込んだ車室は半分だけしか乗つてゐなかつた。どれも之も皆雇男や勞働者や職人や屠獸者や猶太人や小商人や職人の女房や兵隊ばかりであつたが、其中に露出しの腕に腕環を穿めた奥のん風の年増と若い娘と徽章付きの大黒帽を被つた嚴かしい面をした官吏風の紳士だけが目に立つた。何れも席に就くまではガヤ／＼と喧ましかつたが、漸と座が定まる

と静かになつて、蜀葵の種を嚙潰したり煙草を燻かしたり喫べつたりしてゐた。

タラスは通路の右方にネフリユードフの分までの席を取つて、相對ひに腰を掛けた鈕釦なしの小倉服を着た岩疊作りの男と頻りに興に入つて愉快らしく話し込んでゐた。此男は新規に口が出来て田舎へ行く植木屋であるのが後で解つた。

ネフリユードフはタラスの傍へ行かうとして、通路路の中途に偶つと佇立ると、更紗の服を着た白髪の村年寄めいた老爺が、ツイ其傍で百姓服の若い女と頻りに話してゐた。此女の隣席には矢張百姓服を着て百姓風に頭を手巾で包んでる七八歳の小さい女の兒が限界無しに蜀葵の種を嚙潰してゐた。

老爺は偶つと願ひいてネフリユードフを見ると、衣服の裾を片寄せつゝ隅の方へ小さくなつて、ネフリユードフを見ると、明るい場所を空けつゝ頗る慇懃に、

『爰に席がありやすよ。』

ネフリユードフは禮を云つて席に就くと直ぐ女は再び前の話を續けた。

女はモスコに稼いでゐる亭主に會ひに行つて、今、村へ歸る處ださうで、久し振で亭主を嬉しがらしたといふ惚け咄を話してゐた。

『お精進祭の時にも會エに參りやしたが、神様のお蔭で復た會つて來やした。クリスマスには復た行くべエと思つてやす。』

『それが宜エとも、』と老爺はネフリユードフを見ながら、『あんでもハア煩セエ位會エに行つた方が宜エとも。若エものは一人でおツ放して置くと餘な所爲はしねエからノウ。』

『何の、お前さま、俺ア良人に限つて其様な心配ぶつ事ア要りましねエ。夫りやア夫りやア、爪尖んばかりも馬鹿アする事アねエだに。恰でお前さま、娘ツ子みてエに儲けたお金は一文残らず送つて來やすダ。爰に居りやすが娘でふりやすが、此子の顔さア見るのを何よりも樂みにしてをりやすダ。』と云ひつゝ女は莞爾りした。

小さな女の兒は蜀葵の種を嚙潰しては穀を吐出しつゝ阿母の咄を聞いてゐるが、宛も其咄の通りだと云はぬばかりに沈着いた利發らしい眼で老爺とネフリユードフとの顔を等分に見た。

「其様に固エならお前さんは幸福ぢや」と老爺は云つた。折から彼方に腰掛けてゐる職人らしい夫婦者の、亭主が仰向いて埒の口からウオツカの喇叭飲をしてゐる傍で、女房が壘の袋を持つて眠ッで見守つてゐるのを顔で指しつ、

「お前さんの御亭主も矢張あれをやるけエ？」

「良人は酒も飲みましねエ。煙草も喫りましねエ」と女は老爺に向つて復た亭主の自慢が出来ゐるのを嬉しがりつゝ、「眞實にお前さま、良人みてエな堅固造は滅多とありましねエや」と今度はネフリユードフに向つて、「如斯いふ人でムりやす。」

「そりやア先ア何よりか一番宜エ事ぢや」と老爺はウオツカの喇叭飲をしてゐる職工らしい男を見ながら云つた。

すると丁度、男は酒を喫み了つてから女房に徳利を渡すと、女房は笑ひながら合點して今度は自分の唇に徳利を當てた。で、ネフリユードフと田舎老爺の二人が自分達を見てゐるのに氣が附くと、男はネフリユードフに向つて、

「ヘッヘッ、旦那。旦那は俺ちが飲つてゐる處を見やしたネ。俺ちが飲つてゐる處は誰でも見てゐるやすが、俺ちが稼いでゐる處を知つてゐる奴は一人も無エ。之でも俺ちは自分で稼いだ錢で酒を喫つちやア、嬢アばかりを大切がつてゐるお目出度エ野郎でがさア。」

「爾うかい」とネフリユードフは何と云つて可いか解らぬから唯だ調子を合はした。

「全くでけす、旦那。俺ちの嬢アは豪エ女で、俺ちを大切にしてくれやすから、俺ちも嬢アを可愛がつてやりやす。なアお前、爾うぢやねエか、マーウラ？」

「さア、お前さん、飲んでお了ひよ。妾ア最う澤山」と女房は亭主に徳利を戻しつ、「何をお前さんは下らない事を云つてゐるんだよ。」

「此通り、ホラ御覽なせエ。親切な可愛い奴でけせう。眞實に親切なお人好しですが、之で時々、唐突に油の切れた車のやうなキイ／＼聲をお出し遊ばしやアがる。なア、マーウラ、其通りに違エねエナ。」

マーウラは笑ひながら微酔氣味で手を振り上げて、

『復たお株が初まつたよ。』

『其通りぢやねエか。なア旦那、俺ちの癖アぐれエ溫和しい親切者はありやせんが、これで旦那、手綱が間違つて尻尾へでも當つたら大變でけす。怎んなに跳上るか解りませんぜ。眞個でけすとも。はッはッ、旦那、眞平御免ねエ。お酒が利いて來やしたから、鳥渡くら御免を蒙むるべエか。』と云ひつゝ轉つと倒れて、莞爾々々笑つてる女房の膝を枕に睡支度をした。

ネフリユードフは暫らく田舎老爺の對手になつて老爺の身上咄を聞いてゐた。此老爺は竈職人で、五十三年間稼ぎ通して數の知れないほど澤山な竈を作つた。そろ／＼隱居をしたくなつたが、何分樂が出来ないで今度はモスコフへ悴の奉公口を捜しに出掛けて今が歸途であるさうだ。此咄を最後まで聞いてから、タラスが取つて置いて呉れた自分の席へと戻ると、

『さッ、お掛けなせエ。袋は此方へ片付けやせう。』とタラスと相對ひの植木屋は到つて心安だての調子でネフリユードフの顔を見た。

『些とベエ窮屈でも密着く方が宜かんべエ。お互は最う友達交際だもの。』とタラスは笑ひながら羽毛でも入つてるかと思はれるやうな軽い袋を窓の方へ持つて行き、  
『之で樂に掛ける場所が出来やした。尤も掛けられねエけりやア立つてる分だ。腰掛の下へ潜り込んで轉がつても俺らア窮屈ベエ駄目エ吐く事は無エだよ。』と云つた時のタラスの顔は嬉しさに莞爾々々してゐた。

タラスは酒を呑まないと言口が利けない。酒さへ飲めば思ふ言葉がスラ／＼と出て何でも言へると常から云つてゐたが、全く其通りで、覺醒の時は何時でも寡言だが、酒を呑み出すと——尤も偶さかの祝儀不祝儀か何かでなければ酒を飲む事は決して無いが——飲みさへすれば必ず上機嫌で饒舌り出す。到つて淡泊に心置なく柔しい愛嬌のある碧い眼をしては始終莞爾ついでベラ／＼と饒舌り立てる。

丁度今日は此の御機嫌の日だ。ネフリユードフが來たので話の腰を折られたが、袋を片付けてから座に戻ると、巖疊な兩手を膝の上に組合せつゝ、植木屋の顔を睨と見ながら再び話の續きをした。タラスが此の親昵になりたての友達に話してゐるのは女房の身の上咄で、女房が西

比利亚に送られるやうになつた犯罪の顛末から自分が一緒に隨いて行く氣になつた一伍一什を委しく話してゐる處であつた。ネフリユードフも尙だ精しい話を知らないから、タラスの話を面白く聞いた。

丁度今、話し掛けてゐたのは、毒殺騒ぎが發覺してフキョードーシヤの仕業と解つた處で、『俺がいんま話してゐるなア、俺らア家の紛紜でがんです、』とタラスは馴れくしい粗末な口調でネフリユードフに向つて、『此様な思遣りの深エ仁に會つたのも何かの因縁だツベエから、之までの騒ぎを洗エざれエ話してゐる處でがんです。』

『左様か、』とネフリユードフは云つた。

『處でお前様、其一件が露顯ツちまやした。阿母は太く腹ア立つて、毒餿頭を證據に警察へ訴へるベエ騒ぐだ。阿爺は人が好エだから、先ア〜騒ぐ事ア無エだ。俺がの嫁ツ子は尙だ孩兒で、あにも知んねエだから勘辨のウしてやれと阿母を和めやしたが、阿母は頭を振つていつかな事諾きましねエだ。——此様な方圖も無エ惡戯をされても眼を閉つて放擲らかしといたら、』

いんまに家内中が油蟲見てエに捻り潰されるも知んねエだ——と、到頭お前様、警察へつツ走つて訴エた〜から、巡查が直ぐ出張つて俺らア女房を拘引て〜といふ豪エ騒ぎが持ち上りやした。』

『夫からお前さんは如何してたエ?』と植木屋は訊いた。

『俺やハア腹中が轉覆返る様に轉け廻つて、留度なく反吐を吐く。舌が硬くなつて動かなくなる。最う駄目だ、最うおツ死ぬベエと思やした。其間俺らア阿爺は荷車に牡馬を付けてフキョードーシヤを乗つけて警察から裁判所へ行かれて行きやした。處でお前様、フキョードーシヤは初手から覺悟を定めてやしたから悪びれもしねエで、毒藥を手に入れた事から毒餿頭を製エた顛末をベラベラ白状しちまやした、其様な大それた事をあんで仕出來したツて、判事様が訊かつしやると、フキョードーシヤの返答が、『俺ハア那様な男が大嫌エだから、那様な奴と一緒に暮すよか西伯利亚ア行つた方が宜エだ、』と恚う返答打つたもんだ。那様な男とは俺らアこんでがんです、』とタラスはニヤリと笑つた。

「如斯に思切りよくフキヨードーシヤは白狀ベエしただから、自然と先ア監獄へ投込まれるツてわけで、俺らア阿爺は獨りほつちで戻りやした。處がお前様、刈入時になつて、猫の手でも借りてエ位エ忙しくなりやした。俺らア家中に女の手と云つたら阿母一人で、加之に身體ががい弱エと來てるから、怎うにも焦うにもなりましねエだ。夫だでお前様、何卒してフキヨードーシヤを保障ベエして貰う事は出來めエかと、俺らア阿爺アお役人ンサア許へ相談ベエ行つた處が、駄目でがんした。夫からお前様、誰が宜かんベエ、彼が宜かんベエと五人まで相談打つたが、誰に訊いても駄目だつて云ふだ。カラ最う仕様がねエと斷念めてやすと、偶つと警察の書記に會ひやした處が、お前様、此野郎が尋常ならねエ賢エ奴だから、何としたら宜かんベエと相談打つと、五兩出したら放免出來るやう計らつて呉れると云ふだから、五兩は高エから三兩に負けて呉んると、到頭三兩で相談ベエ着いた。處がお前様、何たん事だツベエ。俺らアお前様、フキヨードーシヤが手織の麻布を質に曲けて三兩算段ノウして渡しやすと、現金なもんで、直ぐ書面を書エて呉れやしたから、俺らア毒中りは最う快癒つて床を揚げてやした

し、直ぐ其足で女房を迎エに行きやした——。

「夫から俺やア町へ行つて、宿屋の庭に馬を預けて置きやして、直ぐ書面を持つて監獄へ参りやした。あんたら用があるだ？」。「用があるだから参りやした、俺らア處の女房が監獄に入つてるのを迎エに來やした。」「そんだったら願書を持つて來たか？」。「持つて來ましねエで、」と書面を出しやした。するとお役人の衆は書面を請取つて讀んでやしたが、「暫らく待たツしやい」と云ふだから、俺、腰掛に首イ長くして待つてやすと、別のお役人が出て來やして、「タラスてのは和郎か？」「へエ、俺でムりやす。」「可也く、汝の女房を許してやるだから伴れて行け、」と云ひやして、開門してフキヨードーシヤが突出されやした。衣服も伴れて行かれやした時の通りで、疲れてもるねエで、無事でがんだから、俺やアは嬉しくて、「汝、先ア能う無事でベエゐて呉れた」と云ふと、「お前様は歩いてムらしやツたか」と云ふだ。「馬鹿ア吐く勿。馬ア引張つて來たダ」と、夫から俺やア、馬を預けた男に錢を呉れて、馬秣を積ん載せてから、其上にフキヨードーシヤを座らせベエと布帛を敷きやして、シヨールに纏まつた女房を伴れて村



へ歸りやした——

『フキヨードーシヤは羞恥るがつて何とも云はねエだ。俺もハア沈黙だつた。到頭家の近所まで来ると、「阿母さアは如何してらだ？ 無事か？」と訊きやした。「無事だ。」「阿爺は？」「阿爺も無事だ。」「そんたら安心だ。眞に濟まねエだつた。俺が馬鹿で如此な騒ぎを至上らして何とも謝辭が出来ねエ。勘辨ノウして呉れ。怎うして如此な事ベエしたか、我身で我身が解んねエだ、」と云ひやした。夫から俺やア「口でベエ云つたつて駄目だ。汝、悪かつたと思つたら之から働らくだ。俺やア既に勘辨ノウしてらだ」と云ひやしたら、女は最う何とも云はねエで涙ぐんでやした——

『夫から家へ歸りやすと、女は阿母さア膝の下に突俯して了やした。阿母は「最う心配する事アねエだに。神様が許して下さるだに、」と云ひやした。阿爺は阿爺で、「汝よく無事でゐて呉れた。濟んだ事は濟んだ事で仕方がねエ。之から氣イ付けて罪亡ほしにウンと稼がツしやい、最うく何にも心配する事は無エだに。刈入時で手も足も足りねエだから、汝も明日からタラス

と一緒に稼ぐが宜かんベエ。先ア野良へ行つて見て來さツしやい。神様のお庇で麥の穂がツツシリと首垂れて鎌の刃が當てられねエほど豪ア能く出來てるだから、汝ア明日から精神を入れ更へてウンと働かツしやい、」と云ひやした——

『夫からてもの。お前様、フキヨードーシヤの女の働くことは、村の家がみんなアツ魂消やした。俺らア小作ベエしては三デシヤーチンばかりでがんですが、有がてエ事に魂消るほどの收穫で、俺らア刈る時は二人して束ねやした。俺も働らく方では人には負けまじねエだが、フキヨードーシヤの女は俺から見ると復た一倍働きやした。あんだつて頭ねエ伶俐者だし、年は若エし、がいに元氣があるだから、働き出したら眼が廻るやうで、其様に働かねエでも可エだと俺が留める位でがんした。でがんすから野良から歸ると二人とも指が腫れて腕節が痛ひやしたが、フキヨードーシヤは歸つてからも休息しねエで、夜業に明日の支度ベエするといふわけだ、如此に萬事が變つて了やした。』

『處でお前さんへの仕向けは如何だネ？ 些とはお神さんは親切になつたかネ？』と植木屋は

訊いた。

「俺にけエ？ 親切の柔しいのツて、骨が無かつたら一緒になるべエツて嘸りつくやうなわけ  
で、俺が思つてる事は何でもハア合點んでやす。でがんすから一番腹ア立つてる阿母でせエ  
が、俺がのフキヨードーシヤは全で變つて了つたダ、違つた女ツ子になりヤンした。」と云ふく  
れエで、或る時、俺らア二人で刈つた束を車へ積んで行きやした時、俺やア女に向つて、「フキ  
ヨードーシヤ、汝ア如此に一つ車を牽かうとは思はなかつたベエ。」と云ひやすと、「眞によ、如  
此に仲よく暮すとは思ひましねエだつた。お前様と一緒に暮すなら寧そおツ死んだ方が宜エと  
思つた事もあるだ。」と云ふだ。夫から、「今でもけエ？」と訊くと、「今はお前様、俺がの心はお  
前様の心の中にあるだ。」と慙う云ひやしたよ——」

とタラスは嬉しくて堪らぬやうにニタリと笑つた。が、忽ち復た眞摯になつて首を掉りつ  
とタラスは嬉しくて堪らぬやうにニタリと笑つた。が、忽ち復た眞摯になつて首を掉りつ  
「處がお前様、刈入が漸とこさとお終エになるやならぬエ中、或る時でがんす、俺が麻を晒し

に行つて歸ると——」とタラスは言葉を途切らして物と息を吐き、「歸るとお前様、呼出しが來  
てエるだ。俺やハア忘れて了つたヨから、何たら呼出したツベエと訊きやすと、愈々フキヨ  
ードーシヤが吟味されに呼出されるといふだ。俺やア最うアツ魂消やした——」

「全く魔がさしたんだネ。」と植木屋は云つた。「人間が人間を殺すなんて考が起るわけのもんで  
無エ。俺ちの方にも慙ういふ人があつた。」と新たに咄を初めやうとした時、汽車の進行は次第  
に遅くなつて忽ち停車した。

「やッ、停車場へ來た。ドレ、下りて水でも飲まうか。」と植木屋は云つた。

茲で咄は途切れて了ひ、ネフリユードフは植木屋の踵から續いて車を下りて、夕立に濡れた  
ブラットフォームの板張へと出た。

#### 第四十二回

下車する前からネフリユードフは數輛の立派な旅馬車が停車場の構内に待つてるのに氣が付

いた。何れも逞しく能く肥えた馬の三頭立又は四頭立で、馬具に附けた鈴がチャリン／＼／＼／＼鳴つてゐた。で、雨に濡れた板張のプラットフォームに下りると、一等室の前に多勢人が立つてるのが眼に留つた。中にも一と際目立つは尋常勝れて肥つた立派な婦人で、無類飛切の鳥の羽を飾つた帽子に防水雨具を着て、スラリとした脊の高い脚の細い自轉車服の少年と列んで、贅澤な首輪を穿めたムク／＼肥つた犬を伴れてゐた。此二人を先頭に傘や風呂敷包を持つ従者が馭者と共に、何れも汽車の着くのを出迎へに來たのだ。

上は肥満した婦人から下は長上衣の馭者に至るまで、出迎への連中は何れも有福な氣樂さうな極印付きで、物見高い物好き連——赤い帽子の驛長、憲兵、夏になると汽車の着く度毎にウロ／＼見物に來る南京玉の首飾りをした露西亞服の若い女、電信局員、旅客、其他の男や女や——恠ういふ連中が珍らしさうに集つて來た。

忽ち氣が付いたのは、此の犬を伴れた少年は中學校で勉強中のコルチャーギンの息子で、肥満した婦人は即ち公爵夫人の妹だ。コルチャーギン一家が目指して來たのは此婦人の邸である。

金筋入の制服にチカ／＼光らした爪先の尖つた靴を穿いてる車掌は、汽車の圈を排いて恭やしく扉の把柄を持つたま／＼コルチャーギン一行の下車する間、立つてゐた。家従のフキリツプと白い前垂掛けの家僕は疊み椅子へ長い顔の公爵夫人を乗せたま／＼大切に氣を付けながら擔ぎ出した。公爵夫人は出迎への妹と顔を見合せて會釋すると直ぐ二タ事三事の佛蘭西語が姉妹の間に換された。箱馬車が割幌か何方が好いかといふ話である。聽て一行は出口の方へ行つた。日傘や革の箱を持つた前髪を縮らした美しい侍婢が殿りをした。

ネフリユードフは復た此連中と顔を合はして挨拶したり。暇乞したりするのを面倒臭く思つて、一行を遣り過して了うまで暫らく待つてゐた。

公爵夫人と息子さんとミツシー令嬢と醫者と侍婢とは先きへ出て、老公爵と義理の妹だけが後に残つた。ネフリユードフは遠く離れてゐたから、二人の話は途切れ途切れの佛蘭西語が折々聞えるだけで、何を話してゐるのか一向解らなかつたが、能くある事で、公爵の言葉の中で唯ツた一言だけが恠ういふ道理だか知らぬが、聲から調子まで耳の底に残つた。

『爾うよ、あの男は上流だよ、上流だよ。』(Oh, il est du vrai grand monde, du vrai grand monde)と老公爵が車掌や運搬夫を随へて義理の妹と列んで停車場を出やうとした時、聲高に獨り合點の早調子で誰かの噂をした此言葉が不測に耳の底に残つた。

此時、停車場の一隅から木靴を穿いた一隊の労働者が羊の皮の上衣の上に袋を背負つてドヤ／＼とやつて来て、束々と一番近い車を目掛けて乗らうとすると、忽ち車掌に追拂はれたので、周章て臭つて駈出して、蹶ついたり跳けたりしながら次の車へ行き、中には首尾よく乗込んだものもあるが、袋を肩から卸して入口の隅に置かうとしてゐると、又一人の車掌が停車場から此體を見るや否、忽ち怒鳴り付けて叱り飛ばした。喫驚して周章て、車を降りて、今度は又其次のネフリユードフの車へ乗らうとした。車掌は復たもや叱り飛ばさうとする途端、ネフリユードフが澤山空席あるから乗るが好いと云つたので、渡りに船と一行は大喜びでネフリユードフの踵から隨いてドヤ／＼と乗込み、各自奥の方へ行つて席に就かうとすると、徽章の付いた大黒帽の紳士や奥さん達は汗臭い百姓連に座り込まれては堪らぬと、ブン／＼怒り付けて追出さ

うとした。

労働者達は残らずで三十人ばかりだ。中には老人やズブ若いものもあつたが、何れも浮世の波に揉まれた疲々しい日に焼けた瘦男ばかりだ。で、漸つと安心して腰を掛けやうとすると復た乗合の紳士に叱られたので、喫驚して一端卸した袋を擔いで逃出しに掛つた。渠等は頭から自分が悪い事をしたものと定めてゐるらしく、叱られれば叱られるまゝに車から車へと世界の果へまでも行く了簡で、何處へなりと——縦令針の山であらうと、座れと云はれる處で座る意なのだ。

『こらく、何處へ行く、』と、出會頭に復た違つた車掌から叱られた。『間拔め、其處らへ腰を掛けんか。』

『ちよいと妙な事が有つてよ、』と若い娘風の女は佛蘭西語で云つた。確かに佛蘭西語の上手な處をネフリユードフに聞かせやうといふ腹に違ひない。

腕環を穿めた奥さん風の女は仰山らしく眉を聳めて苦々しい顔をして、汗臭い塵埃臭い労働